

910.28-Mi84ウ



1200500754593

910.28
Mi84
⑤



始



36

91028
M=84

著子戊田宮

究研新の規子岡正

行發閣文叢京東



679-200

序

文學論と文學史とは二にして一なるものである。どうあらねばならないかの文學論は文學史の中に十分生かされなければならない。

従來の文學史家が結果によつて成因を斷ずる、勝てば官軍式の方法をしか有しないことはもはや明らかになつた。かゝる方法の正しくないのはいふまでもないが、どの位これらの史觀が人を誤つてゐるかは想像の外にある。

「古典を史的斷面において批判せよ」といふ合言葉がこれに代る方法としてとり上げられる。史的斷面における評價といふことは、すでに先進評論家達に明らかにされたやうに當時の社會的諸關係の分析によつて、當該社會の進歩的階級に實現される社會の方向を見究め、當の藝術家なり、作品なりが積極的モメントたり得たか否かを検討することに外ならない。

だが文學がその作者を離れて投げ出された瞬間から、それは固定したものとして當該社會に作用する。しかし社會は決して固定したものではなく、絶えず生成への過程を辿つてゐるものであるから、それが現代的價值も絶えず追求・批判せられねばならない。文學論と文學史とが互に否

定をしつゝ進まねばならない理由の一つである。

歴史は決して單なる昔話ではなく、どうあるべきか、どう進むべきかの生きた指標である。したがつてその藝術家の事蹟の老大な資料を、いかにして史的研究の對象たらしめるか、重要なことなのである。文學史論の對象は、人物でもなく、又書物でもなく、實に文學の歴史——即ち、歴史の流れがどう流れつゝあるかに關する説明の學である。(岩永胖氏『日本文學の方法論』)したがつてその流れを突きとめるためには、科學による方法を必要とするのだ。

またその流れをつきとめるには、他の歴史・藝術史とも聯關的に考へられなければならない。例へば子規のリアリズムを理解するには、明治文學一般のリアリズムの流れを観なければならず、そのリアリズムがどうして反對物たる蕪村調に轉化しなければならなかつたかは、子規個人の生活——したがつてそれはその身を置いた社會關係に根をもつもので、それへの理解なくしては了解しがたいし、その後の新傾向自由律を見るには、此國の自然主義の流れを見なければならず、且つそれをさうあらしめた背景を見なければならぬ類ひである。

本書は完璧なものではなく、相當誤謬もあることと思ふが、しかしそれは敢て辯解するまでもなく、新しい方法によつてもを觀ようとする場合にあり勝のことであり、この點で古いものを固

執しようとする保守的な人々の批難を豫期してゐる。けれどもこの種の批難には私の史觀は微動だもしない。然し既往の俳句史や子規研究が徒らに偶像崇拜か、それでなければ資料の八幡の藪に、重要な發展の進路を模糊たらしめてゐるに比し、少くもそれを見ようと志してゐることだけは炯眼なる讀者には分つて貰へることと思ふ。さうすれば本書の存在意義は十分あることゝ密かに自負してゐる。

既に價値批判が固定したものでなく、社會の現實によつて流動するものである故に、此研究も更にヨリ高次の立場で止揚される時があるだらう。既往の史觀による批判に驚かない私も、この批判の前には服さねばならない。今はさういふ時代の早く來ることを念するのみである。

なほ書中書目に附した『は既に單行本として出てゐるもの、』は雑誌・新聞に掲載されたまま全集に收められてゐるものである。

終りに臨んでこの出版を引うけて下さつた叢文閣の好意を感謝しておく。

昭和十年六月

宮 田 戊 子

正岡子規の新研究・目次

序 説……………一

第一篇

第一章 子規の生涯……………五

一、時 代……………五

二、生ひ立ち……………一三

三、日本新聞時代……………三三

四、從 軍……………四〇

五、病褥に於ける活動……………四五

〇 第二章 思想より觀たる子規……………六一

① 一、性格及び思想……………六一

目 次

第二篇

第一章 子規の文學……………七六

一、その文學の發達と地位……………七六

二、文學觀……………九〇

三、自然觀……………一〇二

第二章 俳句に於ける子規の革新……………一〇四

一、子規以前の俳壇……………一〇四

二、革新の經過……………一三〇

三、紫吟社・秋聲會・筑波會・半面派の動靜及それとの交渉……………一四七

第三章 子規の諸俳論……………一六一

一、寫生……………一六一

二、配合と蕪村調……………一八〇

三、理智性の排撃……………二〇六

四、季題觀……………二二三

第四章 短歌に於ける子規の革新……………二三四

一、革新の經過……………二三四

二、歌壇との鬭争……………二四九

第五章 子規の歌論……………二六七

一、客觀主義と寫生……………二六七

二、理智性の排撃……………二八一

三、形式と調子……………二八九

第六章 新體詩・小説・寫生文……………二九七

一、新體詩の運動と其作品……………二九七

二、小説……………三一五

三、寫生文……………三二三

目次

第七章 子規の文學の發展……………四

一、俳句……………三三四

二、短歌……………三三四

三、寫生文……………三三〇

結語……………三三三

子規略年譜……………三六二

自然主義を中心とせる詩歌俳略年表……………三六二

目次 終

正岡子規の新研究



藝術家は社會の鏡であつて、何らかの形式でその自らが身を置いた社會を其の藝術に映し出してゐる。今われが明治の文學者、例へば二葉亭四迷や北村透谷・國木田獨步・石川啄木等の作品と其の思想の跡を見に行くと、そこに此の國の近代經濟の發達過程に於いて醸し出された現實と其矛盾が、それらの作品に直映し或は倒映してゐることを見得るのである。さうしてそれが優れた藝術家であればある程、現實との間に矛盾を感じ、それへの反抗を痛烈に表現することは、アメリカのホキットマン、ドイツのハイネ、我が國における啄木などの實例に見る如くである。こゝに述べんとする正岡子規に於ても、此の國の當時の社會的な諸關係と、子規の士族出身のインテリゲンチであつた關係によつて、特異の思想・感情を醸生し、それがその作品や著作に

滲み出てゐることの指摘ができ、初期の自由民権運動からの影響によつて、時代への反抗意識も相當熾烈なものがあつたことは明らかであるが、維新の特殊性による此の國の自由民権運動の進展が、彼の封建士族的矜持の清算を不可能ならしめ、後には俳句に於て蕪村の唯美主義へ、短歌に於て更に莊重な萬葉調提唱の復古主義へと赴くに至つた経路を我々は指摘できるのである。

明治・大正の歌壇・俳壇では、『アラ、ギ』派と『ホトトギス』派がそれ／＼勢力を得、大結社を組織することが出来たのであるが、その門流の一人はそれが何に因つて來つたかを、根岸派の歌は標準が高く且つ萬葉調なので、初めは盛大といふ譯には行かなかつたが、(註1) 明治短歌の主流であつたから、アラ、ギの歌風は天下を風靡した(註2)と解釋し説明した。この説明は彼らの作品に絶對的價値を附與し、自己の繁昌を理由づけるには好都合であるかも知れないが、社會關係から抽象された藝術を云爲する點に於て科學的な説明とはなり得ない。我々の研究はさういふ「勝てば官軍」式の論斷とは全く無縁である。我々は、さういふ主觀的な見解でなく、科學による冷靜な實證主義的方法によつて偽りなき貌の子規を描き出して明治文學研究の一の捨石たらしめんとするものである。

明治三十五年に子規が死んでから、彼に關する書籍の出版は、實に汗牛充棟もたゞならざるも

のがあつた。そしてそれらが悉くホトトギス・アラ、ギの結社組織の擴大と相俟つて子規の事蹟を顯彰するものゝみであつたので、子規は今日に至るまでに完全に偶像にまつり上げられ、それは彼の門下である高濱虚子氏でさへ「偶像化された子規」(註3)を口にしなければならぬ程であつた。いふまでもなく歌壇に於けるアラ、ギ派、俳壇に於けるホトトギス派は、俳句と短歌それ／＼反動の立場を固執するものであるから、彼らの偶像子規を批判し、その蕪村調俳句と萬葉調の短歌が、此の國の社會の現實に如何なる役割を演じてゐるかを指摘することは、啄木の再検討が現段階に於て喫緊事であるとは別な意味に於ての喫緊事ではなければならない。

今までに偶像子規を頌讚するものでなく、彼を科學的に批判し、彼の革新を當時の社會發展の裡に見ようとするものもないではなく、即ち篠田太郎・渡邊順三・神畑勇編『正岡子規研究』拙編『近代俳句研究』、同『正岡子規研究』或は主として短歌に關するものゝそれであるけれども、小泉荃三氏の『根岸短歌會の位相』などはさういふ立場に立つものであるが、或ものは一般文學・俳句・短歌がそれ／＼別人によつて記述せられたゝめ一貫したものを缺き、或ものは俳句・短歌に限られたゝめ、子規の文學上の業績が全面的に展開せられてゐない憾みがある。本書はそれらの諸研究を攝取綜合し、それらの缺を補ふためのもので、新しき實證主義的研究を以て、從來の

羅列式實證主義との對比研究に供へようとするものである。さうして子規の藝術が、その門流に如何に繼承せられたかを併せ見るために俳句・短歌・寫生文の子規歿後の變遷をも見ることにした。

もとより荒削りの研究であるが、同じやうに新しく明治文學を見ようとする人々に何らか裨益するところあれば著者の本懐これにすぎないが、また大方の人々の高教と批判とを望むものである。

註1 齊藤茂吉氏『明治大正短歌史概観』（改造社現代短歌・俳句集）

2 同上

3 改造社版『子規全集』月報

第一篇

第一章 子規の生涯

一、時代

子規を研究するに方つて我々は、子規の身を置いた時代の社會的經濟的狀態を一應見て、それが子規の思想に如何に反映し、且つ其の藝術にどのやうに表現せられてゐるかを分析しなければならぬ。そしてそれは當然、子規が生れて未だ二歳の齡をしか持たなかつた時に開した明治維新にまで遡及して叙述せねばならぬことはいふまでもなからう。

明治維新——それは、發生的には封建支配階級内部に於ける一種の政權爭奪戰に外ならなかつた。即ち經濟的にも政治的にも少からず虐けられて居た下級武士が、徳川幕府成立の當初より歴史的に疎外されてゐた外様大名、就中その雄藩たる薩長、並に公卿と結んで倒幕に成功した、と

いふのが維新革命の形相である。」(註1)そしてそれが舊封建制下における社會的・經濟的關係——即ち商業資本の飛躍的蓄積にもかゝはらず、鎖國等の關係から工業資本へ轉化の要素を缺き、又反封建階級たる商工業等の町人階級及び農民が封建制に對しての意識が鮮明でなく、急激なる歐米列強の資本主義制強要に際して強烈な反封建的意識をもつてゐたものは、公卿・國學者と諸藩の下級武士であり、従つて維新の原動力となつたものがブルジョア階級でなくして下級武士であつたことによつて、舊封建支配者に代つて支配的位置に着いたものが、藩閥なる名に呼ばれる下級士族上りの専制政府であつたこと等によつて、ブルジョア××の徹底性を缺いたのである。だがすでに近代的「資本制生産」へ途を開いたものであつたから、歐米先進資本主義國に範を求めたの資本制生産が輸入され、それが官業或は民業保護の名の下に手厚く溫室的に助長され、製絲・紡績・燐寸・印刷・セメント・硝子等の模範工場建設等に政府は一千萬圓にも上る興業費を支出するに至つた。(註2)生産方面のかゝる歐米先進國の様式採用は、必然的に精神的な方面にも影響を與へ、封建的身分制度廢棄によつて新に社會の表面に現はれ、且つ現はれんとしつゝある階級の心理に反映し、思想方面に於ては英國流の功利主義、佛國流の自由主義等が輸入され、「天は人の上に人を作らず」といふ天賦人權説の唱道、或は自由民權の運動となり、その精神は文藝の方

面にもあらはれて政治小説・科學小説の流行を來さしめたのであるが、政治小説は政治的啓蒙に資せんとするものであり、科學小説は資本主義を進行させるための科學普及を意圖するものであつたことはいふまでもない。固よりかゝる進歩の線上に沿はうとするものばかりではなく、封建時代のまゝに睡りこけてゐるもの、乃至は封建時代の思想・感情を以て新しき時代を嘲笑するやうな文藝もあつたが、それ等は新時代に存在意義を主張しうるものではなかつた。

明治十五年「新體詩抄」が發行され、同十八年には坪内逍遙の『小説神髓』が發行された。前者は新興ブルジョア階級の、舊封建諸階級の詩たる漢詩・和歌・俳諧への否定要素であることは、その著者の一人が「明治ノ歌ハ明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ」と云つてゐるところに現はれてゐるが、舊時代の詩たる和歌・漢詩の勿體ぶつた表現に對して、第三階級の日常語を提唱し、「人の鳴らんとする時は、しやれた雅言や唐國の、四角四面の字を以て、詩文の才を表はすも、我等が組に至りては、新古雅俗の區別なく、和漢西洋ごちやませで、人に分るが專一と、——易く書くのが一つの能」(仙居士)「頃者同志一二名ト相謀リ、我邦人ノ從來平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルコト少ナキヲ嘆ジ、西洋ノ風ニ模倣シテ一種新體ノ詩ヲ作り出セリ」(尙今居士)「泰西之詩。隨世而變、故今之詩。用今之語。周到

精緻。使人翫讀不倦。於是乎又曰。古之和歌。不足取也（巽軒居士）などと云つたのである。これは王朝的和歌の雅言使用、封建武士の漢詩の表現の不自由さに對して、所謂「平民」の言葉たる日常語を主張し、表現を自由ならしめんとしたもので、日常語の使用は、俳諧に就て見れば町人階級の勃興した元祿ごろに於て、町人出身の野坡・來山・鬼貫等によつて試みられつゝあり、それが長い間の市民階級の欲求であつたことがわかり、後にそれが所謂言文一致の運動となり、口語文は近代文學の文體となり得たのである。また『小説神髓』は既に云はれてゐるやうに、封建諸文學に對して近代文學の一形式たる小説の存在を主張したものであるが、此の中でも著者は、「我が國の短歌、長歌の類は、所謂泰西の詩ポエトリーと比ぶる時はきはめて單純なるものから、僅かに一時の感情をばいひのべたるに止まるものにて、彼の述懐エモーションナルポエトリーの歌若しくは哀悼エレジヤクポエトリーの歌に似たり。——我が短歌、長歌のたぐひは、いはゆる未開の世の詩歌といふべく、決して文化の發揚せる現世の詩歌とはいふべからず。」と云つてゐるが、これが大體この時代の進歩的な評論家の短歌・漢詩に對する意見であつた。

然しかゝる急激なる歐化主義は、同じ程度の反動時代を幾何もなく招來せねばならなかつた。これが逸早く現はれたのは美術の方面で、明治十一年大學で講義をしてゐた米人フエノロサの言

説に現はれ、十五年の第一回繪畫共進會には洋式の繪畫、洋式趣味の繪畫は出品を禁止されたほどだつた。學術の方面では十五年大學に古典講習科が設けられ、國漢學の學生を募集したが、そこで教育されたものに平田盛胤・小中村義象・佐々木信綱・萩野由之等があつたが、彼等が社會に出ると國學・和歌復古の運動を興したのである。また十九年六月には大八洲學會雜誌なる和歌の雜誌が發行されたが、これも歐化主義に反撥するものであることはいふ迄もなからう。國學・和歌の復興と云つても、彼らは皆新時代の教育を受けた人々であるから、國學・和歌を舊來のままに存置しようとするのではなく、新時代に添ふやうに改良して命脈を維持せんとするもので、この改良主義の典型的なものに二十年三月の『東洋學會雜誌』に載つた萩野由之の「小言」がある。由之は和歌が今までのやうでは無用視さるゝは必然であるとなし、それから救ふには從來の題詠を排すること、詠史の類を多く詠んで人心を振作すること、歌調を快活勇壯ならしむること、歌材は實情實景ならざるべからずとてリアリズムを説いてゐることは注意すべきであるが、また由之は和歌の延喜以來の墮落が心ある人をして漢詩に赴かしめたとなし、「二老（眞淵・宣長、筆者註）ノ時ハ我ト競走スルモノハ漢學ノミナリキ、今ハ高尚ナル歐米諸科アリ、コレト進歩ヲ競ハム事、難キガ中ノ難キ也」と云つてをり、これは歐化主義に對する國學者の態度を示してゐるが、

更に二十四年に發行された増田于信・萩野由之・小中村義象・落合直文共著の『新撰歌典』の序文には、「——われわれは特に長歌を振り起して、かの無味なる、かの蕪雜なる新體詩を退けむとす。」と述べて歐化主義者に對しての鬭争的態度を明らかにしてゐる如き、また二十三年における山田美妙の「日本韻文論」、同大西祝の「詩歌論一斑」、二十五年の「詩歌論」、同年の雑誌『歌學』の創刊、同誌上における井上哲次郎の「漢詩和歌の將來如何」等は、さういふ傳統和歌否定とそれについての改良主義者たちの意見であつたが、大體に於て國學者でない人々の所論は、大西祝や山田美妙の場合のやうに泰西詩學によつてをり、したがつて和歌否定論に導かれて行つたが、これに反し國學者等は短歌に改良を施し、或は短歌を窮屈となすものは長歌を以てして、それの復古をなさんとするに傾いたが、萩野由之の「和歌及新體詩論」(東洋學會雜誌より歌學二號—四號・廿五年四月—六月に轉載)小中村義象の「和歌の精神」(同誌四號)などはその代表的なもので、前者は先の「小言」につき、武津某の論駁に會し再説したるもの、後者は和歌の精神として虚飾・怠弱・卑俗・狹隘・貴族の専有物たるを避けよと云つてゐる。

以上の諸現象は從來云はれてゐるやうに社會關係から無關係に生じたものではなくして、實に明治維新の特殊性によつて醸生されたものであり、それに基づく新興ブルジョア階級の力の弱さと、それに基づく民主々義の徹底が不十分であつたのに因るもので、そのため封建文學を壓倒し得ず、同時に新興市民階級の文學の建設が不満足の状態にしか出来なかつたもので、それは最もラディカルな新體詩運動に於てさへ、「宜シク平常ノ語ヲ少シク折衷シ、以テ新體ノ詩ヲツクリ」(註3)——などと謙遜なことを云つてゐるところに、よくその不徹底さがあらはれてゐる。

子規が笈を負うて上京し、大學豫備門から二十三年九月文科大學に入つた時代は、斯ういふ時代であつた。後に説くやうに當初自由民權運動などに興味を覺えたとはいへ、元來が士族出身の保守的分子であつた彼が、かゝる時代思潮の中に、その學ぶべき科目を國文に選んだのも所以なきことではなかつた。さうして大學退學後、日本主義を奉ずる陸羯南の日本新聞社に入社したのは、彼自身にとつて衣食のためではあつたが、其の歿後、三井甲之などによつて「しきしまのみち」(註4)の體得者と解せられてゐるのは、實に敍上の社會的經濟的關係に基づくものであり、當初の子規の國粹的傾向の發展に他ならないのである。

註1 高橋龜吉氏『明治大正經濟史』(改造社經濟全集第三十一卷)

2 横井時冬『日本工業史』(改造文庫本一五三—四頁)

3 『新體詩抄』矢田部尙今

4 「子規の和歌革新」(日本及日本人昭和三年九月號)

二、生ひ立ち

子規は慶應三年九月十七日、伊豫松山藩の御馬廻加番正岡隼太の二男として、(註1) 父三十五歳母二十三歳の時生れた。母は大原氏、漢學者觀山の女八重である。彼が二歳の時明治と改元、三歳の二年には全國の封土が奉還され、封建的身分の整理が行はれ、公卿諸侯は華族に、爾餘の武家及び公家は士族乃至卒と稱せられ、平民にも苗字が許され、十歳の九年には家祿制度が廢せられたりした。これらの事は封建的身分の整理と共に、新たに資本制による社會組織と、それに基づく有産無産の階級關係を生じたことに他ならず、子規個人の場合に見ても、藩主の封祿に寄生する家臣團から、新たに自ら衣食を求むる都市自由民に轉じたことを示してゐる。むろんこれらの諸關係は幼少な子規に直接的影響を與へたとは思はれないが、間接的な影響は、彼の一生を通じて相當甚大なものがあつたのである。

明治五年、六歳にして彼は父を喪ふた。父に關して子規の記してゐるところは、父は武術にもたけたまはず、さりとて學問もしたまはざりし如く見ゆ——父は高慢にして強情に、しかも意地

わるき方なりし(註2)と云つてゐるが、また父が曾て人を批評した時、大原觀山が「隼太さんの様に平生、人を是非せしことなき人」云々と云つたことを彼は記してゐる(註3)ところから見ると、人の批評などをもせぬ、いづれかといへば凡庸の人物であつたやうに思はれる。母はどういふ人か、これについては子規もあまり記してゐないので明らかでないが、性温順であつたらしく幼少にして父を喪うた子規とその妹律を養育するに可なり生活上の苦勞をしたやうである。これはすつと後のことであるが、彼が上京中明治十九年伯父大原恆徳に宛ての書簡の末尾に、「先日申やる積りにて相忘れ候が、母様裁縫之事は不得已事なれども、裁縫生を教授なさることは御やめ被成ては如何やと存候、——半年五十錢位にてはあはぬ商賣かと存候。」と云つてゐるが、「其方が財政上便利なとかいふ様なればいづれにても宜敷候。」(註4)と附け加へてゐる。夫を喪つた寡婦の苦勞と、家の財政などを考へても見えない青年子規とが見えるやうに感じられる。

子規の幼時は、その母の言によると臆病で、能の時その囃子に驚いて泣き出したり、子供同士の喧嘩に負けて逃げ歸り、妹が加勢に出たといふやうな話が傳へられてをり、(註5)自らも「性來臆病なので鐵砲を持つことなどは大嫌ひであつた。」(註6)なども云つてゐる。

六歳の時子規は、従兄弟である三並良と共に子規の外祖父大原觀山について漢學の素讀をう

け、觀山が病弱になつてからは塾生白川や、叔父加藤恆忠の代教をうけたが、また土屋久明にもつき、伯父佐伯半彌に筆蹟を習ひ、後山内傳藏に就き、中學時代には河東靜溪の講義を聴き、詩文の添削をうけたこともある。就中觀山は初孫のこととして「升は初孫で可愛いから」とて、他の子供は門人に教へさせたに拘らず子規と三並とは自ら教へたといふことである。(註7) 觀山は漢學者特有の頑固な保守家であつたらしく、「終生不讀蟹行書」といふ詩を得意で作つてゐたほどであつたから、斷髮令が下つても自ら斷髮しなかつたばかりでなく、年少の子規や良にも斷髮せしめず、城下の人悉く斷髮して残るはこの二人のみになつたので、三並の父が可哀さうだから斷髮を許してくれと歎願し、觀山は「もう、そんなになつたか、それでは仕方がないから許す。」(註8)と云つたさうである。封建武士の象徴ともいふべき丁髷を、最後の一人になるまで存置した守舊ぶりはともかくとして、最後になつて「仕方がないから——」といふやうな態度は子規にも傳へられ、言文一致や新體詩に對しても一應進歩的なものゝ反對者となつて現はれ、大勢抗しがたくなつてからこれを認める態度であつたことは、彼の保守的心理を見る上で注意せねばならぬことと思ふ。

八歳の明治七年、松山の智環學校に入學したが、(註9) 後勝山小學校に轉じた。轉校の原因に

就てはいろいろの説があるが、三並良の談によると、智環學校は町人の子弟が多かつたためだといふことであるが、又子規の友人柳原極堂は智環學校の教育程度が低かつたためであると云つてゐる。むろんこれだけではどの説を正しとすることは出来ぬが、然し松山といふ土地の士族的雰圍氣と、後に説くであらう子規と漱石との士族と町人の子弟の優劣問答などに考へて、以上の二説は二説とも眞に近いものではないかと思はれる。

その頃勝山小學校に影浦政儀といふ人があつたが、子規が十二歳の頃、三並と二人で一週間に二三次、夜數學や讀書を習ひに行つた。この影浦といふ人は三國志や漢楚軍談などの話が上手で、それに啓發されたのであらうか、子規も三並も軍談が好きになり、松山の大街道の遠山といふ寄席に燕柳といふ講釋師がかゝつてをり、二人は夜學へ行くふりをしてはそれを聴いてゐたが、或る夜雨が降り出したので家人が影浦のところへ傘を持って行き、寄席へ行つたことが露見して二人とも門を閉められたといふやうなこともあつた。(註10) また貸本の講談本を好んで盛んに讀んだのもそのころであらうが、その讀んだものを後に子規が「余が郷里に在りて讀みし小説は馬琴の著か然らざれば水滸傳、武王軍談、岩見英雄錄、佐野報義錄の類なりしかば、小説は皆斯の如き者と思へり」(註11) と云つてゐるのは、彼の士族的な生ひ立ちを明らかにしてゐる。

元來伊豫といふ國は、恰も世界に於ける日本といふやうな地位に在り、徳川時代そこには所謂伊豫八藩といふ松山の久松、大洲の加藤、宇和島の伊達などを初めとし、西條に松平、吉田に宇和島の分家、新谷に加藤の分家、今治に久松の分家、小松に一柳等の大小名が盤踞してをり、最も保守的氣分の濃厚なところであつたが、それは子規自らも「四國人(少くも我松山人否伊豫人)が日本全國に對して立つ關係は丁度日本が世界に對する關係の如し。」(註12)と言つてゐるその通りであつた。なかんづく松山は久松氏の城下町であつて、交通は一里餘に三津ヶ濱があるが、水淺くて便ならず、瀬戸内海通航船舶の出入はあるが、領内は農漁業、山林業の他に商工業を發達せしむべき地勢ではなく、武士と農民の他に、支配者たる武家階級の權力を覬覦する階級は多く存在しなかつたのである。従つて徳川中期以降顯著となつた商業資本の發達は、此處では極めて微弱なものであり、殊に地勢が地勢だけに農民に對して一層………が行はれ、それにつれて農民の反抗も烈しかつたのであるが、(註13)農民の武士階級への反抗が烈しければ烈しいだけ、武士階級に階級としての自覺を持たしめることとなる。徳川末期に至つて商業資本の發達が著しくなるにつれ、武士の都市民化・町人化も一般に顯著になつたが、伊豫に於ては、さういふ傾向頗る緩慢だつたやうである。従つてそれ自らが農民の勞働による領主の祿の上に安易な生活を營

むことができた子規一家の思想・感情が、封建的要素の横溢してゐたことも亦當然といはなければならなかつた。

然し資本主義が性急に進行するに従つて、この島國へもその波濤のうねりを及ぼしてゐた。子規は十六年六月上京したのであるが、その後二十二年の夏歸省して一昨年(彼は隔年に歸省してゐた。)と著しく變つたものを三津港に高き煙突の多く出來しこと、三津松山に輕便鐵道出來しこと、友だちが官員となり新聞記者となりし者多きこと、總ての風が東京に似ること、言葉も多少東京に似ることなどを「筆まかせ」に擧げてゐるが、これは資本主義が漸く伊豫に押し寄せて來、彼の友人達もその機構に働くインテリゲンツトとして動員され、且つ交通の發達が言語の封建的割據性をも打破しつゝあつたことを示してゐる。即ち封建伊豫が資本主義日本の一部に轉換しつゝあつたことを彼は目撃したのであるが、同時に資本主義の伊豫における轉換が他に較べて著しく立ち遅れてゐたことも明らかになる。それは前にいふやうに、伊豫の地勢が資本主義的生産へ轉換の條件を缺いてゐたために他ならず、さういふ關係に基づく士族的なイデオロギイの把持と、資本主義的なものゝ浸潤との緩慢なるとは長く子規の思想・感情に抜くべからざる影響を及ぼしてゐる。

だが全国的な資本主義の波濤と、それに基づくイデオロギイの上での近代的なものへの轉換は、外から封建伊豫へ作用を及ぼしつゝあつた。その新興のイデオロギイは、氣鋭にして純真な少年の徒が感じうるのは當然である。子規は十二年小學の課程を卒へて松山中學に入學したのであるが、民権論者草間時福はこの學校の前校長であり、子規の入學した時は既に草間は居なかつたが、その餘波でもあらうか、「上級ではギゾウの文明史、ミルの代議政體、ルソーの民政論とかいふものを讀んだり、演説の稽古をやつたりしてゐた。教室からは何時も演説の聲がもれてゐた。」(註14)斯かる影響をうけた子規は、一かどの自由民権家となり、教室で「自由何クニカアル」天黒塊(國會)を現はさんとす(註15)などいふ演説をしたこともあつた。前者は主として學生に加へられた言論讀書の自由の拘束を慨したものであり、後者は國會開設の要求とその必至性を説いたものであつたが、(註16)かゝる轉換期に方つて、彼が封建的な觀念を揚棄し、編成を新たにしたりたところの社會に馳驅せんと意圖するのは當然であるが、この精神的過程は此の時代の彼の書簡にもよく現はれてゐる。

——古へは學問するは富貴よりも貧賤に如くなしといひしも古人の如く小成に安んじ僅か一國中の儒者とならば貧賤却て優れるや否やは知らされ共今日の開化社會に出でて天下の人に駕軼せんとするは中々我們貧生のよくし得る處に不候と奉存候(註17)

とて昔の儒者達の貧乏禮讚を諷つてゐるが、この貧乏禮讚こそは封建的支配層と其家臣團の代表的思想であつたから、彼のこの言葉は舊觀念を捨て、新社會に働かうとする志を明らかにしてゐるものである。

——豈夫れ貧を以て功名を博する心を抑制するを得んや功名は天下衆人の相争ふて得んと欲する所なり、私共も亦此一大競争場に入て試に一鞭を加へ天下萬人と後先を争はんとす乍然功名富貴豈富貴人のみの専ら占有する處ならんや然れば學べば庶民の子も亦公卿となるべく私共は假令公卿となるを欲せざるも社會の上流に立つを願ふ者に有之候へば學問勉強して其域に至るの手段を爲さざるべからず(註18)

學べば庶民の子も社會の上流に立つことが出来るといふ考へは、この時代の少年及びインテリダントの立志觀であつて、福澤諭吉が『學問のすゝめ』で云つてゐるところと同じであるが、身分制度から解放された彼らが、一意黽勉して新たな社會に名を成さうとしたことを明らかにしてゐる。これを後に述べるやうな子規の晩年到達した諦めの觀念に照して考へると、彼らの期待した新社會が、彼らに何ものをも與へなかつたために、彼らが一樣にさういふ諦觀的な心境に導

かれて行つたことがわかる。

さてさういふ新時代的な思想・感情をもち、そして政治的社会的な諸關係が封建治下におけると同じやうな状態にある以上、ローマンチックな自由の憧憬者となるのは當然であるが、それが郷里の封建的殘滓の濃厚なるに對して愈々反抗的となる。彼が郷里の學校の良教師に乏しきを懇へ、「——私們的如きは官費生になりて壓制教師に默從するを能せんや——獨立獨行は大丈夫の常に爲すべき所なり我假令貧生なり共壓制教師に服從せんよりは寧ろ自由の空氣を東京専門學校に學ばんとするなり」(註19)とて自由を讃へ、或は

嗚呼今日の形勢に當て何の邦何れの地を問はず開港場にして通ぜざるの處なきは英國の語なり英語何ぞ其れ此の如く廣きや是れ英書の讀まさるべからざる所以なり(變則にもせよ)且つ英米の書我國に來りしより文化頓に開け已に開明の域に入らんとす是れ抑も何故ぞや器械の發明多くして諸事に便なるなり、即蒸汽器械電氣器械の如き其最たり——此の如きの功ある洋書にして若し之を讀まされば頑固とや云はん固陋とや云はん——假令如何程漢書の蘊奥を極め如何程仁義の妙境を説くも若し洋書に通ぜず廣く世界の事情を知らず今九州に於て大亂あるを知らず、又魯清の災、英埃の亂、日朝の變だも猶之を知る能はず悠然として一茅屋の裡に墮臥す

るは是れ田野の一腐儒のみ——夫れ漢學の人を卑屈頑固に陥らしむる此の如し、豈漢書のみを讀んで可ならんや——(註20)

彼にとつて封建的壓制と漢學、新時代的な自由と洋學が密接不可離なものとして理解せられてゐることがわかるが、この學問の時代性を何ら先驗的なものなくして知り得た子規は、まことに聰明な頭腦の持主であつたと云はなくてはならない。

少年子規をして斯く痛感せしめたものは何であつたらうか? いふまでもなく子規が領主に寄食する武士でなく自由民であり、且つ屢々彼が以上の書簡の中で云つてゐるやうに「貧生」であつたからである。この貧しさこそ維新の不平士族が自らに目ざめて自由黨の指導者となり、專制政府と果敢な鬭争を開始するやうになるそれと揆を一にするものであつた。彼は上京後も經濟状態は可なり苦しいものであつたらしく、十八年の冬、四谷に陸羯南を訪うて神田への歸途、懷中わづか六厘を振つて焼芋を買つて食うた話もあるし、(註21) 井林・松木・豊島等の知人から金を借りて返さなかつたことも自ら記してゐるし、(註22) 十八年ごろ神田の板垣といふ下宿で、大晦日に債鬼に攻められて居たゝまらず、三並の家へ逃れて正月を迎へたなどの記述もある、(註23) 當時子規の家の經濟状態は、柳原極堂の記するところによれば、家祿奉還の時一時金千二百圓ばかり

りを得、その一部を松山の五十二銀行に預け、残分で同行の株を買ひ入れ、正岡家はその金で約十七八年間生活したのであるが、二十五年頃には同行の拂込金高二百圓の株四株を残してゐるのみであつたとの事である。(註24) これを以て見れば、子規の家の財政が、彼をして長く學校生活をする能はざらしめたものであることがわかるし、且つ後に彼が小説家たらんとしてたりしたこと、さういふ財政状態が何か世に立つて行ける方法を手取早く選んだものと見られないことはない。

然し此の時代の子規がさういふ状態でありながら、なほ封建的な思想と感情の清算ができません。士族的な矜持をもつてゐたことを我々は見のがすことができない。十九年の書簡に

——常警會は士族のみを給費生とすることは私兼て遺憾とする處なりしが今度愈村上文太郎の如き平民を採用せられんとあるは實に一層の區域を廣めたるものにて大賀すべきことなれども、兎角町人抔のなりあがりたる者は、たとひ學問はいかに能く出來るとも小成に安んずるの心と(此中に自慢心抔いふ元素あり)交際をしらぬの風あり(人と齒せざるの風ある也併し豪家抔の息子は此限りにあらず)——何れにもせよ平民より選ぶは餘程困難なる事と存候(註25)と云つてをり、「士族」と「豪家の息子」とを先天的に優越なものと考へてゐる彼の思想がこれで

よく分るが、更に彼が二十四年に夏目漱石と應酬した書簡は、彼の如上の思想・感情と、併せて漱石のそれとをすることができ興味あるものである。この書簡は肝心の子規の分が散逸してゐるが、漱石の書簡だけでも兩者のいふところが分らない。即ち

——君の書に曰く、試みに學校の兒童を見よ、工商の子多くは上座にあり士家の子多くは末席にあり然れども其學校を出づるや工商の子弟は終に士家の子弟に「一籌を」輸するを常とすと、是は君一家の經驗にて云ふなるか統計抔にていふや——學校を出でて商工の子(弟)が士家の子弟に一籌を輸すとは學問の點なりや世渡りの巧拙なりやはた君の所謂氣節の點なりや——士人の子と雖もあながち氣節ある人多しとはいふ可らず方今紳士とも云はるゝ輩青萍とも浮草とも評すべき行爲あるもの枚擧すべからず、其身元を尋ねたらば大方は士族なるべし、——君の議論は工商の子たるが故に氣節なしとして四民の階級を以て人間の尊卑を分たんかの如く聞ゆ、君何が故(に)かゝる貴族的の言を吐くや——君若しかく云はゞ吾之に抗して工商の肩を持たんと欲す(註26)

と云ふのであるが、この書簡が二十四年のものであることによつても、子規が相當遅くまで士族的優越感をもつてゐたことがわかる。當時資本主義日本には、既に金より外に人間を差別あら

めるものはなかつた筈であるのに、自ら何もたなかつた子規が、僅かに持してゐた士族といふ矜持ぐらゐみすばらしいものはなかつた。

子規が上京したのは明治十六年十七歳の時であるが、この上京は彼の豫ねての希望により、叔父加藤恆忠の斡旋によるものが多かつたらしい。加藤恆忠は觀山の次男で拓川と號し、後に白耳義全權公使を勤め、晩年松山市長にもなり、部落民の差別待遇せらるゝを慨して融和運動に努力し、遺言して死後は部落民の寺へ葬らしめた進歩的な人士であつた。陸羯南とも親交があつたので、出京早々拓川の紹介で子規は羯南にも會つてゐる。この時羯南の處にも子規と同年輩の羯南の甥が居たが、子規は大人じみてゐて話をしてゐるところを見ると、比較にならぬ程だつたと羯南は記してゐる。(註27) それほど子規は早熟であつたらしい。

出京して十日ばかり過ぎて後、濱町の久松邸の書生部屋に入つて自炊生活をする事になつた。同居人は二三人あつて同國人であつたが、子規よりは年もたけて不淡泊ないやみ多き人間であつたと彼は云つてゐる。けれども彼は新參者であるから「新囚が舊囚に對する如く」挨拶したが、三日目は彼の炊事の番に當り、馴れないことゝうまく行かず、「余はたび／＼涙をうかべたり、こは烟にむせて出し涙にはあらず、余が心中より出し涙なり」(註28) など記してゐる如く、随分

苦しく辛いものゝやうであつた。

間もなく赤坂の須田學舎に入つたが、こゝは漢學塾で、後共立學校で英語を學んだが、主として共に大學豫備門への受験準備のためであつたらしい。翌十七年七月豫備門の試験にパスしたが、當時同校四級から豫備門に入學し得たのは子規と菊池謙二郎の二人きりであつた。その後も子規は本郷の進文學舎に通つて英語の補習をしたりしてをり、「語學ほど無趣味のものはないと云つてゐた」(註29) とところを見ても、語學・數學の如きものは不得手で、文學的な趣味に趨る傾向をもつてゐたやうである。

常磐會は久松家が舊藩の貧しい子弟の獎學のために設けられたものであるが、子規は同年この給費生となり、寄宿舎に入つたが、彼がこの給費生になつたことを、東京の叔父から東京へ來れといふ手紙の來た時、豫備門に入學出來た時と共に三つの嬉しかつたことに數へてゐるのを見ても、それまでの彼の苦しい辛い状態が窺はれると思ふ。二十三年六月高等中學を卒業、九月文科大學國文科に入學した。彼はそれ以前十七年ごろ共立學校で莊子の講義を聽いて大に興を覺えたが、十八年ごろには哲學を修めんと志してゐた。しかし性來文學を好んだので、その方面にも心を引かれ、文學書などを可なり耽讀してゐたらしく、經國美談や書生氣質・細君・妹と脊鏡な

どもその間に読んでゐたことは「筆まかせ」の記事で明らかであり、文學への傾情のほどを見ることができる。二十二年幸田露伴の『風流佛』があらはれ、彼はそれから一年ばかり経つて讀んだらしいが、露伴の封建的觀念と近代個人主義觀念との巧みな交錯・調和は、子規をして頗るそれに傾倒せしめるに至つた。この時代の子規は、俳句分類に着手し俳句の研究をもしてゐたが、また小説を書き小説家たらんとしてゐたことは彼の書簡等に現はれてゐるが、二十三年の藤野潔宛の書簡には「近時非風子（新海、筆者註）露伴風の小説を作る、文章意匠實に風流佛を離れず——（註30）など書いてあるが、彼及びそのグループの間に小説熱の高まつてゐたこと、及び『風流佛』などに心酔したことがわかる。ところが子規は二十四年の頃、少しく金の入用なことがあつて、學校の冬休みを利用し一篇の小説を書きあげようとした。「よかれあしかれ名譽を棒にぶつて仕上る積りに致し候、初陣の事故功名の程は固より覺束なく候へども多少の金にならぬことも有之間敷と奉存候」（註31）と大原氏宛書簡に云つてをり、又虚子に宛ても「小生已むを得ざる儀に至り現に一小説を書きつゝあるなり——一枚かいてはやめ半枚かいては筆を擲つこと幾度といふことを知らず、そんなにいやなつまらぬものを書かねばならぬといふもつまらぬもの御察被下度候」（註32）と云つてゐるが、その言葉の裏に、彼がそれに熱中しつゝあつたことを現はしてゐる。

それを二十五年春へかけて仕あげたが、その出版に頓挫し、彼の期待ははづれ、彼は俳句に躓踏せねばならぬやうになつた。このことが彼の生涯の事業に重大な影響を及ぼしたことは後に述べるであらうが、前に期待してゐたのが大きかつただけ彼の失望は察するに餘りある。

彼の蹉跌はこれにとゞまらず、此の年には學年試験に落第した。負けじ魂の彼が二度まで續いての蹉跌に失意したことは想像に難くない。當時の彼は好きな小説を讀むとか、文學の話をするとかして學校の課目はあまり勉強しなかつたらしいが、どこまでも世俗的なことを卑しとする彼は、試験勉強やカニングなどまでして及第することを好まなかつたので斯ういふ結果になつたらしい。後に彼はその落第を追想して左のやうに書いてゐる。即ち『日本人』に「試験」といふ問題が出てゐるので端なく試験といふ極めて不愉快な事件を思ひ起した。と冒頭して、勉強しようとして向島に家を借りたり、大宮に下宿したりしたが、いつか俳句を考へてゐる始末で、

——試験だから俳句をやめて準備にとりかゝらうと思ふと、俳句が頻りに浮んで來るので、試験があるといつても俳句が澤山出來るといふ事になつた。これ程俳魔に魅入られたら最う助かりさうはない。明治二十五年の學年試験には落第した。リース先生の歴史で落第したゞらうといふ推測であつた。落第もする筈さ、余は少しも講義聽きに行かぬ。聽きに往ても獨逸人の英

語が少しも分らぬ。おまけに余は歴史を少しも知らぬ、其上に試験にはノート以外の事が出たといふのだから落第せずには居られぬ。これきり余は學校をやめてしまふた。これが試験のしどまひの落第のしどまひであつた。(註33)

さうして「余は時々學校の夢を見る。それがいつでも試験で苦しめられる夢だ。」と附け加へてゐるが、よほど試験は嫌ひだつたと見える。

この落第を契機として彼は遂に大學を退學したのである。これには親戚朋友の間に異議のあるものもあつたやうだが、彼はさつさと斷行してしまつた。これはそれ以前日本新聞との交渉を生じ、日本新聞に投稿してをり、古島一雄などに招かれてゐたためである。(註34) そしていよいよ入社の話がきまると、十一月には京阪に赴いて郷里の母と妹とを迎へ、十二月一日から入社することとなつた。表面はすらくと事が運んだが、この間の彼は可なり現在將來のことに頭を悩ましたらしく、且つ新たに家族を迎へて家を構へるについての經濟的な心配もしなければならなかつた。同年十月三日附の大原恆徳宛の書簡には、原稿執筆其他のため大磯に赴くことの承認を求め、且つ「常磐會は特別の御憐愍を以て、本、月、ま、で、給、費、被、下——(傍點筆者)などあるを見ても、經濟上の悩みがわかるが、此の間彼が俳句を盛んに作つたり批評したりしてゐるのは、かねて研

究してゐた俳句に乗り出す前ふれを示すものであり、又日本新聞で歐化主義に抗するため、子規が俳句を復興するといふ條件を認めたにもよるものでもあり、彼の重ねくくの蹉跌にめげまいとする強がりもあるらしく、それが小説へ進出する途が阻止されてゐたので、俳句へ遮二無二進んだのである。

註1 正岡家の戸籍に長男とあり、今までの彼の文献は皆長男としてあるが、實は早世した異母兄があ

つたので、それは柳原正之氏の「少年時代の子規」(『俳句研究』昭和九年九月)に明らかにされた。

2 「筆まかせ」「父」

3 同書「褒貶」

4 十月二十五日附大原恆徳氏宛書簡

5 『子規言行録』所載「母堂の斷片」碧梧桐氏の『子規を語る』にも採録されてゐる。

6 『病床六尺』

7 三並良氏「子規の少年時代」(『日本及日本人』昭和三年正岡子規號)

8 同 上

9 その前七歳の時、法龍寺内の寺子屋に通つたといふことが年表に記されてゐるが、智環學校が寺

正岡子規の新研究

子屋式だったこと（三並氏）と課目が習字一方だったこと（筆まかせ）などによつて二者同一のものであつたらしく考へられる。

- 10 三並氏前掲書
- 11 「筆まかせ」小説の嗜好
- 12 同書「世界と日本、日本と四國」
- 13 西園寺源透氏の調査による一揆五十餘件
- 14 三並氏前掲書
- 15 この草稿は二篇とも『筆まかせ』（改造社全集十二卷）に在る。
- 16 柳原正之氏「子規の青年時代」（『日本及日本人』前掲號）
- 17 十五年二月十三日附加藤恆忠氏宛書簡
- 18 同上
- 19 同上
- 20 同年十月二十二日三並氏宛書簡
- 21 「筆まかせ」「十年の宰相」

- 22 同上「寄席」
- 23 同上「大三十日の借金始末」
- 24 『俳句研究』昭和九年九月號「少年時代の子規」
- 25 十月二十五日附大原氏宛書簡
- 26 十一月七日附子規宛書簡（岩波普及版漱石全集十八卷三六一七頁）
- 27 『子規言行録』序
- 28 「筆まかせ」「自炊（千代萩）」
- 29 菊池仙湖氏「豫備門時代の子規」（『日本及日本人』前掲號）
- 30 日附不明（改造社全集十五卷一二五頁）
- 31 十二月二十五日附
- 32 同三十一日附
- 33 『墨汁一滴』
- 34 古島一雄氏「日本新聞時代の子規」（『日本及日本人』前掲號）
- 35 同上

第一章 子規の生涯

三、日本新聞時代

子規は二十五年十二月一日から日本新聞社に本社した。彼の當時を知るに大原恆徳宛の書簡がある。

——右手紙書き畢らぬ處へ陸より呼びに來り參り候處いよ／＼毎日出社之事に相きまり候、併し別にこれといふ程の職業も無御座候故いやな時は出勤不致ともよろしくと申候、其かはり月俸十五圓に御座候、これは陸一人よりいへば大に氣之毒がる處なれども、社の經濟上豫算相定まり居候故本年中は致し方無之、來年になれば五圓か十圓はともかくも相成可申と申居候、それまでの處足らねば自分が引受可申由懇々申くれ候、右の次第に候へば其御考にて御送金被下度御手数相煩申度候、尤我社之俸給にて不足ならば他の國會とか朝日新聞とかの社へ世話致し候はゞ三十圓乃至五十圓位の月俸は得らるべきに付其志あらば云々と申候へども私はまづ幾百圓くられても右様の社へははいらぬ積に候、又新聞之外チヨイ／＼の小儲けは折々可有之心ありも御座候、先づ今日之處では右之次第に付前途の目當は來年にならねば何とも申上か候

(註一)

即ち彼としては蜀南の知遇に感じ、月給で足らぬところは原稿料目あてに何か書くつもりで、先づ一家の經濟が支へられれば満足するつもりであつたらしい。他の社へ行けば三十圓か五十圓とれるが、彼としては見ず知らずの人の中で働くより、既に多少文才も認められてゐる日本新聞に働く方がいゝと思つたのであらう。幾百圓くられても云々の言葉には多分の誇張のあることを見なければならぬが、斯ういふ關係を講壇的な史家は勝手に臆測して子規が蜀南の日本主義に共鳴したためだなどと云ふのである。即ち、子規は單なる職業としてでなく、國粹主義に共鳴した一人として、如何に薄給でも「日本」記者たるを満足したなどと云つてゐるが、斯る説は時代に媚びて史實を歪曲する以外の何でもない。

さてさういふ譯で彼の財政は相かはらず苦しいものであつたらしく、二十六年一月三十一日(全集書簡篇には十一月とある)附碧梧桐に宛て「本月雅俗の集會合して七八度も候ひしが金のいる會は二度ながら缺席をかしきことに候」と云つてゐるが、同二月六日附大原恆徳に宛て十圓送金してくれといふ書簡にも「前月下半は殆んど懷中は貳拾錢といふまとまつたかねのありし事無之」「十錢の會費なくしてある必用なる談話會に出席出來ず」など云つてゐるが、後に『仰臥漫錄』でも「雪ノフル夜社ヨリノ歸リガケオ成道ヲ歩行キナガラ蝦蟇口ニ一錢ノ残りサヘナキコト

ヲ思フテ泣キタイ事モアリキ。」と回想してをり、大原氏に對して手紙でしばしば送金を求めてゐる。かゝる窮乏は彼自身の俸給の少かつたことのみによるものではなく、當時の急激な物價騰貴と、加へて彼の都會生活者としての、且つ社會的地位につれての生活向上にもよるのである。例へば二十五年家族を迎へるため京阪に赴いた時の入費を、彼は叔父大原氏に宛て明細に報告してゐるが、(註²) 二等車に乗つたり、京都で遊んだりしたことを戒められてゐるに對して彼は謝してゐる等がそれであるが、次の書簡にもさういふ状態が見られる。

二十七年『小日本』が發行されるに及んで、彼がその編輯主任になり、月俸も三十圓支給されるやうになつた。

私月俸三十圓迄に昇進仕候故どうかかうか相暮し可申とは存候へ共こんな忙しくては人力代に毎月五圓を要し、其外社にてくふ辨當の如きものや何やかでも入用有之又交際も相ふゑ(芝居杯にも行き申候)候故三圓や五圓は一朝にして財布を掃ふわけに御座候近來は書物といふもの殆んど一冊も買へぬやう相成申候(註³)

といふやうな状態で、なか／＼暮し向は樂ではなかつたらしい。これはさもあるべきことで、資本主義の發達につれて個々の生活は幾分向上するが、物價はその何倍も躍進的騰貴をして勤勞階

級を苦しめたのである。例へば日銀「舊」東京卸賣物價指數(二〇年一月基準)によつて、二十六年に比しての二十八年の騰貴率を見ると、石炭三五・四%、石油三〇・三%、鐵二七・二%、銅二三・二%、皮革類一七・九%、米一六%、麻一〇・八%、砂糖九・八%、白木綿八・二%、綿絲七・九%、といふ激騰である。(註⁴) これらは「一方資本の利潤を増殖せしめるが、他方勞働者・農民・俸給生活者に對する苦痛であつたことは勿論である。」(註⁵) 子規個人について見れば、その収入が次第に増加したにも拘らず、何倍かの物價騰貴に苦しめられたのであるが、彼は二十八年十一月二十四日附で藤井紫影に宛て云つてゐる。

——貧乏人の病氣したのも随分つらきものに御座候、忽ちにして宿痾療治し盡すべき良法ありとも、○^コがなければ何にもなり不申候、小生はいよ／＼やけになり文學と討死の覺悟に御座候貧乏は書物を買ふことをも妨げ、病氣の治癒をも妨げる。この貧乏とは抑も何であるか、何によつてさういふ貧乏が生ずるかを彼は考ふべきであつたのであるが、元來が金錢を賤しめた封建武士の子孫である彼は、「金錢を追ひ廻り名利に目がくれる俗人——」(註⁶) といふやうな時代にそぐはぬ觀念をもつてゐたために、貧富といふことの根本的な理由を考へずに、「文學と討死」する「悲壯」な決心をしてしまつたのである。自らが勞働力以外に何も持たず、その點無産階級と

同じでありながら、なほ且つ士族的な考へを捨てることの出来なかつた彼の矜持は實に憐れなものであつたが、現實生活の劣悪化、知識をも健康をも奪ふ貧乏への漸次的な轉落に對して眼を注がず、「文學と討死」すべく覺悟した彼の決心くらの悲壯なものにはあり得ない。然してこの決心への轉機的心境は獨り子規のみに見られる心理現象ではなく、文學に携はるほどのインテリゲント共通の、昔も今もかわらない逃避境であつたのだ。さうして當初の彼の文學における進歩的な一面は、次第に唯美的・享樂的な一面によつて蔽はれて行くのであるが、俳句において寫生から蕪村の唯美主義へおし移つて行つたのも、斯く見て來ると從來考へられてゐたやうに偶然のことではないことがわかる。

封建的諸支配階級の貧乏禮讚に對して、その下に興つた商工業の市民階級は、金錢の價値を認め、金錢を謳歌した。彼らが身分制度に基づく地位・名望等に對して存在を贏ちうるには、「俗性筋目にもかまはず只金錢が町人の氏系圖」(永代藏)でなければならなかつた。西鶴以後の町人文學が種々雑多でありながらも金錢を禮讚することのみに一致點があるのは、さういふ彼らの社會觀の文學的表現に他ならなかつた。だから明治維新後に彼らの擡頭が確定的となるや、彼らは新たに金錢の價値を公認しなければならなくなつた。

大なる裁金の利用、貴い裁金の利足。金は持つべし持つべからずと、實に金言と云ふべし……富も貧も貴も賤もなし、なべて金に苦勞をせぬ者なかりける(註7)

……金錢ハ富ヲ買フ切手ノ如キモノニテ、此切手サヘアレバ、何品ニ限ラズ、ホシイト思フモノガ直ニ手ニ入りマス。ソコデ金錢ヲ富ト申ス……(註8)

いふまでもなく徳川時代の金錢崇拜と明治になつてからのそれとは著しい相違があつた。身分關係が廢棄されて富以外に頼むものはなくなつたからだ。資本主義社會では賢愚・地位・名望も金錢を背景として、あらはれねばならなかつた。そこでは人格も貞操も金錢によつて代置される。この現實を肯定することなく、昔ながらの賤金思想に支配されてゐた士族的インテリゲントは、「俗な物であるがいかにもよい者ぢやといひながら金の勘定を」(註9)するやうな矛盾を敢てしてゐたので、現實に眼を注がなかつたも當然といはなくてはならない。

日清戦争ごろまでの産業の發展は、インテリゲントに對してその立身出世を約束した。彼等は新社會に名を成すために學を修め、専心その機構の號令の下に働いた。むろん新社會はその幾分かを彼等に與へ、彼らは勤勞階級として待遇されたが、更に何倍かを物價騰貴によつて收奪されたのである。その状態を我々は子規の言葉に聽かう。

——僕は殊に金の上には意気地なき者、家を持ちて後も湯代に窮したる事少からず、社の歸りに鐵道馬車に乗れぬを嘆息したる事もあり(註10)

この窮乏は何によつて起つたか?

金融逼迫トカ申スコト何處迄モヒ、イタト見エ友人ナドモ今年程困ツタコトハ無イト申弱リ居候——當地物價高キコト驚クベク候湯代二錢、豆腐一挺一錢二厘殆ンド四五年前ノ倍位ニ相成候米ハ御地杯モ餘程高キヤニ承候(註11)

かゝる物價の暴騰が勤勞階級の苦痛であつたことはいふまでもなく、彼の三十一年の句に「物價騰貴」と前置して

唐辛子辛き命をつなぎけり

などあるも偶然ではないが、彼もかゝる貧苦の中に、他の者の豪奢を極めるのを見て、現實社會の矛盾を感じないわけにゆかなかつた。

先日久松老公七十ノ賀筵ニ二萬圓費サレシト聞キシガ今度韓帝五十ノ賀筵ハ二百萬元ヲ要スル由考ヘテ見ル程妙ナ心持ニナル(註12)

妙な心持とは抑々何であらうか? いふ迄もなく貧富の懸隔の甚だしきに驚嘆した聲に他なら

ない。彼が自分より劣つてゐると感じたものが、社會に厚遇せられるのを快からず思ひ、それらに對して呪咀の念を洩したことは後に述べるであらうが、それにも拘らず彼はこの矛盾を解決する者とならず、回避して風流韻事に没り、文學の上での觀念的な超階級の世界に満足した。だがその結果、彼の俳句と短歌は、彼と同じ境遇にあるものゝものとならず、新社會に覇を稱するに至つた社會層の慰安と裝飾となり了つたのであるが、このことは一に彼が病氣のために生活意慾を喪失したゝめもあるが、社會の明日の考察に明確な認識をもたなかつたゝめに他ならない。だから其の後の萬葉調短歌に至つては貴族的な要素が濃く、初期の寫生の素朴さは跡なくなり、歿後もその門流によつて其傾向が濃化されてゐる。この事は今後も十分に批判されなくてはならぬ。

註1 二十五年十一月十九日附大原恆徳氏宛

2 同二十一日附

3 二十七年三月八日附大原恆徳氏宛書簡

4 森喜一氏「日清戰爭前後の財政々策」(『歴史科學』八年六月號)

5 田中康夫氏「戰爭史」(岩波 資本主義發達史講座)

- 6 「詩歌の起原及變遷」(改造社全集十二卷四二〇頁参照)
- 7 明治七年十二月の『新聞雜誌』記事
- 8 同七月中上川彦次郎氏『民間雜誌』第四編、共に雜誌『理想』昭和八年一月號より
- 9 「筆まかせ」美人の笑顏」
- 10 三十年十一月四日附五百木飄亭氏宛書簡
- 11 三十一年一月一日附大原恆徳氏宛
- 12 『仰臥漫録』

四、從 軍

「日清戦争は、日本………が資本主義の國際的………の體制の一環としての自己を確立するため
に謂ゆる國運を賭した最初の戦争であつた」(註1)と云はれる。従つて新編制の社會の下に、立
身出世を心がけてゐた新時代のインテリゲンツが、この戦争を好機として勇躍してこの國のため
に盡さうとしたのは當然であつた。この戦争に従軍した文人に、森鷗外・國木田獨步・國分青崖・田
山花袋・與謝野鐵幹らがあつたが、日本新聞からも從軍記者が行き、其の記事は評判がよかつた。

子規は古島一雄に向つて從軍さしてくれと申出で、古島に「體が弱いからやめろ」と云はれたが、
聽かずに迫つたので從軍さすことになつた。(註2)それは明治二十八年二月のことであつたが、
同月二十五日附で彼は碧梧桐、虚子に宛て異常な昂奮をもつて手紙を書いてゐる。

——征清の軍起りて天下震駭し、旅順威海衛の戦捷は神州をして世界の最強國たらしめたり、
兵士克く勇に民庶克く順に以て此に國光を發揚す、而して戦捷の及ぶ所徒に兵勢振ひ、愛國心
固きのみならず、殖産富み工業起り學問進み美術新ならんとす、吾人文學に志す者、亦之に適
應し之を發達するの準備なかるべけんや、僕適賦を新聞に操る、或は以て新聞記者として軍に
從ふを得べし、而して若し此機を徒過するあらんか、懶に非れば即ち愚のみ、傲に非れば則ち
怯のみ、是に於て意を決して軍に従ふ——

その言葉には當時の國家意識と興隆しつゝある新興階級の感情が明瞭に代辯されてゐるが、又
彼がいかに勇躍軍に従つたかを示してゐる。而して其目的は

——僕の志す所文學に在り、文學に二種あり、一に曰く詩文小説を作爲するなり、是れ雅事に
屬す、二に曰く文學書を編纂し文學者を教育するなり——軍に従ふの一事以て雅事に助くるあ
るか僕之を知らず、雅事に俗事に共に助くるあるか僕之を知らず、然りと雖孰れか其一を得ん

ことは僕之を期す、縷々の理些々の事解説を要せず、之を志す所に照し計畫する所に考へば則ち明なるべし——

とある通り、戦役を機として變つた地を踏み、文學上に彼の所謂雅俗いづれかの利を得んとするところあつたのである。これは子規に限らず、此時代のインテリゲン트가同じやうな目的と昂奮を以て従軍したものであることは、與謝野鐵幹に對して、その學兄落合直文が與へた書簡に「こたび征清のみいくさは、歴史上ためしもあらぬ盛舉なり、歌よむものは大にうたはさるべからず——あはれから山の月、もろこしが原の雪、必ずや君の如き歌人の渡來をまち居らむ」などあるところに現はれてをり、子規もそれらと同じく、何らか文學的なものに利用しようとしたものであることは明らかである。

かくて三月三日東京を出發、廣島・松山に半月ばかりをすごし、二十一日従軍許可、翌四月七日出發の命をうけ、十日宇品を發したが、船中すでに近衛師團の下士・將校らと新聞記者待遇上のことによつて衝突し、甚しくインテリゲンタとしての矜持を傷けられたことは「従軍記事」に記されてゐる通りである。當時戦争によつての軍人軍屬……は一方ならぬものがあり、それが無智な民衆の歡迎に乗じて度を加へたものであるが、子規が「新聞記者は兵卒同様(註)」なる

言葉に憤慨してゐるところに、彼の矜持の蹂躪に對する熱烈な抗議を我々は見ることが出来る。このことは同じくこの戦争に千代田艦に乗つて従軍した獨歩が、將校にのみしか眼を注がなかつたのと同じく、彼らの階級的眼界の狭さと、兵卒を劣等のものとなし、それとは何か自分を異つたものと見てゐる矜持の程を示してゐる。然してこれを社會的に見れば、維新後の民権運動などの不徹底による身分的な殘滓が、新たに生じた小ブルジョア的な階級觀念と混淆したものである。彼が曹長・部長に對して憎惡の感情を示しながら、久松伯に刀一口をねだつて光榮と感じたりしたところにも、彼の階級觀は明らかになる。

さて子規は十三日大連灣に到着、柳樹屯・金州邊に一月ばかりぶら／＼してゐた。これより前三月戦争は休戦になつてゐたのであるが、到着後子規は新聞記者待遇について曹長と衝突し、更に管理部長に懇へたが却つて「一兵卒同様」と云はれ、憤然として歸國せんと決心し、「陣中にやごとなき君の在しけるが、常に吾等に勤めて今暫くこゝに留るべし」と云はれ、袂を拂ひかねたが構和の報にいよ／＼歸國することとなり、五月十三日佐渡國丸に搭乘したが、途中十七日船中で咯血、二十三日和田岬上陸、神戸病院に入院した。この時は人力車にさへ乗れず、釣臺で運ばれた程であつたが、約二ヶ月にてやゝ恢復したので、さらに須磨保養院に約一ヶ月療養し、郷里

に五十日ほど遊んだのち、十月十九日松山を發し、廣島、須磨、大阪を経て奈良に遊び月末東京に歸つた。この後の彼は大體病床に就くやうになり、従つて彼の「文學と討死」する覺悟に拍車をかけることゝなつた。

いふまでもなく文學者の文學者的な修養は、生きた社會の現實を見つめてそれを把握することにある。それはたとへ俳句・短歌の如き一見出世間的なものでも例外たり得ない。その點で子規が何らか文學的修養に資すべく、病弱の體を引ずつてまで従軍したのは彼のために慶すべきことであつた。しかしそこでも彼の士族的乃至プチ・ブルジョア的な態度は、現實をそのありのままに把握することができなかつた。彼が「兵卒」と同列にされて憤慨したはいゝが、兵卒とは何であるか、またそれと自分たちの現實的な距離を、も少し冷靜に考ふべきではなかつたらうかと彼のために惜しまれる。従軍によつて彼の拂つた犠牲が大なるものがあつたに拘らず、得たところは極めて僅かであり、却つて文學に逃避すべきより大きな契機を與へられたにすぎなかつた。そしてこの事は日清戰爭の歴史的意義と、子規等をも含むインテリゲンツの當該機構への依存とに密接な連繫をもつてをり、上向期に在つた生産機構への小ブルジョアの期待の強かつたことに源を置くものでなければならぬ。

然しいづれにせよ日清戰爭が「舊日本が新日本として蛹脱する轉換期に於ける戰爭」(註4)であり、同時に子規等の士族的インテリゲンツも、資本主義的に訓練されたインテリゲンツとして「蛹脱」しつゝあつた。この事は、これ以後の彼の文學の動向を見る上に注意されねばならないことである。

註1 田中康夫氏「戰爭史」(岩波 資本主義發達史講座)

2 古島一雄氏「日本新聞時代の子規」(日本及日本人子規號)

3 『從軍記事』

4 田中康夫氏前掲書

五、病褥に於ける活動

子規は生れつき丈夫な方ではなかつたらしい。上京してから二十一年八月浦賀・横須賀から鎌倉に遊び、雨に會つて血を吐いたことがあつたが、それまでにも咽喉を痛めて血を吐くことがあつたので、それだらうと思つてゐた。「筆まかせ」(「多病才子」の項)にも、左のやうに自己の病氣を數へ立て

——今身體の上部より舉げんに、神経質の癖として腦のわるきは當り前にて、時々は眩暈を起し、又は頭蓋骨のさげなん心地すること少からず。第二に眼は血膜炎にて下瞼に腫物を生ずること絶えず——齒は堅固ならず、常に痛む程にはあらねど、多少動搖を感じるが如きは屢々なり。第四、肺はいふまでもなくよろしからず、殊に左方をよろしからずとなす。此春學校にて測りし時は三百二十リットルの肺量なりしが、今は其半分位なるべし。第五、胃のわるきこと書生の通病、日本人の通病なる上に一層のはけしきを加へ、食後直ちに嘔吐すること妙なり。第六、腸も面白からず、第七、肛門不都合にて糞は常に秘結し、爲に脱肛することを常とす。只々全體の上にて病氣なきは足のみ。(脚氣、リウマチスの如き病なし)されどもと貧血病なれば冬季は足指の冷却すること氷よりも甚し。才子多病といふ語あり、若し多病は才子なりといふ反對の眞なるを許さば、世の中に我程の者は多からざるべし呵々

と云つてゐるのは、多少の誇張はあるにしても大體眞實であつたらうと思はれる。二十六年の六月には、七日頃から頭痛發熱し、十日に至つて夜熱烈しく、腦膜炎ではないかと夜半に醫師の診察をうけたところ、瘧と判明したがやゝ快方に向つたものゝ七月半ばまでぶらぶらしてゐたやうである。この月十九日には東京を出發して奥羽旅行をなし、翌八月二十日歸京した。

しかしほんとうに病臥時代を現出したのはいふまでもなく日清戰爭從軍以後である。從軍後東京へ歸つてからも、神経痛といふことで足腰が立たず、且つ風邪を引いたりして十一月十二月はくに社へも出られなかつたが、翌二十九年二月ごろから再び病床に呻吟するやうになつた。此ろ時は醫師が病名を判然と云はないので、彼は歩行困難だからリウマチスであらう位に考へてゐたらしいが、リウマチス専門の醫師の診察をうけたところ、リウマチスではないといはれ、大に煩悶せざるをえざるに至つた。彼は三月十七日附虚子宛の書簡で、「儂麻質斯にあらぬことは僕も略々假定し居たり、今更驚くべきわけもなし、たとひ地裂山摧くとも驚かぬ覺悟を極め居たり、今更風聲鶴唳に驚くべきわけもなし」と云つて落ちつきぶりを示してはゐるが、その前に「貴兄驚き給ふか僕は自ら驚きたり——」など云つてゐるところより見て、不治の病と宣告された心の動搖のさまが遺憾なくあらはれてゐるやうである。「醫師の歸りたる後十分計り何もせず只枕に着きぬ其間何を考へしか一向に記憶せず——」とも云つてゐる。此頃の彼の身體は、脊中に穴があき、痔瘻のために尻にも穴があいたので坐することも出来ず、すつと寝こむやうになつた。「——若し此儘で一生坐ることの出来ぬものならば實に閉口の外無御座候、それがために近來は毎日發熱致解熱劑は少しも効力無之候、からだ中寸地も餘さず病氣になることゝ覺悟致候。」(註1)と云つてゐる

る。それを押して自宅に小集を催したり、中山・船橋等に遊んだこともあつたが、この病苦のために次第に現實を回避した風雅の境地へ次第に歩を進めつゝあつた。

——小生追々衰弱もとより望も何もなきからだなれども、世の中にある限り人間並に働かねば一家をいかんともしがたく、いやはや苦しき境涯に陥り候。今日にては何もほしきもの無之、二頃の田をもつて田舎に閑居致したきばかりに候(註2)

といふ言葉は、蓋し彼の本音であつたに違ひないが、さういふ彼が不自由ながらも衣食に事缺かなかつたのは全く羯南の特別の配慮によるものであらうが、然しそのために個々人の上に現はれた現實上の矛盾が眼に入らなかつたものであらう。而してこの病氣が寫生的な手法に行詰りを與へ、蕪村調の配合主義に轉ずる直接の動因となつたことは後に説くであらうが、注意されなくてはならない。

斯くて三十年には、二月ごろ腰痛があまりに烈しいので佐藤三吉博士の診察をうけたが、二月から三月へかけて三十九度近くの發熱があり、且つ腰の腫れも甚しく、咳嗽をしても患所へひびき、仰向いても左向いても眠れず、右向いてばかり寝るのに堪へられないと述べてゐる(註3)四月手術をうけたが、このごろは僅かに縁端へ出て萩や芒の芽をながめる位で、彼の寫生をいよ

く不可能ならしめた。かゝる状態は、彼の俳句が廣い宇宙的なものから箱庭的な自然を對象とするものに退却せしめつゝあり、代るに蕪村流の取合せ的なのが多くなりつゝあつた。病氣は五月やゝ重篤、六月やゝ小康といふやうな状態だつたが、六月十五日附の漱石宛の書簡に

毎日の雨うらめしく、天氣晴て熱低き時は愉快で／＼たまらぬ程なれど、さりとて望も何もなければほんの其日／＼の苦樂に心をなやまし申候。誠を申せば死といふことより外に何の望も無之候。生きて居る間に死にたいとは思ふ筈はないやうなれど、回復の望なくして苦痛をうくる程世に苦しきものは無之候

と云つてをり、又この年の暮には忙しかつたので晝間眠つて四日ばかり徹夜で執筆したゝめ一度七度九分ばかり熱が出たが、格別の影響はなかつたと人に報じてゐる。(註4)だが腰は腫れ膿は少しづつ漏れ、脊中はたゞれて皮が剝け、時々針で刺すやうな痛みを感じ、狂聲をすら發するほどであつた。随つて藥價も一ヶ月十圓ぐらゐに上つたが、加藤に拂つてもらつたと云つてゐる。

三十一年、二年は時々發熱し苦しめられたが、比較的平穩のやうであつたが、三十二年の五月には

私の病勢其後やうやく重り五日頃より發熱亂調子にて晝夜おし通しに苦められ三四日は睡紙

も出来ず宛然一昨年 of 容態に類似致居候。此二三日稍心地よく、昨日よりは熱のさしひきが毎日一回ときまり眠も出来申候、熱は昨日の夕方は三十九度四分に候、今の處ではまだ一昨年 of やうに衰弱不致候へども此上毎日つゞけさまにやられたら、終には全く弱り可申候。腰部は痔瘻にてはなく矢張同じもの、由其痛の鋭敏なるには困りきり申候、毎日繻帯のとりかへには大聲あけて泣申候、平時にても痛みて堪へ難きこと多く誠にてもあまし候、體の動きがむづかしく、咳嗽さへ一々腰部にひびきて困難するなど總て一昨年に似てをれども今年の方が軽くて何事もしやすく候(註5)

といふ状態であり、三十三年、四年は病勢一進一退の状態であつたが、大體において悪い方に向つてゐたことはいふまでもない。そのため三十三年の秋ごろ一家を擧げて興津へ移住する議が起り、親戚友人に謀つたが實現を見るに至らず、十一月からは歌・俳句の會も子規の處ではやらなくなり、蕪村忌の記念撮影にも参加せぬやうになつた。三十四年には病ます／＼重篤に陥り、其苦痛を紛らすために『墨汁一滴』の執筆を初めたのであるが、その中に「をかしければ笑ふ。悲しければ泣く。併し痛の烈しい時には仕様がなから、うめくか、叫ぶか、泣くか、又は黙つてこらへてゐるかする。其中で黙つてこらへて居るのが一番苦しい。盛んにうめき、盛んに泣くと少しく

痛が減ずる。」と云つてゐる。この間に彼は三十四年に『墨汁一滴』、三十五年には『病床六尺』『仰臥漫録』等の隨筆を書いてゐる。(『仰臥漫録』は三十三年ごろから書き初めた。『病床六尺』では、

病床に寝て、身動きの出来る間は、敢て病氣を辛しとも思はず、平氣で寝轉んで居つたが、此頃のやうに、身動きが出来なくなつては、精神の煩悶を起して、殆んど毎日氣違のやうな苦しみをする。この苦しみを受けまいと思ふて、色々に工夫して、或は動かぬ體を無理に動かして見る。愈々煩悶する。頭がムシヤ／＼となる。もはやたまらるので、こらへにこらへた袋の緒は切れて、遂に破裂する。もう斯うなると駄目である。絶叫。號泣。益々絶叫する。益々號泣する。その苦その痛何とも形容することは出来ない。寧ろ眞の狂人となつてしまへば樂であらうと思ふけれどそれも出来ぬ。若し死ぬることが出来ればそれは何よりも望むところである。併し死ぬることも出来ねば殺して呉れるものもない。——誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか。誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか。(二十日、傍點子規)

と書いてゐるが、『仰臥漫録』には、十月二十六日の項に「此頃ノ容體及ビ毎日ノ例」と題して左のやうに記してゐる。

病氣ハ表面ニサシタル變動ハナイガ次第ニ體ガ衰ヘテ行クコトハ争ハレヌ。膿ノ出ル口ハ次第ニフェル、寢返リハ次第ニムツカシクナル、衰弱ノタメ何モスルノガイヤデ只ボンヤリト寢テ居ルヤウナコトガ多イ。腸骨ノ側ニ新ニ膿ノ口ガ出來テ其近邊ガ痛ム、コレガ寢返リヲ困難ニスル大原因ニナツテ居ル。右ヘ向クモ左ヘ向クモ仰向ニナルモイヅレニシテモ此痛所ヲ刺激スル、咳ヲシテモコ、ニヒマキ泣イテモコ、ニヒマク。

繃帶ハ毎日一度取換ヘル、コレハ律ノ役ナリ、尻ノサキ最痛ク僅ニ綿ヲ以テ拭フスラ猶疼痛ヲ感ズル。背部ニモ痛キ箇所ガアル。ソレ故繃帶取換ハ余ニ取ツテモ律ニ取ツテモ毎日ノ一大難事デアル。此際ニ便通アル例デ、都合四十分乃至一時間ヲ要スル。肛門ノ開閉ガ尻ノ痛所ヲ刺戟スルノト腸ノ運動ガ左腸骨邊ノ痛所ヲ刺戟スルノトデ便通ガ催サレタ時之ヲ猶豫スル力モナケレバ奥ノ方ニアル屎ヲリキミ出ス力モ無イ、只其出ルニ任スルノデアルカラ日ニ幾度アルカモ知レヌ。從ツテ家人ハ暫時モ家ヲ離レルコトガ出來ヌノハ實ニ氣ノ毒ノ次第ダ。

——齒齦カラ出ル膿ハ右ノ方モ左ノ方モ少シモ衰ヘヌ。毎日幾度トナク綿デ拭ヒ取ルノデアルガ體ノ弱ツテ居ル日ハ十分ニ拭ヒ取ラズニ捨テ、置クコトモアル。

物ヲ見テ時々目ガチカ、スルヤウニ痛ムノ八年來ノコトデアルガ先日逆上以來愈ツヨクナ

ツテ新聞ナドヲ見ルト直ニ痛ンデ來テ目ヲアケテ居ラレヌヤウニナツタ。ソレデ黒眼鏡ヲカケテ新聞ヲ讀ンデ居ル。

朝々湯婆ヲ入レル。熱出ヌ。小便ニハ黄色ノ交リ物アルコト多シ。

食事ハ相變ラズ唯一ノ樂デアルガモウ思フヤウニハ食ハレヌ。食フトスグ腸胃ガ變ナ運動ヲ起シテ少シハ痛ム。食フタ者ハ少シモ消化セズ肛門ニ出ル。

——齒ハ右ノ方ニテ嚙ム。左ノ方ハ痛クテ嚙メヌ。

斯かる状態に在つて彼が苦痛を少しでも減ずるには、何か筆をとつて紛らしてゐる外はなかつた。以上の隨筆の執筆や、また繪具と繪筆をとつて枕頭の草花や果物類を寫生してわづかに病苦を遣つた。この手段は病氣のためやむを得なかつたとはいへ、彼の當初の寫生が、科學的に自然を見据ゑる態度であつたに引かへ、全くの逃避的虚無的に墮し去つてゐたことを示すものである。例へば

——痛くてくたまらぬ時、十四五年前に見た吾妻村あたりの石竹島を思ひ出して見た。(註6)

此頃はモルヒネを飲んでから寫生をやるのが何よりの楽しみになつてゐる。(註7)

とあるのが何よりもそれを證してをり、それが當初の自然に對するのと其規模において、將又精

神・態度において雲泥の差があるは明らかである。然るに子規の文獻を年表的に記すより他に方法論をもたぬ講壇的史家は、彼が病苦を紛らすために南岳の『百花繪卷』を手に入れて喜んだこと、紅葉が死ぬ少し前に丸善でセンチユリー辭典を買つたことを比較し、「兩者の眞美を追求した純粹性は、將に一致點を見出すもの」(註8)と云つて隨喜の涙を流し、或は唯美的な蕪村調への轉落を何らかの進歩性をもつものゝやうに喋々するのである。(註9)これは彼らの所謂史的研究のノンセンスぶりを暴露する以外の何でもない。

いづれにせよ子規は「晝夜の別なく、五體すきなしといふ拷問」(註10)をうけてゐるやうな病苦に呻吟しつゝあり、その慰めの手すさびである文學が何ら積極性をも進歩性をも持つものではないことは餘りにも明瞭である。

然しながらかゝる叫喚と怒號の病苦の中に、なほ且つ宗教をも信じなかつたことは彼の唯物的な態度を示すもので、彼はそれより前、二十八年の『養病雜記』で「人間は宇宙間に或る一種の調和を得て生り出でたる若干元素のかたまりなり——生り出でし時の情況に因りて權兵衛ともなれば太閤様ともなり、乞食ともなれば大將ともなる。」と云つてゐるが、これは福澤諭吉が「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」など云つたのと同じ新興的な觀念の進歩的態度を示す

ものであつた。「如何にして日を暮らすべき」誰か此苦を救つて呉れる者はあるまいか、此に至つて宗教問題に到着したと宗教家はいふであらう。併し宗教を信ぜぬ余には宗教も何の役にも立たない。基督教を信ぜぬ者には神の救ひの手は届かない。佛教を信ぜぬ者は南無阿彌陀佛を繰返して日を暮らすことも出来ない。(註11)「耶蘇信者某一日余の枕邊に來りて説いて曰く此世は短いです、次の世は永いですが、あなたはキリストのおよみ返りを信する事によりて幸福であります。余は某の好意に對して深く感謝の意を表する者なれども、奈何せん余が現在の苦痛餘り劇しくして未だ永遠の幸福を圖るに暇あらず。願はくは神先づ余に一日の間を與へて二十四時の間自由に身を動かしたらふく食を食らしめよ。而して後に徐ろに永遠の幸福を考へ見んか。(註12)かゝる言は彼の氣まぐれの放言ではなく、多かれ少かれその態度の科學的さに基いてゐる。然しそれにも拘らず「モルヒネをのんで草花を寫生」することを唯一の慰めとなすやうな態度に墮したのには是非もなきことであつた。この轉化はまた彼の病氣のみによつて起つたものではなく、むしろ病氣も一因子ではあらうが、東洋文人的と云はれる逃避的境地で、現實の鬭争における敗北者の境地である。同じ不治の病に居ながらも紅葉は、百何圓かのセンチユリー辭典を求める程の智識を欲してゐたが、それにはさういふ事が可能である彼の生活が基底となつてゐる。それに反して子規

は「近來は書物といふもの——一冊も買へぬやう相成(註13)といふ其生活が基底となつてゐる。彼の現實に對する反抗は跡なくなつたと同時に、金を輕蔑した従前の態度を非とし、以後金ニ對シテ非常ニ恐ロシキヤウナ感ジヲ起シ(註14)たと云つてゐるが、封建武士的な賤金主義から、金の恐るべく尊ぶべきを認めなければならなくなつた眞率なる告白と見るべきである。だが

余書生タリシ時ハ大學ヲ卒業シテ少クトモ五十圓ノ月給ヲ取ラント思ヘリ、其頃ハ學士トリツキノ月給ハ醫學士ノ外ハ大方五十圓ノキマリナリキ、——然ルニ家族ヲ迎ヘテ三人ニテ二十圓ノ月給ヲモラヒシトキハ金ノ不足スルハイフマデモナク、故郷へ手紙ヤリテ助力ヲ乞ヘバ自立セヨト伯父ニ叱ラレ、サリトテ日本新聞ヲ去リテ他ノ下ラヌ奴ニオ辭誼シテ多クノ金ヲモラハンノ意ハ毫モナク、余ハアルトキ雪ノフル夜社ヨリノ歸リガケオ成道ヲ歩行キナガラ蝦蟆口ニ一錢ノ残りサヘナキコトヲ思フテ泣キタイ事モアリキ、——三十圓ニナリテ後ヤウく、一家ノ生計ヲ立テ得ルニ至レリ、今ハ新聞社ノ四十圓トホトトギスノ十圓トヲ合セテ一ヶ月五十圓ノ收入アリ、昔ノ妄想ハ意外ニモ事實トナリテ現ハレタリ、以テ満足スベキナリ(註15)とあるは、物質に對する彼のその時々ノ觀念を現はしてゐるが、次の書簡には、勝氣な彼の他との競争心と、それが後には次第に諦觀的な氣持になつた經路を現はしてゐる。

小生元來金をほしとは存ぜず候へども友達が百圓取つて居るに自分は五十圓しか取らぬ、アイツが五十圓貰ふに自分は二十五圓しか貰はぬといふやうな事に心をなやまし居候處、文士の職分を心得て後全く其煩悶なくなり申候。むしろ人が多く取つて居るだけ、自分が少く取つてゐるだけ自分がえらいやうに存候。何故と申せば「文士は貧乏なれ」といふ神様の掟に自分が叶ひ居候故に御座候。斯く金の上に悟りを開いて後、小生は精神上一段の安慰を得候。それ故此上いくら貧乏になつてもちつとも驚き不申候へども、此上に金をやるといふ變り者出で候はゞそれこそ當惑可致候(註16)——

これを單なる負け惜しみとのみ解するものは、それが皮相の觀察であることを知るべきであらう。そこには求めて得ざりしもの、諦觀的な氣持が十分にあらはれてゐる。そして「富貴在天」といふやうな儒教的な觀念が、そこに變形して「文士は貧乏なれといふ神様の掟」となつてゐるのは、士族的な彼の教養から出發した極めて當然なる到達點である。そしてそれは封建的な賤金思想から資本主義的な自由競争とそれが齎した現實的な矛盾の認識、即ち久松伯の二萬圓を費消する賀筵と自分の生活の對比や友達との報酬の相違、そしてまた次第に金錢賤視の思想への還元の經路を示してゐるが、この到達點は子規ばかりに見るものでなく、我國の無産インテリゲン

に多かれ少かれ見るところの共通の心理であることを、金こそ悪魔であることを表現した『金色夜叉』または「何ごとも金々とわらひすこし経てまたも俄に不平つのもり來」なる啄木の歌にも現はれてゐる。

さて三十五年には全く重篤に陥り、一月ごろから碧梧桐・虚子・鼠骨らが輪番看護に當つたが、五月頃には大苦痛を現じ、絶叫、號泣の状態を呈したのであるが、九月十九日朝苦しみ多かつた此世を去つたのである。

糸瓜 咲いて痰のつまりし佛かな

痰一斗糸瓜の水も間に合はず

をとゝひのへちまの水もとらざりき

の三句が辭世として遺された。享年三十六であつた。

昔から肺を病んで呻吟したものの、記録も多くあるが、彼の如く全身完膚なく病氣に冒されて生存してゐたことは奇蹟であると云はれてゐる。彼の俳句・短歌への傾情が、社會的の活動力を失つてのやむをえぬ到達點であつたにしても、彼の病患が世人の同情の基となり、その俳句・短歌普及の一因となつたことはもはや明らかであるが、殊に彼の晩年の隨筆が今日に至るも讀む者

を絶たないのは、確かにさういふ關係があるものと考へられる。それにも拘らずその中には、貧苦と病苦とに虐められる一個の人間の、現實社會に對する絶望的な感情や、諦められぬものを強ひて意志的に諦めようとした感情をあらはしてゐる。その感情は、經濟的動搖や社會情勢の不安に喘ぐ人々の絶望的な感情と同じものであるので、同じやうな環境と不安に戦くインテリゲントの同感を得たのは當然である。

註1 四月二十八日附大原恆徳氏宛

2 五月日附不明伊藤松宇氏宛

3 三月二十日附大原氏宛

4 三十一年一月一日附同上

5 五月十二日附同上

6 『最汁一滴』

7 『病床六尺』

8 藤川忠治氏『正岡子規』

9 志田義秀氏「現代俳句」(岩波『日本文學』所收) 同「明治俳諧史」(改造社俳句講座史的研究篇)

- 10 『病床六尺』
- 11 前掲書
- 12 『墨汁一滴』
- 13 大原氏宛書簡既出
- 14 『仰臥漫錄』
- 15 三十三年六月二十五日附淺井忠氏宛書簡

第二章 思想より觀たる子規

一、性格及び思想

子規が少年時代には自由民権論に熱中したことは前に述べたが、「天國會を現はさんとす」といふ言葉は徹底的な自由民権を主張したのではなく、直接國稅何圓以上といふ有産者的な國會開設を要望し、それに満足してしまつたとも解されないこともない。それは前に記したやうな彼の言葉、「士族」と「豪家の息子」を先天的に優秀なものと考へてゐた思想（既出二二頁）より見て推知しうることであり、またこのことは明治七年板垣、後藤、副島が民撰議院建白をしたとき、「今夫レ、斯議院ヲ立ツルモ、亦遽カニ人民其名代人ヲ擇ブノ權利ヲ一般ニセント云フニハアラズ、士族及ビ豪家ノ農商ヲシテ、獨リ、姑ラク、此權利ヲ保有セシメン而已」（註一）とあるその見方と何らかの繋がりを見るものであるが、いづれにしても此時代の彼は、その生涯の中で最も進歩の側に立つてゐた。と同時にまた、一面さういふデモクラティックスピリットとは凡そ反對の要素をも有してゐたことは、漱石との應酬（既出二三頁）にも現はれてゐるし、可なり矛盾した

二面をもつてをり、その矛盾を矛盾として考へることもなかつたらしい。この事はいふまでもなく維新の特殊性に基づく民権的な精神の不徹底に根を置くものであるが、また彼に對して漱石が「御前の如く朝から晩まで書き續けにては此 *Hero* を養ふ餘地なからんかと掛念仕る也」(註2)と忠告した通り、子規の生に對する苦惱なき文筆娛樂専念も與つてゐると思ふ。このものゝ考への不徹底さは、彼の生涯と全文學的行動に絶えず撞着と相尅を演ぜしめ、その度に彼はそれを解決するものとならないで、中途半端のまゝに問題を廻避してしまつてゐる。その點が同じやうな一歩を踏んだと思はれる透谷などが、只管インテリゲンツトとしての時代の惱みを惱みぬいたのに比較して、甚しい物足らなさを感じさせ「人生に相渉るとは何の謂ぞや」と嘲けつた透谷が、さう云ひながら却つて深く人生の根本問題にまで到徹しようとしてゐたのと反對に、子規はたゞ「芭蕉に佳句二百句、他はすべて駄句悪句と批判するだけで、芭蕉の苦惱にも人生の歸趨にも思ひ到らうとはしなかつた」(註3)その生ぬるさが窺はれ、それが彼に在つては病氣によるものでもあつたらうが、其の末流に至つて安易な小市民的な境地に安住しようとする傾向をさへ呈して來たことは其處に根を置くものと思ふ。

然し彼が獨裁力を發揮したのはいふまでもなく晩年で、これは彼の官僚主義といふより、漸く

彼の下に集つた人々のために是非なくさうせねばならなくなつたらしい。子規の俳句におけるグループは、初め同郷關係をもつて立つ朋黨主義のものであつたため、曩に述べたやうな松山といふ土地の封建性が自立の精神を排除し、それを指導するにはやむをえずさうせねばならなかつたのであらう。たとへば虚子の『柿二つ』に出て來る人々が、如何に自我のない人々であるかを見ればそれがわかるが、かゝる人々と共に病苦に攻められつゝ遮二無二「文學と討死」の覺悟を以て進むためには、勢ひ專制的ならざるを得なかつたのであるまいか、と見てくると彼の封建的指導辭が今日指摘されてゐるのも、むしろ同情の眼を以て見るべきではなからうか。

さういふわけで子規の名聲が高くなり、人が多くその下に集るに及んで子規の官僚支配は完成されたのであるが、この事はまた彼の現實生活における失望と纏れ合つてゐることも見逃せない。漱石は彼について「何でも大將にならなけりや承知しない男」だと云つてゐるが、少年時代から人に負けるのが嫌ひで、朋友の中の勝れた人物を見出し、それを標準にしてそれに勝たうと努めたらしい。生涯を通じて畏敬したらしく思はれる漱石に對してさへそれを試みようとしたこともある位である。(註4) さういふ燃えるやうな野心が一方の出口を塞がれたので、文學方面に出口を求め、崇高にして冒すべからざる文學を作り上げたことと思ふが、その文學はもはや何ら積極

的な意義はもとより、當初の僅かな進歩的な一面である寫生にさへ行詰つて、唯美的幻想的な蕪村調へ突入しつゝあつたのである。

以上の子規の官僚的な特質は又、官僚支配の完成と相俟つてそれに倣る人々の美點の強調が、其歿後へかけて彼が偶像的に崇拜されるに至らしめたのだ。子規に接觸した人々は、さういふ關係から誰も彼の性癖を指摘したものはなかつたが、たゞ一人若尾瀾水がそれを批判した。それは俳誌『木兎』二卷二號に「子規の死」と題して載せられた一文によつてであるが、瀾水はそこで子規の才、その自主獨往の精神、勤勉、細心、秩序、清潔等の美點を數へあげたのち、その缺點をも左のやうに記してゐる。

——先生（子規、筆者註）が枕を敬て、時々きれ長き三白眼を以て客の面上を顧眄しつゝ最も満足けに説き出し來る話題は、多くは厭ふべき人身攻撃、若しくは他人の失策話、又は嘲笑すべき愚人の行爲等なりき、先生は物に同情せんよりは寧ろ冷評するに於て愉快を感じたるが如し

と云つてゐる。この言葉は瀾水の勝手な主觀的なものではなく、子規には先天的に他を冷評する癖があつたやうで、「筆まかせ」にも自己の性病を左のやうに云つてゐる。

——我程意思の力弱きものは少なかるべし。

——惡口はよくないと知りながら、いやな奴だと思へば其惡事や缺點をわざ／＼他人に吹聴するを好む。殊に他人を冷笑し輕蔑し人の揚げ足を取り、あるは頭ごなしにこなすことおびたゞし——人、我を厚遇すれば我も亦厚遇し、人我を冷評する時は我も亦彼を冷評し、人、我に無禮の一言を加ふれば、我も亦彼に一言の無禮を加ふ。

といひ、又「余は偏屈なり、頑固なり。すきな人は無暗にすきにて嫌ひな人は無暗にきらひなり。」或は「余は評論に於て人をほめるより寧ろそしることを好むものなり。」といふことが、「朋友を選ぶ」とか、或は「學識を見ん」とするやうな動機から出てゐるにもせよ、多かれ少なかれ「すききらひ」の烈しさから出てゐるものと云つてよい。

然し「筆まかせ」時代のそれはまだ無邪氣な、いはゞ子規のすききらひに似たやうなもので、それが後に彼が社會の現實に觸れ、自己より劣つてゐる人が世にもてはやされ、自分ほど努力せぬ人が時を得てゐるのを見ると敢然として攻撃を加へるに至つた。たとへば彼は中江兆民の「一年有半」に對して「淺薄ナコトヲ書キナラベタリ」云々と辛辣な批判をしてゐるが、（註5）それはこの書が「——流行シ六版七版ニ及」んだから一杯の冷水をかけたもので、もし賣れなかつたら斯

くまでに評しはしなかつたらう。また「墨汁一滴」に明星に於ける落合直文の歌を批判してゐるのも、有名な「子規鐵幹不可併稱論」も、後に述べるやうに明星の勢力の旺盛さに引換へての自派の寂寥さに彼らしい癩癩玉を破裂させたもので、それが一應藝術批評といふ上品な粉飾が加へられてゐるまでである。又當時のいはゆる四ツ目屋事件についても、彼は「病床六尺」に書いて國學者の無智を嘲つてゐるが、その編纂者が落合直文であつたことは、國學者の無智にかこつけての、彼の追窮であるとも解されよう。さうして彼が蓼太や梅室・蒼虬などを假借なく筆誅を加へてゐるのも、一に彼らの俳句が非藝術的であつたからには相違ないが、一面彼らがそれを以て豪華な生活をしたことにあつたやうである。又それと反對に、才能をもちながら不遇に終つた文學者を顯揚せんとし、蕪村・太祇・曙覽・元義らの作品を、ある場合には實質以上に高く買ふに至つてゐるが、蓋しこれも自負心強き彼が、現實生活に於てのあまりの社會の冷遇に、敢然として報復せんとした呪咀の聲であらう。彼が五十圓の報酬に「以て満足すべきなり」と云つてゐることや、文學者は貧乏すべきものといふ諦觀的境地は、諦められぬものを強ひて諦めようとする自慰の言葉であつたと解されなくもない。例へば「太祇全集」に附した「俳人太祇」なる文によつても、藝術家の現世的な不遇を述べ、太祇・蕪村の不遇に同情し「甚だしきは蒼虬・梅室などいふ

鼠輩云々」と云つてゐる如き、彼の意圖を明らかにすることができる。

むろんこの特質を瀾水は見遁さなかつた。なほ少しく前掲書の中からその言葉を引用しよう。

——先生は黨同異伐の念甚だ強し、自己の門弟以外のものは容易に其の美所を贊揚せず、若し社會が或人の成功を嘆賞する時は先生に取つては苦悶なり負痛なり、故に悍然として立ち自己の心意に鎮痛劑を投ぜざるなし、則ち強て敵手の暗所缺點を描いて攻撃するなり——

この彼の特性は前に述べた自己の現實生活に對する不滿に基づいてをり、さういふ世間的なものを超越してしまふといふことも出来なかつた。彼が藝術上の價值と社會上の待遇とを不可離なものとして考へてゐたことは、後述するやうにその實朝觀に、歌の勁健なるより見て凡庸な人物でなかつたらうと推してゐる如きがそれを示してをり、それは元義などに對する彼の評價と明らかに撞着する見解であるが、さういふ撞着を撞着と考へ得ないほど彼の論旨は熱病的のものであり、深省を缺いてゐた。しかも如上の彼の現實への不滿に基づく世間的なものへの痛烈な批判が、藝術的に粉飾されてゐるだけ、今日まで藝術向上のための聖戰とのみ解されてゐたのである。

だが以上瀾水の指摘した子規の特性はいはゞ彼個人の性癖であるかも知れない。けれども次の諸點は彼の封建的なものを暴露してゐるものといはなくてはならぬ。

——先生の尊大倨傲を喜ぶや殆んど兒戯に類する虚飾をなす、例へば年少者に對する詞遣を特に横柄にし、或は門人の新古の等級に應じて手加減をなし、手紙を與へるあり、全く與へざるあり、手簡中の文句の如き、年少者に對しては勉めて尊大冷淡なるものを選び、絶えて融々たる眞情の人を醉はしむるものなし、宛名の如きも殿と書し様と書し種々の使ひ分をなす——昔時先生が股肱の門人某、某小説家を訪ひたりとて、先生暴怒して止まず、不見識極まるゝと叱り懲したる事ありき、又予が知れる某、先生の和歌の例會に出席する傍、某歌人と往來せしに先生甚だ不快なりしと見え、門弟某を使喚して彼に他歌人と絶交するか若しくは之を根岸庵一味の徒黨に引入るべしとの趣を勸告せしめたりといふ——

この同黨異伐の觀念、新古尊卑による階級制度の再現は、明らかに專制的な寡頭支配の縮圖に他ならないが、瀾水の此敘述が眞に近いものであることの證左を、我々は虚子の『柿二つ』の中的人格的隸従、また彼の書簡中の新古尊卑の區別、その中でも大阪の水落・露石の如きものに對しては特に鄭重な詞遣をなしてゐる事實に見る。そして士族の子弟と豪家の息子を優秀なものと考へてゐた彼の少年時代の言葉が、そのまゝこゝに現はれてゐることを見出すのだ。もちろん彼の門下碧梧桐が云つてゐるやうに、彼らにとつて彼の家が「自分の宅のやうであり、内證も秘密もなか

つた」(註6)こともあつたらうが、それは彼ら同士が親密なので、他に對しては峻厳な態度で臨んだのである。しかもこの典型的な官僚支配は、社會における封建的殘滓と相俟つて、彼の歿後にホトトギス・アラ、ギ等の閥を形成する基礎をなしてをり、また後に見る指導者は號令するもので、大衆は黙つてそれに追隨してゐればよいといふやうな獨裁的なものを形づくつたのである。

もとより我々はこの子規の暗所を突いて快しとするものではない。けれどもかゝる封建的な傾向を見通しては、日本派の封建性も定型俳句の封建性も指摘できないことになる。子規派が松山の士族を中心とする保守的インテリゲンツの集團であつたことは斷るまでもないが、その俳句の普及につれて松山以外の人々も參加した。然しその多くが松山士族と同じやうな思想・感情をもつ保守的な分子であつたことは、その個々について見れば明らかであるが、この日本派の封建性は他の集團と對比すれば一層明瞭になる。即ち俳壇において日本派と對立の状態だつた秋聲會は、一應自由主義な立場に立つてゐたし、歌壇における根岸派の對立者たる與謝野鐵幹の新詩社は、「新詩社には師なく弟子なし」など呼號した。これに反して子規派は、俳諧にも短歌にも官僚的寡頭支配の一典型たるを示した。これは秋聲會・新詩社が都市民的感情を代表する集團であり、子規派は士族及び地主等の保守的社會層を代表する集團であつたからである。そのため新詩社側

では短歌と共に新體詩を多く作つてゐたが、子規は新體詩に對して甚だしい憎惡を示し、自らも後には新體詩を作つたが、それは時代にそぐはぬ擬古的なものであつたし、従つて見るべきものは殆んど無い。

子規の社會的觀點は、時にそれが階級的なものに向けられなくもなかつた。例へば「十たび歌よみに與ふる書」における御歌所と大臣・元勳と新聞記者との尊卑の對比は、それが老人崇拜を難じた形式ではあるが、階級的觀點に立つて平等な位置を要求しようとする意圖をあらはしてゐる。然し現實的な尊卑に對しての認識を缺いた彼は、その要求も消極的で、僅かに俳句や短歌に於て同列な才能あることを呼號し、以て現實社會における壓迫の息のつきどころを見出したにすぎなかつた。彼の藝術と現實との隔離は矛盾に打つかつてもそれを矛盾として受取ることが出来ず、そこから「文學者貧乏」の理論が顔を出してゐる。

「ホトトギス第四卷第一號のはじめに」と題して彼は左のやうに述べてゐる。

——東京の文學界は長く東京人の占むる所となつたので、文學は東京に限り、文學者は江戸見に限り、文學上の材料は場所も人間も風俗も言葉も東京でなければならぬといふ事になつてしまつた。——そこへヒョコと田舎の少年が出て来て、どうか文學者になりたいといふて見たと

ところで、よしんば其少年に小説の天才といふやうな者があつたにしろ、*「ダマー」*や*「ガマー」*では小説にならぬ。小説になつたとしても誰もこれを引き受けて出版してくれる者は無い。出版になつたとしても誰もそれを見てくれる者はない。仕方が無いから——苦辛をして東京化して、田舎の臭氣はおくびにも出さぬやうにして、それでとゞのつまりは第二流小説家といふ肩書を頂戴するに止まるのだ。水道の水で産湯をつかはなかつた悲しさには彼は一生これより以上に進歩する事は出来ぬ。第一流の位置は依然として江戸兒の専有物になつて居る。——兎に角我々の希望は都會の腐敗した空氣を一掃して、田舎の新鮮なる空氣を入れたいのである。東京言葉と衣服の流行が分らない者は小説家の資格がないだの、戀でなければ文學でないだの、花は莖、虫は蝶、此外には詩美を持つて居る花も虫も無いだの、といふやうな、狭い幼稚な、不健全な思想を破つてしまひたい。流行は美でない、喝采は永久でない。我々は都會人士に媚びて新聞雜誌の上で賞められたくない。我々は斃れて後に已むの決心を以て進むばかりである——

これは文壇のあらゆる関に對する反抗の聲であり、彼の此悲痛な言葉の向ふには、硯友社の小説・秋聲會の俳句・新詩社の詩歌等の都會文學があつたことはいふまでもないが、この反都市的な

感情は更に發展して其歿後、門流中村樂天が二六新報紙上に發表した「俳汝南」や伊藤左千夫の「與謝野晶子の歌を評す」などには、社會位置的な反感といふやうなものが一層濃厚に現はれてをり、赤木格堂の「博文館のしこ文を焼け」なる歌には、硯友社と博文館を都市ブルジョアの産物として、國粹主義者等の反都市的な感情を露骨にしてゐるが、以て子規の文學の社會性が明瞭になり、長塚節の『土』などもさうした一系列の農本主義的なものゝ一の現れと我々は見るといふ。

子規はその保守的イデオロギイを以て凡ゆる近代都市的なものに反對した。就中新體詩・言文一致に對する憎惡は甚しいものがあつた。然し新體詩や言文一致は新社會に基礎を置く近代文學の主流であり、それは資本主義的生産と密接不可離の關係をもつてゐた故に、子規ばかりでなく、他のあらゆる保守的分子の批難と嘲笑の中に發達して今日の狀態になり得たのである。言文一致に對して當初反對した彼が、寫生文を作るに至つて遂に口語文にならなければならなくなつたことは、彼の松山における丁髷と共に、最後の一線を守りきれなくなつての到達點だつたので、彼の不徹底な態度の破綻を示すものに他ならないのであるが、彼を言文一致の創始者の一人の如くに云爲する者の無智無識は暫く措くも、彼が進みゆくものに對して反動的な態度であつたことは知りうると思ふ。

紅露を先頭とする國粹主義文學は、それなくしては資本制生産を發達させることの出来なかつた官僚とブルジョア階級の結託を背景としてゐるものであるが、既に硯友社の眉山すら二十八年『書記官』を著してそれを暴露したし、また、子規も三十年三月廿日附で大原氏に宛て幣制案上程に際して三井の貴族院議員買収を述べてゐる程である。子規の闘争性は「士族的インテリゲン」トの「封建魂」と日清戦役の前後に確立された近代國家權力を反映する強い意力への憧憬」にもとづくものといはれるが、(註7) さういふ社會的地位が、次第に古いものへの傾情となり、初期のわづかばかりの進歩性に倍加する反動性の一面を現はさねばならなかつたのである。彼がしばしば市民階級をおさんどん、床屋、八さん熊さんの名によつてその無智無學を罵り、新體詩・言文一致のブルジョア的のものを排撃せんとしてゐるのは、明治の文化運動一般に見られるやうな上からの啓蒙主義の一端を示すもので、又都市的な諸文學へのその果敢なる闘争は一見近代文學に對する反抗を意味するやうであるが、然し彼自らが身を置いてゐる世代とその反映たる文學を否定し去ることは出来ず、結局近代の第三階級の文學を貴族化させることがその目的であつたのである。俳句において寫生から蕪村調へ、短歌において萬葉調へと赴いたのはさういふ社會關係を背景にしてゐるもので、短歌において寫生を説き身邊雜事歌に移行しつゝあつた彼が、リアリズム

「の歌人たる大隈言道・香川景樹らに對してなした批判はさういふ立場を明らかにするものであり、身邊雜事を萬葉的貴族化することこそ、彼が身を以てなしたところでなければならぬ。然し時代は未だかゝる貴族化を理解せず、したがつて彼の根岸短歌會は其勢力において明星派に一籌を輸さねばならなかつたものである。さういふ状態であつたにも拘らず、彼自身の社會的位置の小市民化が、それに適應する散文形式の文學を求めなければならなかつた。それが寫生文であつたが、そこには明らかに文學に貴族的なものと小市民的なものとの二元的な追求が見られる。

この傾向は後に長塚節・伊藤左千夫の短歌と寫實小説とによつて一層明瞭になつてゐる。

「子規の文學運動は初め一切の封建的觀念から獨立させ、或は卑俗化した宗匠から、また御歌所調から文學を奪取して新時代のインテリゲンツのものにするところに其進歩性が在つた。それを強調するのあまり彼は一切の思想的なもの、理智的なものを極端にまで藝術から驅逐した。そこから人生に涉らない遊びの藝術が再生産されたのである。けれども彼自身當該社會の一員としてある限り、その超社會集團的な藝術至上の孤壘を守り通すことは不可能だつた。藝術の獨自性を説き、文學の超世俗性を口にした彼が、「繪畫彫刻の美を感じる人は紅塵十丈の裏に在りても、山林閑栖の樂を得べく、山水花鳥の美を感じる人は貧苦困頓の間に在りても富貴榮華の樂を得べし」

(註8)とて、恰も思想善導係のやうな口吻を以てその効用を認めたのも、さういふ立場を示してゐるものである。かゝる態度はまた彼が久松伯爵の給費生たり、毎年正月には伺候する習慣等に關係をもつものであらう。

註1 平野義太郎氏「ブルジョア民主主義發達史」(岩波資本主義發達史講座)

2 二十二年十二月卅一日附子規宛書簡

3 片岡良一氏「子規と明治文學史」(『俳句研究』昭和九年九月子規特輯號)

4 菊池謙二郎氏「豫備門時代の子規」(『日本及日本人』昭和三年九月子規號)

5 『仰臥漫録』

6 河東碧梧桐氏「のぼさんと食物」(『日本及日本人』同上)

7 伊澤信平氏「子規の萬葉復活と寫生の提唱」(『短歌研究』十年二月號)

8 『病床謔語』

第二一篇

第一章 子規の文學

一、その文學の發達と地位

子規の文學的萌芽は、松山における漢詩の創作にはじまつてゐる。彼は先に述べたやうに大原觀山について漢學を學んだのであるが、觀山が病弱になつてからは、更に藩の儒者土屋三平（久明）について學んだ。彼が幼學便覽によつて平仄のならべ方を教へられたのは明治十一年、十二歳の時で、五言絶句を毎日一つづつ作つては久明に見てもらつてゐた。後中學に入つてからは河東靜溪に學んだが、十三年ごろ同親吟會なる會を作つて詩をつくり、鬮詩などをやつて靜溪の批評と添削をうけてゐた。當時の詩のグループには太田柴舟・竹村鍊卿・三並松友・安長松南等があつたが、やゝ遅れて柳原極堂も加はり、十三年から十四年へかけて「莫逆詩文」「五友雜誌」「雅

懷詩文」「雅感詩文」などといふ回覽雜誌を作つてゐた。彼等はいはゞ士族的な文學青年であつたのである。かゝる状態は出京後も續いたらしく、「東京へ來ても同じこと、勉強したことは作詩ばかり最勉強せぬは學課なり」（註一）といふ状態は、幾分誇張があるにしても事實に近いものであつたらしい。

十五六年には、先にも述べたやうに洋學と自由民權、漢學と封建的壓制を各聯關的に考へ、漢學を排して洋學を推奨するに至つてゐた。しかしそれは自己の出世のための障害としての漢學のイデオロギイを排撃せんとしたもので、漢詩を排撃せんとしたものではなく、漢詩はすつと後までも作つてゐた。文學と社會とを引離して考へてゐた彼は、漢學を詩化したものが漢詩であることを悟らず、漢學を攻撃して漢詩を弄んでゐた如きは、矛盾きはまる行動であつて、曾て『新體詩抄』で當時の急進的な人々が「日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ」方今ノ學者ハ詩ヲ賦スレバ漢語ヲ用ヒ——」など云つたことに對して甚だしい保守的な立場にあるものであつた。

明治十六年には矢野龍溪の『經國美談』が發行されたが、彼はこれを翌十七年に讀んだらしく、「馬琴の著述の外に一步も踏み出したことのない」彼は、あまり財政的に恵まれてゐない身分で

あるにも拘らず、一圓以上の金を友達と二人で出し合つて買つて讀んだほどの熱心さであつた。其後はさういふ讀み物もなかつたので、「再び徳川文學に戻つて」爲永春水などの人情本を讀むやうになり、一ヶ月一圓もの貸本料を支拂つたこともあつたといふ。(註2) これは春水の作品をゾラに比較して論じてゐることなどより見て、多少封建武士的なものより、やゝ解放された市民的なものを求めた點もあり、且つ思春期に向つてゐた好奇心も手傳つてゐたものと思はれる。

十八年には坪内逍遙の『當世書生氣質』が發行された。これは十四五枚が一冊になつて發行されたもので、彼は九月にこれを讀んだのであるが、この時は既に數冊出たのである。彼はこれを讀んで「文章の雅俗折衷的な所から、趣向の寫實的でしかも活動して居るところから、其上に從來の小説の如く無趣味なものでなく、或る種の趣味を發揮してゐるところから、何一つ余を驚かさぬものは無かつた」と云つてゐるが、更にこれと雁行して發行された逍遙の『小説神髓』を讀んで、「最早この種の小説この種の文體より外に吾々が執るべき筋道はないと思ふて、ぞつこん惚れ込んでしまふた。」(註3)だが内容の寫實的なるを賞するはいゝとしても、文章が「雅俗折衷」であることを擧げてゐるところに、彼の態度のなほ封建的殘滓をもつてゐることがわかる。従つて「この種の小説この種の文體」に「ぞつこん惚れ込んだ」彼の理解の程度もわかると思ふ。

明治の文章史を飾るべきものに言文一致の運動がある。言文一致は、當時の新興ブルジョア階級が貴族的な虚飾と威儀を具へてゐる舊文學に對するリアリズムを唱へ、更にそれをリアルに表現するために採用したものであるが、二葉亭の『浮雲』以來、今日までに、それは明治大正文學の主流に沿うて進展して來、二葉亭・美妙齋はいふまでもなく、硯友社文學の如き擬古文章も終には口語文になつてしまつた如き大勢であつた。子規に於ても初めは頑強にこれを否定して來たのであるが、晩年には寫生文に口語文を採用しなければならなくなつてゐる。いふまでもなくこれは明治文學の主流がリアリズムであり、これを表現するには文章上のリアリズムが必要であつたからで、口語文こそリアリズムに適應する形式であつたのだ。

子規が小説に關心を有し、且つ寫實體に興味をもつてゐたことは、「筆まかせ」に彼が圓朝の話に感じたことを記して「小説の趣向もかくこそありたけれと悟」つたとあるところに明らかにされてゐる。だがこゝで彼の感じたものは圓朝の話が細かく眞に迫つてゐるのに感じたので、圓朝から言文一致を學んだ二葉亭とは大なる距たりがある。二葉亭は其作品の表現をリアルならしめるために言文一致を逍遙に問うた時、逍遙は「あの圓朝の落語通りに書いて見たらどうか」と注意したさうであるが、子規のはさういふのではないらしい。彼は以上の話と殆んど同時の執筆で

ある「筆まかせ」に、「言文一致の利害」なる一文を發表してゐる。即ち彼は演説・談話・講釋の筆記・小説・紀行杯の文章中の言葉會話の部、其他俗人、無學の人に向つての告示・手紙・小兒即ち小學生徒杯の最幼稚なる者に習はしむる文章、教訓の類は言文一致にて分りやすく知らしめるもいゝが、其他の文學を言文一致にする必要はないといひ、言文一致の主張者に對して「彼等は尋常の文章を作り得ざるがためには非るか。彼等は奇を好み新を誇り匹夫匹婦の愛顧を買はんと欲する者にあらざるか——」とまで極言してゐる。この論は非凡といふ人に反駁され、彼は素直に自己の粗漏を認めてゐるが、然し「余は矢張言文一致を餘り好まぬ者なり。固より精細に寫すを得るは争ふべからざるの利なれど、冗長に流れ無味に失するは争ふべからざるの弊なり。——何もかも言文一致ならざるべからずといふは左袒し難し。」と云つてゐる。この一文は彼の研究に於て深く注意せねばならぬもので、彼は後に寫生文を書くに方つて口語文を採用しなければならなくなり、三十三年の「叙事文」で「文體は言文一致か又はそれに近き文體が寫實に適し居るなり。」と云ひ自らも口語文を綴つてゐるため、誤つて言文一致論者の如く論ずる者もあるが、實際は以上のやうなものであつて、文章にはどこまでも貴族的な文體の主張者であり、後にやむをえず口語文に落ちついたのである。

もちろん彼も最初は言文一致に賛する如き言を吐いてはゐるが、「續々といやな言文一致の流行を始めしかば言文一致にはこり／＼した」(註4)ところへ、鑿庭篁村や幸田露伴の小説が出るに及んでそれに傾倒する者となつたのである。これは彼が新しいものゝ勃興についての理解を全く缺き、初めから完成されたものを求めたからで、「新聞雑誌の文學でも余は漢詩を以て比較的に發達したものと思惟するなり」(註5)といふ如く、漢詩そのものゝ未來性などは考へることなしに、たゞ發達したものを求め、發達させることを全く没却してゐたため、一度言文一致が少し亂れて來ると、一切の進歩的なものに反撥し、「——山先生が文學における功は世人に新體詩なる觀念を印記したるのみにて其著作は毫も文學上の價值あら」(註6)ぬことを高調し、その蕪雜・粗奔さを難じたのである。彼の初期の評論には新體詩に對する敵意ある筆鋒を感ぜずにはゐられないものが多くある。

新體詩とは何ぞ。格調の新か、意匠の新か、はた格調意匠共に新なるの謂か。新體詩家は謂ふ、從來の短歌は調短くして歌人の意匠を述ぶるに足らず、古代の言語は數少くして詩家の觀念を盡き出すに足らず。願はくばこゝに新體詩なるものを創め、明治の詩人が縦横無盡に馳驅して以て驥足を伸ぶるに足るべき一新天地を開き、敢て西洋の大家に比して三舍を避けざるの

名篇大作を成さしめんと。——其歌ふ聲はいかに高かりしよ、其歌の調は如何にうつくしかりしよ、之を聴くと共に拍手喝采せし天下の聴衆は如何に多かりしよ。而して未だ數年を経過せざるの今日、彼等が千歳不朽に傳へんと誇言せし數十篇の新體詩は盡く雲散霧消して、復昔日の拍手喝采の聲をも留めざるに至れり。無残ツ新體詩家は斃れたり。空しく京童をして「半詩人さんは何處にどうしてござるやら、去年の秋の煩ひにいつそ死んでしまふたら、斯うした歎きはあるまいに」と諭はしむる英雄の末路悲むべく又憫むべし(註7)

——山輩の新體詩を無性にありがたがる者には芭蕉蕪村の俳句を説くとも其妙を解せざるは當然のみ(註8)

もちろん此言葉の裡には、新體詩抄の著者等が博士や學者であり、且つその名聲噴々たるが、その詩の不出來と考へて彼の批評心を刺戟したのもあらう。事實『新體詩抄』の詩は蕪雜、粗奔、嚴密にいへばほとんど詩といふべからざるものであるかも知れない。が、この蕪雜、粗奔さを經過しなければ日本の近代詩を發達させることの出來なかつたことは、恰も俳句が貞門から蕉風に達するまでには談林を經過しなければならなかつたのと同じであり、すべての藝術は、其階級發達の文化の段階によつてそれ／＼完成への荆棘の道を歩まねばならないことを彼は全く考へ

なかつた。かゝる態度は屢々保守的な人々に見られる類型で、反動的に古いものゝみに心酔する危険性をもつものである。

かゝる過程において彼が露伴の崇拜者となつたことは當然であるが、「今迄は書生氣質風の小説の外は天下に小説はないと思ふてゐた——考へは一轉して、遂に風流佛は小説の最も高尚なるものである、若し小説を書くならば風流佛の如く書かねばならぬといふ事になつてしまつた」(註9)ことは致し方がないとしても、「つまり風流佛の趣向も風流佛の文體も共に斬新である」とまで推稱するに至つたのは、その保守性が然らしめたもので、露伴の小説は「封建的小市民の個人の意志に重きを置き、何れの作品に於ても主人公は凡俗の世界を超越して自己の完成に精進し、あらゆる壓迫にも屈せず闘つて勝利に達してゐる。」(註10)その永遠の藝術に全精力を捧げるその意力と理想主義が子規の投じた點で、封建的觀念でありながら強い自我と個人主義の高調はブルジョア的である(註11)と云はれてゐるが、そのイデオロギイに於て子規と酷似してゐるところから、子規が傾倒したものである。そして風流佛に倣うた『月の都』の起稿となり、その出版蹉跌から封建的な形態たる俳句の改革者となるまでに轉落せねばならなかつた。實にそれは宿命的な悲劇といふほかはなかつた。

彼の文學論は、スペンサーの文體論に影響されてゐるだけで、彼獨自に發見したものである。(ハルトマンの美學の書を叔父加藤恆忠に送られ、後に『しがらみ草紙』に出た鷗外の審美論、ハルトマン美學の譯を讀んだが、兩方共わからずしまひだつた。)何らの先在的なものなくして直感的にあれだけの理論をつくり上げたのは、何としても偉とシなくてはならない。だがそれだけに相當其論に自家撞着を來してゐるところが多いことも否み得ない。例へば「文學漫言」で文學の有用無用の辯をしてゐるが、實用的なものゝみを世人が有用視し、所謂美術的なものを無用視するに對して、「一部分の文學を好んで全部の文學を排斥する」ことの不當を鳴してゐるが、彼自身もそのいづれもを有用視するものではなく、その反對に實用的なものを無用視し、美術的なものを有用視するのである。これは反動的にさうしたのではなく矛盾を感じなかつたのであらう。もちろんこの事は文學と文學者の位置が低かつたに對し、其位置を高からしめ、新興階級の發展段階に適應する高度の文學創成に努めんとする意圖を理解すれば、なぜさういふ矛盾を演じたかは自ら明らかになる。

また彼は「文學は神聖なり、絶對なり、高尚なり、超脱なり」(註12)など云つてその絶對性を高調してゐるかと思へば、「美術文學は制裁の力に頼りて惡を遏むる者に非ずして道德の心に訴へて善を勵ます者なり」とその効用を認めてゐる如き、その矛盾は誰にでも容易く發見することができる。が、大體において初期の論は矛盾を現はしながらも、多少なりとも人生主義に傾いてゐるが、其中に遊戯的要素を宿してゐるに引かへ、後年においてはその遊戯的な一面のみが發展して行つてゐることは注意すべきことである。即ち俳句より短歌は理論的にも作品にも唯美的な傾向が強くなり、遊戯的な氣分を濃厚にしてゐるが、さらに晩年の創始にかゝる寫生文などには、一切を興味的・諦觀的に眺めようとする傍觀主義に傾いてゐる。一二例を挙げれば、右の「文學漫言」を書いた翌廿八年執筆の「棒三昧」には、早稻田文學派の理想主義を攻撃して、何でも理想々々といふは西洋流の悪い考へ方であると斷じ「感情は理窟にあらず、理窟は感情にあらず、さるるを感情に理窟ありといはれてはつじつまの合はぬ骨頂なり。景色を見てあゝ善いと思ふ時何の理想かあるべき、佳人を見てあゝ綺麗と思ふ時に何の理想かあるべき」(註13)と云ふやうになつてゐる。こゝでは明らかに耽美主義らしい面を現はしてゐるが、その彼も明治十九年に久松伯に従つて日光に遊んだ時のことを三十一年に「十年前の夏」と題して回顧してゐるが、その中で「幕府排斥の氣風に養はれたる余は殊の外に家康を憎き者に思ひ、堂塔參差、金碧相映するの宏壯偉麗も家康のためにしたるを思へばそゞろに厭ふべく嫉むべく感じぬ。」と云つてゐる。この觀方に

よれば自分の現實生活から抽象された美といふものゝないことは明らかであるが、この美の感じ方から善悪邪正に拘はらぬ風景・佳人の美を追求する考へ方になり、更に善不善と文學の關係を論じ、惡が心中を去らない限り「道德法律の制裁嚴なれば嚴なるだけ罪人小人を生ずる」とて「この病を救ふには天然を以て良藥となす。天然には善なく孝なし。其者惡ならず。焉んぞ惡の觀念を生ぜん。其者善ならず、焉んぞ善の觀念を生ぜん」(註14)といふやうになつてゐるが、矛盾は蔽ふべからざるものがある。歌論においては一層逃避的になり、

一般にいへば歌は倫理的善惡の外に立つ處に妙味はあるなり。俗世間の渦巻く塵を雲の上で見て居る處に妙味はあるなり。倫理は徒に善を勧め徒に惡を懲す傍に在りて歌は善とも惡ともいはず只々此の如く愉快に此の如く平和なる場所あることを默示するなり。世間は名利に趨り煩惱に苦しめられ掌大の土地の上に氣違ひの如く狂ひまはるを、歌人は獨り之を餘所に見て花に遊び月に戯れ無限の天地に清淨の空氣を吸ひ居るなり。彼俗人だちが歌を善惡の間、俗界の中に求むるは抑々誤れり(註15)

とも云つて居る。前の言葉には一切の社會的「眞」を、抽象的な美の下に隷屬させる危険をもち、後の言葉には明らかに人生から遊離した文學を、支配階級の立場に立つてお説法してゐることがわかり、後に時代がどうあらうと、自分ばかり美に逃避すればよいといふデカダン個人主義をそこから生じてをり、「俗社會」から超越した「聖」なる藝術のための、高濱虛子らに唱道されてゐる貧乏讚美の根はそこから萌芽を出してゐる。

要するに子規の立場は、在來のものに懺焉たらぬが、思ひ切つて新しいものに赴くのではなくして、在來のものを幾分改めようとするもので、それも初めは在來のものへの鬭争も果敢であつたが、晩年にはその打破した破片を拾ひ集めてそれを繋ぎ合せるのやむを得ざるに至らしめた。その原因は必ずしも彼の病氣のみによるものではなく、彼が國粹主義を標榜する日本新聞へ、しかも國粹主義宣傳の一方便としての俳句のために被傭せられたことによるものであらう。それは明らかに當時の政治的經濟的なもの、文學への反映に外ならぬが、當初の鬭志を喪失して結局時代に引摺られた新古典主義に轉向せねばならなくなつたところに、當時のインテリゲンツの進歩性を歪曲させる何か動いてゐたことがわかり、洋畫にその行き方を指示された彼の藝術が國粹主義として落合直文などのものより徹底せざるものである理由も、彼をして日本主義の詩人となしてゐる一派の人々の解釋の妥當でないこともわかると思ふ。

我々は更に子規の文學的地位を、他の明治の文學者との對比に於て観ることの興味を捨つる能

はぬ者だ。先づ言文一致による二葉亭の『浮雲』は二十年の發表であり、美妙の『言文一致論之概略』は二十一年の發表であるが、彼は二十二年の「筆まかせ」で激烈な言文一致反對を表白してゐる。透谷がその周囲の封建的なものを牢獄に譬へ、元祿文學を批評してそれとの徹底的な闘争を「精神の自由」なる名目で決意したのは二十五年であるが、彼はこの時代には露伴の封建的道義觀念による『風流佛』に心酔して『月の都』の創作にかゝつてゐた。透谷がその周囲との闘ひに敗れて自殺した二十七年には、彼は小説に向ふ素志を轉じて「詩人たらんことを欲し」て奥羽に旅行をしてをり、彼がさうして實社會から逃避してゐる時、官僚とブルジョアの結託益々甚しく、物價は愈々騰貴して小市民たる彼らを苦しめた。日清戦争に勇躍しての從軍、起つ能はざる病癯生活、その間いろ／＼な心境に立ち到りながらもそれ以後の彼は蕪地に唯美主義に轉落した。彼が短歌によつて寫實的印象主義から萬葉調へ赴いた三十三年には蘆花が『自然と人生』を公けにし、三十年には獨歩が『獨歩吟』を、三十四年には『武藏野』を出版するに至つてゐるが、子規の自然讚美にも確にさういふものと共通する精神をもちながらも、蘆花も獨歩もなほ社會情勢に慨する一抹の正義觀を藏してゐたに反し、(註16) 子規の現實への反抗は多く自己を中心としたもので、この點から見ても子規の現實認識が、他の文學者に比して優れてゐたと見ること

は出来ないし、従つてそこから出發したその藝術が、藝術のためのそれに終つたことも當然でなければならなかつた。

註1 「筆まかせ」中の「當惜分陰」

2 同「小説の嗜好」

3 「天王寺畔の蝸牛廬」

4 「筆まかせ」「小説の嗜好」

5 「文界八つあたり」(二十六年)

6 同上

7 同上

8 『松蘿玉液』(二十九年)

9 「天王寺畔の蝸牛廬」

10 篠田太郎氏『史的唯物論より觀たる近代日本文學史』

11 同上

12 「文學漫言」(二十七年)

第一章 子規の文學

- 13 「棒三昧」(二十八年)
 14 「文學漫言」
 15 「人々に答ふ」
 16 例へば「自然と人生」中の「海運橋」「國家と個人」、獨歩の『竹の木戸』等

二、文學觀

子規の文學の位置及其理論の矛盾等については前述べたところであるが、我々はさらに前説を補ひつゝ彼の文學觀、殊に俳句・短歌の如き形式の文學に就て、彼が内容と形式の相關性をどう考へてゐたかをいさゝか検討して見たいと思ふ。

彼の著作の中で内容と形式の問題を比較的詳しく論じてゐるのは二十七年の「文學漫言」であつて、其他には論文や書簡の中に少しづつそれに觸れてゐるものがある。先づ「文學漫言」から見て行かう。

——韻文と散文とを問はず便宜のため之を分析して二元素と爲すを得。一は意匠(心)にして一は言語(姿)なり。意匠は人事を叙するあり、天然を叙するあり。其叙すべき人事にも種類あ

り、離別哀傷戀愛祝賀等の如し。天然にも亦種類あり、山水花卉鳥獸天象等の如し。又離別を叙するにも直ちに胸中を據て詩となすあり、景色を假り來りて歌となすあり。或は酒を酌んで別を悲み、或は劍を贈つて別を壯にし、或は楊柳を假りて却て離憂の綿々を叙し、或は白雲を望んで乃ち明朝別後の情を想ふ。山水を咏するも亦然り。或は群嶽巍峨怒濤澎湃の狀を寫し、或は丘山清秀澹漪細々の景を寫し、或は白雲湧き大木聳ゆる處を叙して善く深山の趣を現はし、或は水草花を開き小魚列を爲す處を叙して善く野外古池の趣を現はす。是れ意匠なり。

これによると、こゝに彼が意匠といふことは文學の内容の意味であることは明らかであるが、肝心なことはこゝで彼が文學の内容が思想である事をはつきりさせてゐないことである。例へば人事における離愁哀傷戀愛祝賀、天然における山水花卉鳥獸天象等は素材であつて思想ではない。巍峨たる群嶽澎湃たる怒濤、清秀なる丘山や細々たる澹漪、白雲生ずる深山、小魚列をなす野外の古池、みなさうである。しかるに彼はこれらを並べた末「是れ意匠なり」と云つてゐるのである。また「胸中を據て詩となすあり、景色を假り來りて歌をなす」もの、或は「酒を酌んで別を悲み、或は劍を贈つて別を壯に」するもの、「楊柳を假りて却て離憂の綿々を叙」したり「白雲を望んで乃ち明朝別後の情を想」ふことは、感情であつてその背後にあるもの、即ち「酒を酌んで

別を悲し」ませ、或は「離憂の綿々たるを叙」せしめるものこそ思想に外ならない。別を壯にするために贈る劍、それは壯士刺客に行くそれか、或は戦士國のために敵を征すそれか、それをとりに上げる作者の思想こそその取材を左右するであらう。彼は文學の内容を意匠とまでは解したが、その意匠を駆使するものが思想であることは最後まで解しなかつたらしい。三十一年の「寫生・寫實」で彼は繪畫の寫生を論じてゐるが、それにおいても足利時代の墨畫を形似的な立場からのみ観て、それが禪の影響をうけてゐることを完全に見落してゐる如き、彼の晩年の到達點を指示してゐるものであるが、依然として隔靴搔痒の感を禁じ得ないものがある。

意匠といふ言葉を彼は時には趣向といふ語に換へ、或は併せ用ゐてゐる箇所もある。趣向なる言葉はすでに早く「筆まかせ」の中の小説批評の中に現はれてゐるが、意匠なる言葉の初めて見えてゐるのは『獺祭書屋俳話』であらう。この言葉は「文學漫言」などに用ゐてゐるところを見ても同義語であることは明らかであるが、「文界八つあたり」などでは主として一般文學の構想を指してゐるもの、如く、「紅葉山人の妖艶纖麗なる趣向」「小説の趣向は猥褻」或は「新趣向の謡曲」などと用ゐてゐる。これが二十六年の「歳旦閑話」翌二十七年の「文學漫言」には、同じく意匠と趣向を混用しつゝ、俳句にまで用ゐるやうになつてゐる。さらに二十九年の「文學」では、やは

り意匠と趣向を混用してゐるが、それと共にこゝではじめて配合といふ言葉を使用してゐる。配合とは文の構成のことで、俳句・短歌に在つては趣味的に二つ乃至三つのものを調和的に取り合せることであるが、これについては詳細にする必要上後に述べよう。

然し子規が全然文學の内容が思想であることについて無頓着であつたのではなく、或る場合それに近づいて考へてゐることもある。例へば「文學」に於て漢詩家の漢詩制作の少きを慨し、「漢詩家は無精なるかはた思想に置しきか、吾は思想に置しきに非ずして無精なるものと信ず——」として「思想」なる言葉を用ゐてゐるが、こゝでも彼は根本の個人の「思想」にも漢詩家特有の思想にも考へ及ぼさず、「思想」なる言葉を、常に俳人・歌人が用ゐてゐるところの構想の意味にしか考へてゐない。この思想的な理解の不足はずつと後年の歌論にも及んでゐて、こゝでは「歌想」なる言葉を用ゐてゐる。

歌想到主観的なるものと客観的なるものとあり——主観的歌想の中にて理窟めきたるは其品卑しく趣味薄くして取るに足らず。古今以後の歌には理窟めきたるが多けれど萬葉集曙覽集には無し。理窟ならぬ主観的歌想は多く實地より出でたるものにして、古人も今人もさまで感情の變るべきにあらぬに、況して短歌の如く短くして、複雑なる主観的歌想を現はす能はず只々

簡單なる想をのみ主とする者は、觀察の精細ならざりし古代も觀察の精細に赴きし後世も差異甚だ少きが如し(註1)——
或は

客觀的歌想に至りては曙覽稍々(「萬葉集より」進めり(註2))

誰にでもすぐわかるやうに、こゝでも彼は歌想を思想と解してゐるのでなく、在來の構想——趣向・意匠——としか考へてゐないのである。それは例へば曙覽の歌を論じて

題しらす

雲ならで通はぬ峰の石陰に神世のにほひ吐く草の花

について、「神代のにほひ咲く草の花」といへる歌は彼の神明的理想を現はしたるものにて、此種
の思想が日本の歌人に乏しかりしは論を俟たず(註3)など云つてゐるが、こゝではわづかにそ
の本質的なものに觸れてゐるやうであるがやはり意識的ではなく、其後の

書中乾胡蝶

からになる蝶には大和魂をまねきよすべきすべもあらじかし

についても、此歌のもつ思想的な背景を觀ようとはせず、單に叙法のみについて「字餘りの處萬

葉を學びたれど勢拔けて一首を結ぶに力弱し。萬葉の「うれむそこれかよみかへらまし」などい
へるに比すれば句勢に霄壤の差云々と云つて片づけてゐる。また人麿の

ものゝふの八十氏川の網代木にいざよふ波のゆくへ知らずも

の歌を「全體の上より見れば上三句は贅物に屬し」てゐると云つてゐるのはよいとしても、この
歌のもつ思想的背景、即ち「人の世の生住異滅の四相の中に暫く住するよと思ふに、程なく異相
に遷されて行くを水の網代木にふれて暫くやすらふと見ゆるが、やがて流過ぐるに感じてよまれ
たり(註4)」といふ佛教思想が根柢になつてゐることを彼は見落してゐる。

かゝる上ツ面なものゝ觀方は文學の本質的な理解に資するところないばかりでなく、反對に故
人の作品を自分勝手に歪曲してしまふ危険がある。彼が芭蕉の作品の背景が禪の思想によつて貫
かれてゐるのを見ることが出來ず、古池の句についても其句のもつ唯美的な方面からのみ評價せ
んとし、「雀はちうく鴉はかあく柳は緑花は紅」のありのままが句になつたのだらうと考へて
ゐる如き、彼の芭蕉への理解の程度が窺はれる。これに反して彼の後に出た碧梧桐が新傾向の提
唱に方つて、芭蕉の「ありのまゝ」を老莊思想に想化された「ありのまゝ」だと正しくも指摘し
てゐることは、その觀方に格段の差異のあることを我々は認めなければならぬ。もとより我々

は文學觀の歴史的発展を無視して論じようとするのではなく、子規の到達した史觀、碧梧桐の到達した史觀、及び現在我々の到達した史觀にはそれ／＼段階があり、この事は人間の思惟が歴史的な産物であることを示すものであるが、子規を絶対視してその達した段階から一步も踏み出すことを知らぬ人々のある今日、特に彼の藝術に對する理解の不足を指摘せねばならないのである。

彼の文章上における批評は可なり科學的なものがあり、たとへば「松蘿玉液」に於て近松の曾根崎心中の道行文を評して、此世の名残、夜も名残、——空も名残とて名残を三度用ゐたる、鐘といふ字を下に用ゐようとして七ツの時が六ツ鳴りて云々と云ひたるは窮したる言ひさまであり、鐘ばかりか草も木もといふところは十五六の少年に七五文を書かしたやう、世と夜と鐘と草と木と空と六箇のものを並べ立てた其布置配合が少しも整つてゐないし、心中の時に鐘を數へる必要が假令あつても、七つと知つてゐる鐘を六つまで數へるなどはまるでまゝ事の心中であり、大體に於て阿房陀羅調だと鋭く斷じてゐる。こゝでは彼の文章觀が遺憾なく窺はれるのであるが、肝心なことは彼がその缺陷を、庶民的な内容と七五調といふ古典形式との矛盾によるものとして理解してゐないことで、これは彼が近代文學の散文化に對して理解を缺き、韻文にのみ執着しよ

うとするところから發してゐるものである。

彼は藝術における内容と形式を常に内容第一に考へてをり、表現よりも意匠・趣向の大切なことをしば／＼述べてゐる。

意匠と言語とは車の兩輪、鳥の兩翼の如く偏廢偏立すべきものに非ずと雖も、余は寧ろ重きを意匠に置かんとす——現今我邦の文學美術の有様を見るに本邦固有の文學者美術家は方法のみ研究して意匠を事とせざるに因て、縱横自在の筆力有りながら却て様に依て胡蘆を畫くの愚を爲し、西洋崇拜の文學者美術家は意匠の新工夫にのみ走りて其方法の練習を疎かにするを以て、假令幾何の美術心ありとも終に虎を畫いて成らず却て犬に類するの誹を受く。然れども余は全體に於て美術心の缺乏を感じることも多きを以て、少くとも此點に於て特に意匠の發達を促さざるべからざるを見るなり(註5)

彼のこの言葉は誤りとは思はれない。新しく起つた階級の藝術は常に内容主義であり、それに反して爛熟期に達した階級のそれは形式主義に傾く。そのため明治の文學は極めて不満足にはあつても内容第一主義を以て進んで來たのであるが、彼の言葉には、それが術語の相違から來る不明確な點はあつても、正しくこの事を指摘してゐるのである。この趣向を第一に、表現を第二

能する主張は晩年に至るも捨てず、三十一年四月三日附鷗南宛の書簡でも「趣向不可 言葉可よりは、趣向可 言葉不可の方を取りたく存候趣向が面白ければいひ様がまづくともいくら面白く感じ申候」と云つてゐる。けれども前に見たやうに、彼は内容を思想と解せずして、趣向と解してゐるのみならず、形式は俳句に於ても短歌に於ても、字餘り等の例外は多少認めてはゐるものゝ、大體に舊形式を追はうとする者なのである。そのためその主張は如何様にもあれ言葉では何ともいへ、古典尊重の態度以外の何でもないことになる。例へば彼の推稱する萬葉集にしても、それから種々多様な思想を抽出し去つたなら、表現の素朴さ、莊重さ、素材の自由さ位より外に特色は認められないではないか。かくて彼はその自らつくり上げた形式主義の萬葉の影像に打ち込んでしまふたのであつた。

元來彼の文學は、その少年時における民権演説と同じく自由主義から出發してゐる。五七五或は五七五七七を認めてゐるが、それは絶対的なものではなく、字餘りにしても差支へないと云つてゐる。

俳句の定義如何と問はゞ、俳句は文學の一種なりといふことの他に、他の文學と區別すべき特色は、五七五的の調子に在りと答へざるべからず。五七五的の調子は實に俳句の最大要素なり。

然れども七五七とは其最も普通なる調子をいふものにして、俳句は此調にのみ限られたるにはあらず。之を古句に求むるも十六字句あり、十八字句乃至二十五字句あり、十七字句にても七五五又は其他の異調あり。十八字句は十七字句に續いて最も多し。何時の代の俳家も多少之を作りたり(註6)――

即ち彼の謂ふ所は十八字乃至二十五字のものも古句に其例があるから認めようといふ態度で、これを讀むものは誰でもその自由要求の態度の極めて謙遜なのを思はないものはないであらう。

この時代には碧梧桐・虚子が盛んに破調の句を作つたが、例へば

夏木立 深うして 見ゆる 天王寺 碧梧桐

大なる 鍋の 底に 河豚を煮つゝあり 虚子

の如き句に對して「深くといふよりも深うしてといふ方、木立が一層深く見ゆることにして、此場合には一層深く見ゆる方、趣味多し」(註7)といひ、虚子の句も大鍋といはずして大なる鍋と云つたところに、印象を明らかにすることができると云つてゐる。だが彼はその破調に對しては好意をもたず、「二十九年の俳句界」では二人が破調の句を作つて五七五を破壊したが、それは破壊したゞけで何も建設しなかつたといひ、「既に散文的ならんとして猶二十三四字の内に局束せら

るゝは全く韻文を離るゝ能はざるなり。散文たるを得ず韻文たるを得ず是れ何者をも創立せざるに非ずや。吾人の臆測を以てすれば所謂新調なる者は一時の現象に過ぎずして永く繁榮することなかるべし。唯俳句の一變體として存在すべきのみ」といひ、『新俳句』編纂に際して三川に書を送り、自己の變調の句を削り去ることを依頼したりしたのも、彼の定型的ならんとする意圖を明瞭にしてゐるが、更に三十二年の「俳句新派の傾向」では「俳句の形式は十七八字を限りとして定められたる者、更に之を擴張すべきにあらず——」といふやうになつてゐるが、それ以前二十九年の「俳句問答」でも「子は寢入り螢は草に放ちけり」を文法上「草に放つべう」と改めたが、後に考へて「べう」も省いて「子は寢入り螢は草に放つ」で可なりといひ「此句法を失はぬやう延べて十七字となさば完全の句となるべし」といつてゐるが、これは彼が形式主義に陥り、十七字を格守せんとした意圖をもつてゐたと見ることが出来る。

蓋しこれは無理もないことで、明治の詩の最もラディカルな新體詩運動でさへ、詩形を長くはしたが、五七とか七五とかの調子を撥無することが出来なかつた。一切の調子的なものを止揚することが出来たのは、すつと後の自然主義時代に於てであり、況んや保守的要素を濃厚に持してゐた子規が、かゝる態度に出たとて決して怪しむに足りない。

彼は文學は思想の表現であり、そこに現はされたものは單なる素材でも趣向でも意匠でもなく、其作者によつて想化された素材なり趣向なり意匠なりであつたことを最後まで知らなかつた。と同時に自己の作品にも何等思想表現に拘はらない素材・意匠・趣向を以て、「おもしろく」「趣味的・風流的」に云ひ現はすといふ方に傾いてゐた。けれども彼も彼の門下も、まさしく新時代の複雑な感覺をもつたインテリゲンツトであつたため、たとへ趣味的・風流的な文字を連らねるのであつても、子供が片言で話すやうな俳句の表現では満足できなかつたことはいふまでもなく、表現の自由を求める心が暗黙の裡に徐々に成長しつゝあつた。そしてそれは子規が二十九年ごろより病氣で寢込むやうになつてから、俳句の行詰りを來して短歌のやゝ自由なるに赴き、さらにそれにも當然の事として行詰りに達すると共に、子規及其一門も田舎士族的な生活から都市小市民的な生活に遷りつゝあつた結果として、俳句・短歌的な靜的表現に満足せず、もつと人事的動的な表現のものを欲した。それが子規の晩年に初まつてゐる寫生文なるものであつたのだ。寫生文については後項に述べるからこゝには略すが、その表現の自由の要求が謙虚な遠慮がちのものであり、結局において自由形式のものに移りつゝも彼らは一樣にそれへの見透しを缺き、作品の方に引ずられつゝ推移してゐるところにその保守性が窺はれると思ふ。

註1 「曙覽の歌」

- 2 同上
- 3 同上
- 4 萬葉集代匠記
- 5 「文學漫言」
- 6 「二十九年の俳句界」
- 7 同上

三、自然觀

子規の全文學には彼の自然讚美の精神が磅礴してゐる。俳句から短歌・新體詩・小説においてもその精神は蔽ふべからざるものゝやうに働いてゐる。寫生文に至つて、彼の生活様式が漸く都市的に染つてくるにつれて、やゝ人事的に傾いてゐることが看取されるが、それでもその人事がやはり自然觀による季節等を樞軸として動いてゐることを見落すことができぬ。明治の文學で自然讚美に傾いてゐるものは蘆花・獨歩等の他、その數尠しとしないが、子規の場合のやうに終始

一貫自然讚美の觀念に満たされてゐるものは珍らしい。斯くまで子規を捉へて離さなかつた自然とは抑も何であらうか、子規の自然讚美の精神は何に因つてゐるか、また如何なるものであるかを此項で聊か考察して見ようと思ふのである。

邦人の自然讚美の觀念について今までの解釋は、我が國土の季節的變化の多いことであつた。この解釋を我々は誤りとは思はないが、然しそれは決して我が國のみに見られるものではなく、何處の國にもあるものだ。もと邦人の自然讚美はその源を支那の老子の思想に發したもので、すでに陶淵明とか謝靈運とかいふ人の文學に表現せられてゐるが、莊子に至つて仙道の思想となつて世俗化され、且つ佛教の思想と對抗するためその教義をとり入れ、仙郷禮讚・山林崇拜の觀念は、現實生活において志を得ない程のものに格好の逃避所を與へ、それ以後の文學の思想に重要な影響を及ぼした。殊に注意せねばならないのは、それが世態の動搖烈しき時に生じ、橋本循氏が『立命館文學』で指摘せられたやうに外的には國家の興亡や、動亂の際における民生の慘狀を見、或は君主・當路に忌諱せられ、内的にはその個人の社會的位置（多く中間的インテリゲンツトであつた）や教養、名利の巷にその喧囂なるに堪へなかつた等の原因によつて世俗を離脱し、山林に悠悠自適することを尊ぶに至つたことだ。即ち出でては吏となり、去つては仙郷の人となることは

支那のインテリゲンツの理想であるが、それが我が國に輸入されて、折から生じつゝあつた武士階級の思想に影響を與へた。

かゝる隱遁的自然讚美の思想がいつ我が國に輸入せられたか明らかでないが、日支の交通は崇神天皇時代に初まつてゐると云はれ、既に萬葉の末期には「懷風藻」などの漢詩集がある位であるから、此時代以前に輸入せられたものと思ふが、しかし當時まだその思想の成育すべき温床が與へられてゐなかつた。それに温床を與へたのは、鎌倉時代における武家階級の支配權確立と、禪が武家階級の思想に結ばれたことであつて、武士階級は其本分として常に死生の巷に出入せねばならず、従つて死を見ること歸するが如くであらねばならないが、その武士階級の勃興が死生一如と觀する禪の温床となつたものであつた。そのため當時の支配者は禪を御用宗教となし、その普及を計つたのであるが、元來禪は印度の佛教が支那に入つて道家の説をとり入れて成つたものと云はれ、山林讚美に傾いてゐるが、一切の先入的なものを排し、主客一如の心境をもつて自然に對するもので、それは室町時代の畫僧雪舟が明に入り、「大明國裏師とすべきなし、唯名勝の地のみ我師なり」と云つたことなどに其態度が窺はれるが、それが更に茶道・香道・挿花などの興隆を促した。

禪的に自然を直觀せんとする努力は、芭蕉の作品に最も顯著なものを與へてゐるやうである。芭蕉が西行を崇拜してゐたことは人の知る處であるが、西行は一木一草を詠むるにも、それを宗教的に見ないわけに行かなかつたに對し、芭蕉は西行を慕ひつゝも、自然に對してはヨリ直觀を尙び、人を自然の一部と解してゐた。これはもちろん芭蕉が武士階級の出身であり、主家亡命後も禪の修行をしたりしたその教養に基づくものであらう。

然し一度資本主義の波濤に洗はれ、泰西自然科学の息吹をかけられた邦人の自然觀は、また必然的に封建時代のそれとは異つたものにならねばならなかつた。消極的な諦觀に立つ老莊思想や佛教の厭世思想を排して積極的なものたらしめねば止まなかつた。封建時代に於ては、自然は封建諸侯の存立的基础であり、それが傳統的な思想に支配されつゝ永遠不變の神聖犯すべからざるものと觀られてゐたに反し、資本主義時代はまづこれを生産の對象として、可變性をもつ一物質として觀る傾向を生じたのであるが、その自然破壊の過程において、反動的に自然を愛惜する觀念を生じ、それが蘆花や獨歩などの自然讚美的なものを生ぜしめたものと考へられるが、これらに影響を與へたウォーズワースも英國の産業革命の進行過程に生じたものであり、且つ最も早く資本主義制の樹立された英國に最も多く自然讚美の觀念を生じ、又はその自然讚美家の一人ジ

ヨン・ラバツクが「大都會は殺風景で、悒鬱で、醜怪だ。郊外は工場に次第に侵略されて——樹のあつた所に煙突が立つ。自然美は殆んど根こそぎ壊されてゆく」(註1)など述べてゐるのは、さういふ心理を明らかにしてあますところはない。むろん彼らの思想が當時起つた進化論の影響をうけて科學的であり、我が國のはそれらより浪漫的・逃避的であることは、老莊的思想に根をもつものであるからである。むろんそれは個々人の前時代的なものゝ止揚の程度によつて、いろいろの様相を呈したが、それはいふまでもなく外的には維新後の資本主義精神の發展の如何と、內的には個々人の感受性のプラス・マイナスにかゝつてゐるものでなければならぬ。

子規の自然讚美が何によつて形成されたかを見る上に、左の言葉は看過されないものゝ一であらう

「——幼時より客觀美に感じ易かりし吾は我が家の長物(かるたを除く外)一として美とすべき者なきを見て心に樂しまず、如何にして吾は斯る貧しき家に生れけんと思ふに、常に他人の身の上の妬ましく感ぜられぬ。ひとり造化は富める者に私せず、我が家をめぐる百歩ばかりの庭園は雜草雜木四時芳芬を吐いて不幸なる貧兒を憂鬱より救はんとす(註2)——

——余は子供の時から自然界の現象がひどく好きであつた。何も人間を全く嫌ふた譯では無い

けれど人間には氣に喰はぬ人間が多いから、それよりは自然界の美麗で従順で少しも我意に逆らはなんだのが氣に入つたのでもあらう——漸く年とつて一人前の男になる頃、誰でも俗世間に向つて求むる所があるのだが、余は俗世間に向つて求めたところが己の性情を満たす事が出来ないから、矢張自然界に向つて求めようとする(註3)(傍點筆者)

これは子規の自然讚美が何に因つて起つたかといふことばかりでなく、この時代のインテリゲンツトの自然讚美的精神の解明にも役立つものである。即ち人生に求めて得ざるところを自然に求め、或は漸く生じつゝあつた貧富の懸隔と、それに基づく貧者の富者への隷屬と卑屈な諂諛、轉換期にあり勝な日まぐるしい浮沈興廢の世相が基礎となつてゐることはいふまでもなく、その變換きはまりなき人生流轉の相を見るにつけ、自然の永遠の相に眼を移さなければならなくなつたもので、これは同時代の自然讚美主義者に共通して見られる心理的現象であることは、蘆花・獨歩其他の態度によつて類推することが出来るが、同時に子規に在つてはその自然愛好の觀念が、一般の歐化主義に反撥する反動的な精神も與つてゐることを我々は見落し得ない。即ち彼は

——僅かに英字を解する者、翻譯書を読み得る者乃ち曰ふ、人間を説くは人間最上の美術なり、人間を説く者ドラマに如くはなし、故にドラマは人間最上の美術なりと——焉んぞ知らん人間

は宇宙の一部分にして、所謂自然界は渺々漠々人間の四邊に際限も無く廣がり居るを。人間界は善惡混淆眞偽錯出して榮枯盛衰は朝、夕を計らず、一生一死は百年の瞬間を保つ能はざるに、獨り自然界は一定の時間に一定の變遷を経、江上の清風と山間の名月とは千古依然として取れども盡くるなきに非ずや(註4)——

と云つてゐるのが、それを立證してあまりがあるし、人間を宇宙の一部分とし、自然の前に全く無力な宿命的な存在として見てゐることがわかる。彼が後に「戯曲類と四季」を書いて「適用し得るだけ四季の景物行事を適用し、觀客をして惘然身其境に在る如く感ぜしむ」れば効頗る大であらうなど説いてゐるのは、彼の自然に執着をもつ性格のあらはれであらうし、また「余は幼き時より畫を好みしかど、人物畫よりも寧ろ花鳥を好み——お姫様一人畫きたるよりは椿一輪畫きたるかた興深く、張飛の蛇矛を携へたらんよりは柳に鶯のとまりたらんかた快く感ぜらる」(註5)といふやうになつたものと思はれる。だから彼の寫生も畢竟するに明治文學一般に見られるリアリズムの精神に刺戟されたものであるが、そのリアリズムは彼に在つては技術にとゞまり、自然をありのままに描寫するといふことに局限されて理解され、それを社會・人生に適用することは全然考へてゐなかつたと云つていい。それが社會が彼に與へることが少ければ少いほど、彼は自然

を嚴正に見るといふ科學的な態度を捨て、その懷ろに遁れる者となるは明らかである。晩年の唯美主義の基礎はそこに在る。

何か宗教的な先在觀念がある場合、人は自然を觀るにもそれを宗教的に觀なければならなくなる。例へば西行の歌を読んでその佛教思想を感得せず、蘆花の『自然と人生』を読んで基督教的思想の磅礴せるを氣づかないものはないであらう。然し子規に在つてはさういふ先在觀念がなく、従つて自然をたゞ美なるものとしてのみ見ようとしてゐた。彼が唯物的な考へ方をしてゐたことは二十八年の「養痾雜記」に「人間は宇宙間に或る一種の調和を得て生り出でたる若干元素のかたまりなり。元は同じ酸素炭素等なれども、生り出でし時の情況に因りて權兵衛ともなれば太閤様ともなり、乞食ともなれば大將ともなる——」などあるので明らかだが、この言葉はもと佛教から出たものだが、彼の翻譯語は明らかに唯物的になつてゐる。そこに彼の態度が明らかにされるが、晩年病床に呻吟するやうになつても宗教に縋らなかつた如きも、彼のさうした態度を知ることができると思ふ。然し晩年は宗教的ではなく、何か自然に意志あるものゝ如く感じ

——こちらから情を以て向ふと、今迄は無心のやうであつた自然界が俄に活動しはじめて、總ての物が情を以て周圍から余に話しかける、即ち總ての物に靈があつて、それが皆自分一人に

向つて来る、即ち余が中心に立つて居て周圍を支配して居るやうに思ふ(註6)と觀るやうになつてゐるが、それでもなほその中に「宗教でいふ上帝見たやうな絶對な者ではない。寧ろ其精靈は余を待つて存し、余は其精靈を待つて存する性質の者」(註7)と考へてゐるところが、一般宗教的な自然觀と異るところである。木村毅氏の所謂「精刻に^ままに自然を寫して見せた」(註8)態度であつた。

子規の自然讚美思想の因つて起るところは以上述べた通りである。しかしそれでもなほ二十四五年ごろまでは人間をも描かうとしてゐたらしい。彼は「月の都」で人間を描いてゐるが、それを以て文壇に乗出す希望は脆くも挫折しなければなくなり、負けることの嫌ひな彼は反動的に「人間より花鳥風月がすき」だと云つて人間に背を向けるやうになつた。然し「小説家たらんを欲せず詩人たらんことを欲す」といふ言葉の、詩人なるものが俳句・短歌にとゞまるものならば人間に觸れないでもよかつたかも知れない。けれども彼の周圍にはもはや封建時代の自然はなく、資本主義的な自然となつてをり、従つて彼の生活様式も芭蕉のやうな漂泊生活にすることは出来ず、この點から彼は俳句・短歌に行詰りを生じて寫生文に赴き、そこで幾分人間に觸れなければならぬやうになつたものと私は考へる。だから子規の初期の寫生文(と云つていけなければ

小品文)の「小園の記」等にはまだ自然讚美精神の磅礴してゐることを見るが、後のものには次第に人間に近づかうとしてゐることを我々は見るのだ。と同時に人間に近づきながらもそれを見るのに趣味的・傍觀的に、人生のために見るのではなく、寫生文のために見るといふやうな態度になつてゐることは注目すべきである。これは子規の全文學が人生主義的なものから唯美主義的なものへ突き進んだ過程を證するものに他ならない。

要するに子規の自然觀は、彼が現實に於て與へられなかつたものを自然に求めるといふ處に生じたもので、彼はこゝで「俗世間」なる言葉を侮蔑的に投げつけてゐるが、そこには芭蕉が世俗的なものと風流とを對置したやうなものが見られ、その「俗世間」こそ官僚とブルジョアジーとの結托によつて、漸く大ならんとしつゝあつた魔物に外ならぬ。しかも彼はその魔物の正體を見きはめんとせず、それによつて失はれたものを自然の懷に得ようとしたもので、全く敗北者のな詠歎的な境地であつて、それは實に封建的な自然讚美が資本主義の創痕に癒着したものと見る事が出来るものだ。

もつとも以上の自然讚美の觀念は子規にのみ見る心理現象ではなく、明治の文學の全部に亘つて見られるものであることは先に述べたが、注意すべきはそれらが殆んど敗北者のな心境に生じ

たものであることだ。例へば前に述べた獨歩にしても蘆花にしても、もし時代が基督教文學を發達せしめることが出来たなら、もつと進取的な方面に進んだらう。しかし先覺者の間にこそ基督教の教への資本主義に寄與することが考へられたに拘らず、徳川時代の禁壓の餘勢と民衆の無智とがそれを發達せしめず、憲法發布によつて信教の自由が認められてもなほ民間では其情勢が續いた。そのため獨歩にしても蘆花にしても纔に自然の美を見てそれを神の啓示と見て詠歎する以上は何も出来なかつたのである。「山林に自由存す」といふ言葉には、その經緯が明らかにされ、明治文學全部を通じて特筆するに足るべき基督教文學のなかつたこともそれを示してゐる。むしろ「子規の場合」はそれらと稍趣を異にし、やゝ歐化主義への反動的要素をもつてゐたことも彼の言葉によつて認められるが、共に積極性を失つた詠歎的境地であることは揆を一にする。斯く觀來れば彼が後に唯美主義の泥沼へ、「モルヒネを飲んで」草花を寫生する其境地への第一歩は實に最初の自然讚美の裡に在つたものと思はれる。

この自然觀は彼の俳句における季節觀にも影響を及ぼしてゐる。然しそれは後に俳句の項において述べるのが適當のやうであるから後に譲ることにするが、この自然觀が季節觀の基底になつてゐることは注意されなければならない。

註1 『自然美と其の驚異』序論（岩波文庫本二二―二三頁）

2 「吾幼時の美感」

3 「赤」

4 「春色秋光」

5 『病床六尺』

6 「赤」

7 同上

8 同氏「明治文學に現はれたる自然美」（『明治文學展望』所收）

第二章 俳句における子規の革新

一、子規出現以前の俳壇

子規が俳壇に名乗りをあけて日本新聞を唯一の足溜りとし、雄々しき闘争を開始したのは二十六年以後と思はれるが、その役割は封建制の下にその社会的な一の現はれとして、壓縮される小市民の安易な逃避所として存在した月並宗匠俳句を打破し、新しき時代に適應する唯美的な俳句を建設するに在つた。彼によつて打破せられた月並俳句・宗匠とは抑も何であるか、本項ではそれを解明すると共に宗匠等の動靜を記し、子規が何を打破せんとし、また何を建設せんとしたかを明らかにしようと思ふ。

今日までに月並俳句は俳壇でいろ／＼考究せられてゐるが、肝心なことはそれを封建制との聯關に於て考へることが出来なかつたために、月並俳句の内容・叙法の研究のみに終つてゐる状態である。いふまでもなく月並とは子規の命名するところで、本來の意味は彼らが月次に俳句の運座を催してゐたからの稱であるが、月並俳句なるものは封建制が生んだ畸形兒であつて、それは

叙法のみにとゞまらず、その精神において、その態度において封建的な特色を濃厚に有するものである。先づ第一に封建的と思はれるのはその宗匠の門閥主義で、人物の如何にかゝらず雪中庵とか其角堂とかを繼いだ人を尊崇するのであるが、これはいふまでもなく封建制下における身分制度と家柄主義を反映してゐるものである。もちろん徳川中期以後貨幣經濟への轉換が著しくなつて來るにつれ、俳壇は一部分富裕な人々の手に移つた。幕末の俳人成美が何等の俳閥によらずして覇を唱へ得た如きがさういふ關係を示してゐるが、維新後は一時社會的動亂の後を承けてどさくさまぎれに嗣號尊重も亂れたかの觀があつたが、新たな社會にその存在を認識された有産階級にして嗣號を買つて俳壇に乗り出すものなどもあり、銀行支店長たる雀志が梅年の高弟碧海を追ひのけて雪中庵を嗣いだ如きはさういふ一の現はれにすぎなかつた。

次に宗匠らの獨裁主義も封建的なものゝ一反映であつて、運座の選句も宗匠は別室で一人でこれをなし、人々に覬覦せしめないが、これは封建治下における獨裁主義を反映してゐるものだ。けれどもこれも一部分企業化し資本主義化してゐるところもあつて、それは封建制下の人格隷従、即ち師弟關係の重視はこゝでも見られるが、點料といふものゝ性質上、弟子ばかりの句を見てゐては生活ができないので、句は一般大衆から募集し、従つて其經濟的支持は大衆が與へてゐるの

であり、従つてこれのみは大衆の好みを反映せずにはゐないといふことになつてゐる。以上はその組織の方面であるが、月並の精神即ち其内容は矢張斯ういふ關係を反映し、多くそれに携はる人々が小市民であつた關係から、萎縮した感情を表現し、その社會的な現實には無關心な逃避的態度を示しながらも道歌的に大衆を教化せんとする意圖を露骨にしてゐるのである。その表現において理智的に傾き、膚淺な人生觀や道義觀を露はにしてゐるのも、封建文學が勸懲主義に傾いてゐることゝ一般で、さういふ内容に適應した表現を求めてゐるものに外ならない。

ではさういふ社會的・經濟的な關係が、どのやうに彼らの言に現はれたか？ 先づ内容におけるその一つに道義的觀念をもち、又は教訓的なことを述べ或は膚淺な人生觀を盛つたものがある。これは月並俳句の神髓ともいふべきものである。例へば明治初期の月並俳句の雑誌『明倫雜誌』創刊號で彼らは左のやうに自分等の立場を説明してゐる。即ち大梅居澄江は創刊の祝辭に、自分等の俳諧（明倫雜誌は後に述べるやうに、時の政府の試験にパスした三森幹雄が民衆教化のために發行したものである。）は今までのものとは異り、正風俳諧の本源を辨ずるものであり、「其極る處は——此道を盛にし人を和して勸懲を行」ふことに在るといひ、素學堂菊之も同號で「俳諧の道は萬物の情を識り交際を厚うして天理に背かざるを要し諸子をして不知不識敬神の意を起さし

むるの大道」だと云つてゐるが、そのため古句を解釋するに當つても、それを道歌的に牽強附會な解釋をせねばならなかつた。例へばこれも同誌第二篇に芭蕉の「春立ちてまだ九日の野山かな」を解説して「此發句は天理の怠りなきと人の油斷とを掛合せて天理を尊み人を憐みたる句なり」といふ如き、「しばらくは花の上なる月夜かな」についても「暫時といふ言葉より感を起せば世の中の人多くは榮辱の間に心を置習ひなれど暫時にして月は傾き花は散必榮えも頼みにならぬ者じやと云發句なり」といへる如きがそれである。隨つて芭蕉の「道のべの木槿は馬に喰はれけり」といふやうな句を重んじたことはいふまでもなく、また後に子規がこれらの理智的道義的な句を排撃したのが、封建的なものへの反撃であつたことがわかる。此種の句を彼らのものに求めると

油斷して葉にかくされな遅櫻	雪	潮
浮草や油斷の見えぬ根の配り	月	窓
手折るなよ野に置けばこそ女郎花	金	羅
水車 同じこととして年くれぬ	梅	室
青梅や井戸に蓋する親ごころ	和	岳
余所（の力）子も入れて寐せたる巨燧かな	古	世喜

少し蛇足を加へれば、前二句は油断なく勤勉せよといふことを、次は野のものは野におけといふ心を、「水車」は人事の忙しさを、「青梅」の句は親ごころの有難いことを、「巨燵」の句は我が子人の子に隔てをもうけるなといふ教訓を十七字にしたものにすぎない。(なほ子規の理窟の句排撃は後述する)。

次に譬喩の句や風雅といふことをわざと仄めかしたのも月並俳句の一特徴である。これは俗にいふ厭味をもつ句となつて現はれてゐるが、宗匠等の態度によるもので、北村透谷は曾て老鼠堂永機と地を接して住んでゐた。永機の家は華美といふ程でもなくとも萬づに數寄を凝した住居であつたが、彼は頻りに其狭陋を呟いてゐたので透谷をして「今の世の俳諧士は憐むべきものなるかな」の嘆聲を發せしめた。これを見てもわかるやうに、彼らは物を表から云はずに裏から云はうとする。即ち永機の場合でも、彼は自宅の自慢をするのであるが、それを反對に狭くて汚いと云ふので、斯の如く正面からものを云はない習癖は封建政治と社會に馴致されたものである。これらの態度が厭味を伴ふもので、それとはやゝ違ふが、すべての世事を俗となし、清貧を衒ひ、世事に携はるものを嘲笑して風流なるものを人に示さんとして衒ふこともその一特徴をなすものであつて、既に凄まじく資本制への轉換、社會の新編成をなしつゝあつた明治初年に、社會教化

の一役を買つて出た彼らにしてなほ此の一傾向を有するのは矛盾であるが、彼らは矛盾を矛盾として見ることも出来なかつたのであらう。貧乏の禮讃も封建時代の一遺物にすぎない。

花盛り世にかくれ住む里もなし 機 一
 不自由はつねと覺て冬ごもり 正 哉
 夜は蚊屋の浮世に寝たり世捨人 六 亭
 事足らぬ家の榮華や福壽草 斧 圃
 萬歳や草の戸口も世間なみ 松 圃

即ち「花盛り」は、どこも花見の雑沓でかくれ住む處もないと閑居を願ふ意を仄めかし、「冬籠」は不自由を常とする冬籠の意を、「蚊屋」はそれに寝る夜だけ浮世の人になつたといふことを、「福壽草」は事足らぬ中で福壽草のみ榮華を極めるといふのを、「萬歳」は何もない草の戸を世間並に萬歳が来るといふことを、それら、理智的に叙べてゐるものである。しかし月並の内容における特徴は以上のやうな傾向にとどまるのではない、極めてありふれたことを千遍一律にくり返してゐるのもその特色の一つで、月並の語義からいへばこれはその一に置かるべきものである。例へば年よりにせかれて開くゐろりかな 明 々

盃の替りてぬぐやうすはあり 鶴里
 ひさに手を重ねてきくや初蛙 半校
 扇もつ手に風のしむ御慶かな 石芝
 先よしと事すむ除夜の獨り言 素齋

の如きがそれで、皆理智的に按配されてゐる點が特色であるが、先づ「年より」の句は寒くなつて來たので、老人に開けく〜とせかれるといふ點が中心となつてをり、「盃」の句は宴會か何かで盃を重ねてから漸く打ち寛ろいで夏羽織をぬぐといふ趣向であり、「ひさに手」は解説するまでもないが「扇もつ」は年賀の時分はまだ寒いから風がしむといふ理智的な見つけどころをしてゐるもので、「除夜」の句も何事もなく除夜を送るといふ以外の何でもなし。これらはいはゞ型に嵌つたもので何らその中に詩美をもつてはゐず、理智的な着眼點がありふれた感情に安住する人々に成程と感じさせる穿ちにすぎない。以上は内容におけるものであるが、表現の上にも當然ではあるが月並的なものはある。その一は擬人的表現の句で、これは滑稽とか洒脱とかいふことを穿きちがへた結果生じたもので、たとへば

風待ちて居たやうに散る木の葉かな 準 一

白くもの抱いてやしなふ若葉かな 世外
 人さそひ出しては止ぬ春の風 青溪
 芍薬の芽も顔出して別れ霜 草國
 青空の龜相もうれし初時雨 機 一
 などがそれである。次に巧を弄した句、語句をわざと誇張した句も月並の一特色であつて、それは魚刎て葉の月ゆるするはちすかな 圃 眠

などの句が典型的なものであらう。蓮の葉の露の上に月が宿つてゐるのを、魚が刎て波が立ち、葉が揺れて月影も共に揺れるといふ趣向であるが、この際どい描寫は月並の一特色たるを失はないが、この外にも左のやうな句はこの中に入るべきであらう。

ちる花の音きく程の深山かな 心 敬
 となり迄香の運びけり櫻炭 露 松
 大原も動くが如しむしの聲 松 槽

(註、この句は後に子規が芭蕉の古池の句と對比して論じてゐる。)

かゝる言葉の誇張は封建時代の文學の特色であることを知れば、この傾向も封建的な社會關係

と不可離なものであることがわかつて思ふ。

又叙法に於て直叙をせず、間接的に表現することも月並の得意とするところであるが、これは先に述べた、ものを正面からいはず習癖と同じものである。

駿	や	よ	も	や	と	思	ふ	人	に	ま	で
朝	起	を	ほ	め	る	や	う	な	り	百	千
雲	雀	野	や	い	つ	し	か	弛	む	笠	の
聲	も	た	ぬ	身	は	安	け	な	り	草	の
眼	こ	ゝ	ろ	の	稚	く	な	る	や	草	の
										餅	
										黙	
										雷	

「駿」はよもやと思ふ人を持つて来たところが作者の味増であり、「百千鳥」もそれを直に詠むのでなくて「朝起をほめるやうだ」といふ主観を弄して一句になしてゐる點、「雲雀野」は仰向いて見てばかりゐるといふ原因と、そのため笠の紐が弛んだといふ結果を敘してゐる點、「草の蝶」も聲をもてば骨が折れるが、もたないので心安けだといふ點、「草餅」は眼心が子心じみて来たといふ點がそれ／＼月並俳句の特徴をあらはしてゐる。

言語の弛緩した敘法も月並の特色であるが、以上に述べた内容に適應するものであつたのであ

らう。例へば

陽炎や我もとろ／＼眠うなる 敬山

の如き、陽炎と眠くなるだけでわかるのに、中七を全く無用に使用してゐる如きがその代表的なものと云へよう。

だがこの月並の諸特徴を幕末に發したものとす説は明らかに誤りで、貞徳・談林はもとより芭蕉時代にも一面に存在したのであつて、曾て片岡良一氏が指摘せられたやうに(註1)

世の中	や	蝶々	と	ま	れ	か	く	も	あ	れ	宗	因
御合點	か	世	は	若	竹	の	一	さ	か	り	同	
もの	い	へ	ば	唇	さ	む	し	秋	の	風	芭	蕉
むつと	し	て	戻	れ	ば	門	の	柳	か	な	蓼	太

など連綿として傳へられたもので、したがつて月並は幕末の一特徴ではなく、全封建時代を反映してゐるものに外ならない。

かくて月並は皆封建制下における市民の萎縮した感情を現はしてゐるものであるが、平民文學なる名と共に下層へ侵入しそれ／＼自己を偽つた諷刺的な心境告白や、卑俗化された老莊思想に

よる人生観やによつていつしか「眞」を離れてしまつたのである。この月並俳句の諸特徴を見れば、後に子規の寫生の提要がいほゆる「眞に返れ」の運動であり、對象を自然に求むることが淺薄な人生觀に基く道義觀念・教訓的傾向に對する否定要素であり、敘法における漢語使用の緊密さの要求が弛緩調へのそれであり、俳系打破が封建的家柄尊重に對する第三階級のそれを主張するものであることが明らかになる。そしてその新興第三階級の俳句の主張が、子規の士族出身と維新後の特殊な政治的經濟的關係によつて國粹化され、革新方面において積極性を缺いたことは、かの急進的方面を代表する新體詩運動などに對比すれば明瞭であるが、そこに新派俳句の新たな封建性があると思ふ。

然し俳諧が以上のやうに下層階級を對象とするものであつたゝめに、明治の専制政府はこれを利用して人民教化の具たらしめようとし、明治七年政府は俳諧師に試験を課し、それにパスした三森幹雄・鈴木乙彦を思想善導の教導職に補し、なほ月の本爲山・小築庵春湖も教導職に推薦されたなどの事實があり、またそれらの時代的傾向に迎合するため後に爲山によつて俳諧教林盟社が組織され、幹雄も明倫講社を組織したなどのこともあり、(註2)二十年六月に「修身俳諧不朽集」などいふ選集が出版されてゐるのも、さういふ時代を知るべきものであつた。しかしながら

維新以來、資本主義制採用の全力的な活動とそれに基づく新しい社會組織の基礎の整備と、新たな政治原則による四民平等の社會の再編成とに全社會が全力を擧げて奮闘せねばならなかつた時であり、それと全く反對な精神に據つてゐるこの逃避文學であるから、それに携はる者の質的下落も亦蔽ひがたいところであり、即ち宗匠はその口過ぎのために、一般大衆は己れの名を印刷して見たさにそれに携つたくらゐなもので、従つてそこから正しい人生觀・藝術觀による作品などは生れよう筈はなかつた。だから後に子規が起つて斧鉞を揮つても、彼らは一言の駁論をもなし得ぬまでに腐朽しつくしてゐたのである。

此時代の宗匠は、東京に於ては其角系統の老鼠堂永機、白雄系統の春秋庵幹雄、嵐雪系統の白軒梅年及びその門下雪中庵雀志等が有名であり、其外には永機の男機一、幹雄の男準一、雪中庵宇貫、夜雪庵金羅等、京都の花の本芹舎は二十三年に死んだが、その門の聽秋、三河の蓬宇、大阪の鶯笠其他全國至るところに其勢力を張つた。

凡そ我蜻蛉洲の首尾、鯛は花は見ぬ里ありと雖も、月並俳諧の集會あらぬはなく、都鄙到るところ社中あり、俳人あり、月に幾卷の冊をなさざるはなし、曾て千島擇捉島の冬間消閑方を類別せし者を聞く、曰く一村は飲酒、一村は賭博、一村は荒色、一村は俳諧、亦又平民的文學

の普及せる一斑を覗ふに足るべきにあらずや(註3)——
この記事は幾分の誇張があるにしても、著者知十が函館に新聞記者をしてゐたことに徴して事實に近いものであつたらうと思はれる。「この多數の門徒あるが故に、業俳として門戸を張るも猶能く維持し得る所以」であつたからだ。『俳諧明倫雑誌』は明治十三年、先に教導職に補された三森幹雄を社長として發行されたものであるが、その明倫講社員が全國に三千あるといふことを呼號してゐるのに徴してもその盛んなのがわかると思ふ。然しすでに教化の具に自ら進んでなつたこれらの集團に、眞に詩を作るといふ熱意がある筈はなく、彼の明倫雑誌に廣告するやうに、「前金購求者の發句は毎號必一句宛掲載すべ」きもので、それが今日の俳句雑誌の惣花入選に先蹤を開いてゐることがわかるが、従つてそれは量的な發展であつて質的のそれではなかつた。それが封建時代のまゝに眠りこんでゐた人々には分らなかつたが、新時代の教育をうけたものには、次々と火の手あがる文學の諸分野の革新とともに、俳句も亦革新せられねばならないとの考へをもたしめたことは確かであらうと思ふ。その氣運が新派俳句を勃興せしめたもので、現に伊藤松宇も子規と殆んど同時代に(それよりやや早く)宗匠の選句の獨裁に反抗して運座の改良を圖り、椎の友を組織したなどの事によつても時代の機運を窺ふことが出来るし、又子規と同じく新派俳句

に指を染めた紫吟社・筑波會・秋聲會等の人々も、さういふ新時代への氣運に促されて起ち上つたものであつた。

子規は三森幹雄に林江左の紹介で接して、奥羽旅行には幹雄の紹介狀を持つて地方の俳諧師を訪問するつもりだつた。その時分にはまだ彼の俳句革新は舊派に對して妥協的であり、その途中で彼は宗匠らの無學なのに呆れ、それを打破すべく歸來幾何もなく「芭蕉雜談」によつて宗匠らに挑戦するに至つたものと私は考へる。しかし前に述べたやうに、幹雄は俳諧教導職になつたり、民衆教化のために道歌的な句を奨励したりしてをり、子規の俳諧を藝術として獨立さす運動はひろん全月並俳人を對象とするものではあるが、最も尖鋭に對立すべきは幹雄であつた。けれども彼は幹雄に對しては、他の宗匠に對してと同じく、直接的に戦端を交へるに至らなかつた。これは短歌における佐々木信綱の場合に似てゐる。彼は月並の本山の如き觀ある天保の俳人梅室・蒼虬を批判し、月並の神髓を解明し、新派のそれと異なる點を説いてゐるが、短歌におけるやうに直接にそれと渡り合つたものはなかつた。これはそれ／＼相手の状態によるもので、彼が格闘するまでもなく月並俳句は既に腐朽しつくしてゐたのだ。それは例へば徳川の封建制が腐朽しつくして容易く倒壊したやうに倒れたのであるが、子規の俳論に彼の宗匠たちは反駁もしなかつたかは

りに共鳴もせず、彼の論に共鳴して集つたものは月並の中で呼吸したものでなくして、新時代の息吹を感じてゐたものであつた。

今までの俳諧史によると宗匠の無學なるに引かへ、子規の學殖が宗匠をして敵對する能はざらしめたのだといふが、これも一面の事實ではあらう。だが宗匠たちが悉く無學だつた譯ではない。またたとへ大學に學んだとはいへ、二十代の子規が古典についてどれほど造詣があつたか我々は詳かにせぬが、然し蕪村論講などを見てもさう深い學問があつたとは思へない。たゞ科學を加味した學問といふ點で、宗匠と子規は霄壤もたゞならざるものがあつた。彼の俳論は科學を基本としてゐた、宗匠らが彼の諸論を翫味すること能はなかつたのも科學の力であつた。

もとより明治維新による新たな資本主義文化のためには、宗匠らも幾分かづつは新時代化せねばゐられなかつた。例へば月並の摺物を新聞もしくは雑誌に轉換したことなどがそれであつた。「俳家新聞」は子規の生れた翌年の明治元年に出てをり、二年には「俳諧新聞誌」が發行され、十三年一月には伊勢に『友雅新報』が、同十二月には幹雄の『明倫雜誌』が發行された。しかしそれにも拘らず月並の精神は中々一掃されなかつた。月並を徹底的に打破して俳句の新時代化を躍進的ならしめるためには新時代への認識をもつ人を必要としたのである。

俳諧が芭蕉歿後社會の下層へ浸漸したことはすでに人の知るところである。この情勢は明治になつても變ることがなく、雪門の宗匠不白軒梅年は足袋屋であり、月の本爲山は左官であつたといふことだ。然しそれらはまだいゝ、彼等は宗匠として指導者としての學問をしたかも知れない。けれども明倫雜誌一篇の雜報に「然るを近來でも俳諧師といふ者ありて士族は祿に放れ商人は資本を失ひ或は隱居して分米なく世業には疎し學問はなし職は持たずと云處から俳諧師にでも成らうと點取發句を力に判者披露と云事をして口を糊するのたつきとなせり云々」(傍點原書)とあるのは、維新のどさくさ紛れに如何はしい點者の殖えたことを彼ら自ら云ふものであるが、これを見ると後に子規が俳句は平民文學だが新派は舊派の如く平民的なる能はず、或は八百屋・床屋の俳諧を眞成詩人(新時代のインテリゲンツトを彼は斯く云つてゐる。)の手に移さなければならぬなど高調し、俳諧も美術文學であることを叫んだのは、俳諧の位置を引上げると同時に、月並の手からそれを奪取し、新たに編成されたる社會の各集團の思想・感情を盛るものとして更生せしむるに在つたことがわかる。

○ また子規の革新がやゝ緒に着くに及んで、それと同時に革新に乗り出しつゝも舊派との折衷を策した秋聲會をも生じて、やゝ複雑な様相を呈したが、それは多く都市民的な感情を代表してを

り、舊派に對する態度も妥協的であり、その勢力分布は日本派の比でなかつた。そして子規時代には遂に俳句においては子規に敵對する者はなかつたのである。

註1 同氏「談林派の運動」(岩波「文學」八年七月號)

2 勝峯晉風氏「明治俳諧史話」中の「俳諧教導職と教化運動」參照

二、革新の經過

子規は明治十八年に初めて俳句を作つてをり、其作品は『寒山落木』に残されてゐるが、それは

梅のさく門は茶屋なりよきやすみ
夕立やはちすを笠にかぶり行く
小娘の團扇つかふや青すだれ
木をつみて夜の明やすき小窓かな
朝霧の中に九段のともしかな
のやうなものであつた。

明治二十年歸省して勝田主計(號明庵)の紹介にて三津ヶ濱に其我なる宗匠を訪うて俳句を問ふたことがある。其我は梅室の門で、關白某卿から宗匠の號を賜はり、四時園の名をも賜はつたと子規は「筆まかせ」に書いてゐる。二十二年の四月歿してゐるが、其我から子規はあまり影響をうけなかつたばかりでなく、彼は其我と、其後多少交遊關係のあつた幹雄をもこめて全月並を打破し、且つ自己のそれからの殘滓をも止揚し去つてゐる。

『俳諧明倫雜誌』には伊豫其我なる名を殆んど毎號散見するが、其句を少し擧げて見ると

蝶にかす日南も出來て庵の春

年來下戸なれば百薬の長を用ゐずしかはあれど古稀の齡を経て餅上戸なり

餅喰つた力見するぞ小松引

浮鳥の背にも見ゆる氷柱かな

長閑さの種や二見の朝けしき

詞書略

鮫鱈の知恵にもおとる渡世かな

二十年二十一・二三年は先に見たやうな状態を子規は續け、歌と共に俳句をなぐさみに作つて

ゐる態度であり、作品も其我先生の句からあまり出てをらず、虚子の評言を借りれば「後年の子規居士の芽生えと目されるものは何も認めることが出来な」(註1)いものであつた。この頃の句は「寒山落木」に二十年に二十二三句、二十一年に三十一句、同年筆の「無何有洲七艸集」に三十七句載せてあるが、二十二年には「寒山落木」に三十二句、二十三年には五十五句、二十四年には「寒山落木」に二百三十三句、「かくれみの句集」に九十二の句がある。それ等の中から句を少し擧げてその發達の経過を見ることにしよう。

ちる花にもつるゝ鳥の翼かな

鶯や木魚にまじる寛永寺 (二十年)

すつと出て苔見ゆるや杜若

女にも生れて見たき踊かな

蚊柱や蚊遣の烟のよけ工合 (二十一年)

燕の飛ぶや町家の藏がまへ

嵐に舞ひあがりたる落葉かな

一日の旅おもしろや萩の原 (二十二年)

菜の花やはつと明るき町はづれ

月落ちて灯のあかるさや小夜砧

あたゝかな雨が降るなり枯葎 (二十三年)

わらじの緒結ぶや笠にとぶ胡蝶

市川

落ち行けば隣の園や揚飛雀

三津生簀にて

初汐や帆柱並ぶ垣の外 (二十四年)

このいづれにも後年の寫生體の句は多く見られないが、次第に形式的な修練を見せて來てゐる。二十四年の秋から彼は「俳句分類」に着手したのであるが、それによつての古句の理解がさういふ修練に寄與するところが少くなかつたらうと思ふ。「俳句分類」の仕事のために彼は大學の圖書館や上野圖書館に行き古句を寫して分類してゐるうちに、そこで「連歌時代より始まつて、それから貞徳派の無趣味なる滑稽時代を過ぎ、宗因の談林に至つて僅に一點の活氣を認めながら猶五里霧中に迷ふてをる」(註2)彼自らの俳諧史觀を體得した。さうして「春の日」あら野」などに

至つて漸く佳境に入り、「猿蓑」を繙いた時は一句々々悉くが面白いやうに思はれて嬉しくてたまらなかつたと云つてゐる。そのため少し俳句に眼が開いたやうな自信をもち、旅行をして見たくて堪らなかつたので三日ほど武蔵野を廻つて句を作つたが、それは

凧 や 荒緒 くひこむ 菅の 笠

夕日 負ふ 六部 背 高き 枯野 かな

雲 助 の 翠丸 黒き 榎火 かな

などいふものであつた。その句はいづれにもあれ手段として寫實的になつて行かうとする彼を見ることが出来る。

彼の周囲も漸く此頃から文學的集團らしく形づくつてゐた。それ以前二十一年に彼は常磐會寄宿舎に入つて新海非風と同室に在り、翌二十二年には春、内藤鳴雪が寄宿舎監督に任じ、また非風を通じて彼は五百木飄亭と相知り、其年の冬には竹村鍊卿（黄塔）が入舎したりして漸く賑やかになつたが、子規を中心にこれらの人々が漢詩・戯文・俳句等に熱中し、子規も「詩歌の起原及變遷」といふ論文を常磐會舎生の文集『眞砂集』第一篇に發表したこともあつた。この論文は子規の文中「最も早く印刷されたものかも知れない」と改造社版子規全集の編輯者は云つてゐる。

二十三年の二月十二日寄宿舎内に「もみち會」第一回を開いて、戒田四舟・五百木飄亭・佐伯蛙泡・河東可全・新海非風・伊藤鐵山・正岡子規の七名が連月題を課し、歌・俳句・短文・戯畫等を作し、これを集めて「つゞれの錦」と名づけ、十月二十三日の會まで七回分の會稿を得た。碧梧桐との書信の往復もこの年に初まり、松山に在つて遙かに虚子も東都の空を望見して子規に兄事する、藤野古白・佐藤肋骨・仙田木同其他も子規の周圍に集つてくるといふ状態だつた。鳴雪が俳句に手を染めたのは二十五年のことであるが、これもさういふ若い連中の氣運にまき込まれたものであるかもしれない。

然しかゝる俳句への熱心が學業を等閑にする傾向を生じ、この年の哲學の試験の準備のため哲學のノートと手帳を携へて向島木母寺境内の茶店の樓上を借り、勉強をはじめたが、「二十頁も讀むと最ういやになつて頭がボーとしてしまふから、直ぐに一本の鉛筆と手帳とを持つて散歩に出る。外へ出ると春の末のうららかな天氣で、櫻は八重も散つてしまふて、野道にはけん／＼が盛りである。何か發句にはなるまいかと思ひながら畦道をぶらり／＼と歩行いて居ると其愉快さはまたとはない。」（註3）斯ういふわけで哲學の勉強は手がかかない。此年の學年試験には大宮氷川公園の萬松樓といふ宿屋に陣取つて勉強しようとしたが、やはり俳句の方に身が入つて勉強は出

來ず、竹村黄塔や夏目漱石と遊んだりしてしまつた。それでもこの年の試験はどうやらゴマ化してパスしたが、そんなことで二十五年の學年試験にとろ／＼落第してしまつたので、それをきつかけに學校をやめてかねて投稿しつゝあつた日本新聞へ入社することになつた。

第一篇でも述べたやうに彼はその野心も相當大きく、初めの陸軍大將を志した如きは少年時代の空想にすぎぬとしても、哲學を學ぼうとしたり、それが更に文學へと規模を小さくしたが、それでもまだ文壇への雄飛を志し、小説家たるの希望をもつてゐた。彼の書いたものに屢々小説の批評が現はれ、殊に彼の『色懺悔』の批評、二十四年ごろの書簡に頻繁に現はれる小説への關心を物語る言葉はそれを明らかにしてゐる。それ以前彼は露伴の『風流佛』に感じたが、金に窮することがあつて、それに倣ひ一篇の小説を書き上げ、『月の都』と題して露伴を訪れて出版の斡旋を乞はうとした。露伴はそれを春陽堂へ紹介したが、當時の出版資本家がこの無名の青年の小説を出版するものではなく、且つ「月の都」は餘り時代にそぐはぬ代物であつたので、數日して原稿を返送して來た。(註4) その後此原稿は高橋建三の手から二葉亭へ渡つたところから見ると諸方へ出版交渉をしたものらしいが、結局うまく行かなかつた。元來負けじ魂の彼が、その世の中へ出るに直面してこの苦杯を喫したことは其失望落膽察するに餘りがあるが、彼はこの直後虚子、

碧梧桐に宛て自分の志を語つてゐる。「僕は小説家となるを欲せず詩人とならんことを欲す」

(註5)。「人間よりは花鳥風月がすき也」(註6)(傍點子規)と。この二つの言葉は、むろん同じ意味で、「小説の述作に向ふ宿志の處女作「月の都」の出版頓挫と、其藝術的價値に對する自己反省の痛切な自尊心損傷のために(註7)反動的に彼が自己の行く道を人間を描く小説家でなく、花鳥風月を詠ふ詩人たらんと決意した悲壯な宣言と見るべきであらう。

ところで、子規をして斯くまで傾倒せしめた『風流佛』とはどんな小説であらうか？ その著しい特色は封建的なものと新時代的なものが程よく調和を保つてゐる點にあり、内容に於て草艸紙的な人情や道義の綯ひ交ぜであり、表現においては露伴自ら語つたやうに木曾の須原で經驗した小事實を利用し、その點で寫實らしい貌を示してゐる。殊に主人公の藝術精進への意力や、當時流行ものゝ裸體美を纏綴した點、西鶴模倣の擬古文や作者の學殖を偲ばせる古典や古語の援用等が子規をそれへ惹きつけたものと思はれ、この封建貴族的なものゝ綯ひ交ぜは、「當時の専制勢力とブルジョアジーの結合を表現した」(註8)ものといはれてゐるが、根本的には作者自らの社會的位置を示してゐるものにすぎず、殊に主人公が人爵を斥けつゝも「吾肩書に官爵あらば——」などいふところにそれが現はれてゐる。さういふ諸點が同じやうな位置に在

る子規を心酔せしめたものと私には考へられる。

この「月の都」の蹉跌は、子規個人の生涯に重大な作用を及ぼしたのみならず、俳諧の上にも重大な影響を與へた、それはこれを契機として彼が俳句・短歌の滅亡論者からその改良主義者へ轉じたことで、それ以前彼が俳句・短歌に對して否定的であつたことは、彼の左の言葉に徴して明らかである。即ち

——歌俳句ともに永久のものに非ず、殊に發句は明治に盡くべきものと小生の豫言なり(註9)

——僕は明治時代に俳諧の最期を見んといふ説を持せり。之を證せんとならば我等の作る句がどれだけ遠く古人の範圍外に出でたるか思考すれば足れり(註10)——

なほ二十五年の『獺祭書屋俳話』中の「俳句の前途」でも、和歌俳句が一首の字音二三十に過ぎないので、これを錯列法（ガイミューテーション）に由つて算するも早晚新味を出しがたくなるといふ説を肯定し、「俳句は已に盡きたりと思ふなり。よし未だ盡きずとするも明治年間に盡きんこと期して待つべきなり。」と断じ、和歌は俳句より字數が多いので幾分壽命も長いやうであるが、言語が雅言のみを用ゐるので其區域も狭く、「明治已前に於て略々盡きたらんかと思惟するなり」と云つてをり、同年『早稻田文學』に發表した「我邦に短篇韻文の起りし所以を論ず」の中でも同じやうなことを云

つてゐる。これはいふまでもなく彼が小説家たらんの志望をもつてをり、俳句・短歌に對して冷靜な科學的な態度を執つてゐたため、それが歌壇の卓見と稱せられてゐる尾上柴舟の「短歌滅亡論」(四十三年)よりも二十年前に現はれてゐるところに子規の卓見が稱せられねばならない。だが事態は變つて、小説家としての社會への出口を塞がれた彼は、やむをえずその消えかゝつた燈火に油を注ぐ役を勤めなければならぬやうになつた。これは人間の意志が社會的・物質的に制約されてゐることを立證する一の實例で、彼の進歩的なものが巨大な力のために歪められてゆく経過である。従つてそれ以前の彼の文科大學國文科への入學までも「俳句への執着」が與つて力あつたとす説(註11)はあまりにも意志の自由を信じた観念的見解といはねばならない。もとより子規が「俳句分類」に従事したり、俳句の評論を發表したりしたことは「月の都」以前にもあつたが、それは紅葉山人らが俳句をやつたのとは同程度であつたらうと思ふ。それとはまた異なるが、子規の俳句・短歌滅亡論を否定論でなくして懷疑論であり、それを後の芥川龍之介の小説否定(『文藝的なあまりに文藝的な』)などに比すべきであるといふ説も、(註12)一應は後の子規の行動に考へて肯かれるけれども、以上の「月の都」の蹉跌や碧・虚に與へた書簡より考へ、なほその滅亡論を根強く、すつと後までも持してゐた點(註13)より考へて私は以上のやうに判断

せねばならないのである。

彼の日本新聞入社は、藤川忠治氏が解するやうに羯南等の「主義に共鳴した」ものであるにせよ、我々の如く解するにせよ、後の彼の運動を有利に展開する上に於て力あつたことは否まれな
いと思ふ。今までの子規の研究の殆んどがチャーナリズムと結ばれた子規の運動を見落してゐる
のは、いかにこの方面の研究が立ち遅れの状態にあるかを立證してゐるものである。聰明な彼が、
其將來を考へずに目前の俸給のみを見て他の新聞へ赴く筈はなく、且つ後の運動に日本新聞の力
と、その大新聞でない小さな社であつたことがどれ程彼を助けてゐるかを思ふ時、「幾百圓くれ
ても」他へ行かなかつた彼の考へは、彼の聰明さを證するものでなくてはならない。

それ以前彼は「獺祭書屋俳話」を日本紙上に発表したのが、それからの俳論・俳話は多く日本及
小日本に發表され、同時に俳句の募集もそれを土臺にして行はれた。即ち俳論俳話についていへ
ばその年の十二月「歳晚閑話」を、翌二十六年一月「歳旦閑話」を、三月「文界八つ當り」を、
十一月には「芭蕉雜談」が發表された。就中「芭蕉雜談」は從來の宗匠によつて偶像化された芭
蕉を打破し、新しき觀點に立つてその價値を認めようとするもので、芭蕉の作品で從來宗匠にも
てはやされてゐた理窟の句、即ち

ものいへば唇寒し秋の風

道のべの木槿は馬にくはれけり

のやうな句を排し、自己の美感に適合する唯美的な一面を稱揚し、その要求に合する芭蕉の幽玄
纖巧・華麗・奇拔・滑稽・蘊雅等の特色を擧げてゐるが、その中で芭蕉の特色は雄渾豪壯の要素
をもつところに在りとなし、「美術文學中最高尙なる種類に屬して、しかも日本文學中最之を缺く
者は雄渾豪壯といふ一要素なりとす。和歌にては萬葉集以前多少の雄壯なる者なきにあらねど、
古今集以後（實朝一人を除きては）毫も之を見る事を得ず——松尾芭蕉は獨り此間に在て雄渾の
筆を揮ひ、天地の大觀を賦し山水の勝概を叙し、以て一世を驚かしたり」と云つてゐることは、
彼の古池の句を「ありのまゝ」を句になしたといふ見解と共に、自然さを失ひ、理智に流れて道
歌的な封建的道德を鼓吹し、膚淺な人生觀と卑近な人情をのみ詠うて足れりとなしてゐた宗匠俳
句に對する反措定として將又此時代の昂揚した國家意識と子規の封建魂（註14）の合したもので、
彼の「風流佛」への傾倒と共に豪宕・雄渾を讚美したものと、萬葉禮讚と共に注意する必要
があらう。

彼は月並俳句に對して最初からそれを打破する考へをもたず、その理論を以て宗匠を反省せし

めて新しき道に立たせようと考へてゐたらしい。二十六年の奥羽旅行には彼は春秋庵幹雄の紹介状を持ち、行脚のかたはら地方の宗匠を訪ひて俳句の宣傳をしようと思つてゐたものと私は考へる。むろん前年來俳句に専心すべく餘儀なくされた彼が、俳諧精進を兼ねて全國に向つて俳諧陣を布くべきその第一歩でもあつたらう。だが二人ほど訪問して見ると「實以て恐入つたる次第にて何とも申様なく前途茫茫最早宗匠訪問をやめんかとも存候程に御座候俳諧の話しても到底聞き分ける事も出来ぬ故つまり何の話もなくありふれた新聞咄」でもして引下つて来る外はなかつた。その癖彼の年若なのを輕蔑し是非幹雄門にはいれといふ有様で、彼らを門下にしようと思つた彼は不平に堪へなかつた。豎子共に事を爲すに足らずと思つたことと思ふが、果然その年の十月から「芭蕉雜談」は日本紙上に公けにされ、宗匠らの偶像破壊の斧鉞を揮ふこととなつたのである。だからその中で宗匠俳句に對して如何に闘ふべきかの要素が見られるのも當然でなければならぬ。

なほこの年の出來事に伊藤松宇らの椎の友結社との接觸がある。松宇が片山桃雨・石井得中・石橋桂山らと共に椎の友結社を組織したのは二十四年であつて、子規のそれと同じく自由主義的な時代の機運に動かされて宗匠獨裁の選句をデモクラチックな互選にするための運座の改良であ

つたのであつて、(註15)當初は「子規さへもこの事は氣付かずにゐた」と松宇は云つてゐる。二十五年松宇は富士百句を作り、それを子規に送つて批評を乞うたのであるが、それから子規も椎の友に加はり、二十六年の三月には共に雜誌「俳諧」を發行したが、機未だ熟せず二號で廢刊せねばならなかつたところに、その勢力の微弱さが窺はれ、後の子規の運動は機運の熟してゐた點もあるが、そのみでなく新聞の力が與つてゐることを認めなければなるまい。

しかし日本派の勢力が目ざましく伸展したのは二十九年以後のやうで、これは二十八年の十月から十二月へかけて日本に發表した「俳諧大要」が普及化を助けたものと思はれる。「俳諧大要」は新派俳句の教科書ともいふべきもので、むづかしい理論的なことを避けて平易な啓蒙的なものであるが、俳句が普及されると同時に、俳句に對する論議が漸く人の注意を惹き、新聞雜誌に俳句俳論を載せるものも多くなつた。それに力を得た子規は二十九年七月から八月へかけて「俳句問答」を日本に掲載し、實際的な質疑や批判に答へたが、これも普及を助けたことはいふまでもない。三十年には「明治二十九年の俳句界」を掲載し、二十九年中における碧梧桐・虚子・露月・紅綠・霽月・漱石・極堂・牛伴・把栗・墨水・蒼苔・肋骨・其村・東雲・左衛門・花叟・靈子・別天樓・無事庵・叟柳・燕子・繞石・四方太・愚哉・愛櫻子・秋竹等の進歩を稱揚したが、その

劈頭に於て彼は前年來の俳句の批評と新派俳句の立場を左のやうに説明してゐる。

日本が世界列強の間に押し出して日本帝國たる者を世界に認められんとするには日清戦争は是非必要なりしなり。——事の大小こそあれ、俳句が文學界に出でんとするには勢ひ此攻撃と軋轢とは免れ得ざる所なるべく、又攻撃軋轢は終に俳句なる者を世界に承認せしめたること、日清戦争の日本に於けると異なること無し。文壇に於ける戦争の結果は固より劍戟の下に雌雄を決するが如き劃然たる勝敗を示す者に非ずして、兩々相執つて下らざるを常とす。俳句の攻撃辯論に於けるも亦直接の勝敗を見る能はざりしと雖も、事實の上に於ては俳句は稍々勝を制したるに似たり。見よ昨年に於て諸新聞雑誌が頻りに俳句を載せ初めたるを。是れ俳句の簡單にして登載に便なるに因るとは言へ、俳句にして文學と認められずば誰か好んで非文學的の兒戯を新聞雑誌に載せんや、俳句の價值にして或る人の言へる「軍夫の軍屬たるが如く僅に文學的なる者」と信ぜられなば誰か好んで此軍夫的文學を載せて徒らに不名譽を買はんや。——

これは明らかに新派勝利の凱歌に他ならないが、その餘勢を驅つて三十年の一月、松山に於て柳原極堂によつてホトトギスが創刊され、日本派俳句の宣傳機關となり、後三十一年十月東京に遷された。また二十九年に蕪村の『新花摘』に接してから蕪村の崇拜者となつた彼は、三十年『俳

人蕪村』を執筆したが、この論文は二十六年の「芭蕉雜談」に比し、結構整然たるものがあり、蕪村の作品を内容と形式に分ち、内容としての美に積極・消極の二方面があり、蕪村の句には前者の要素を多く備へ、且つ客觀・人事・理想・複雑・精細等の美の要素をもち、句法・句調・用語・文法等の表現も其内容と共に最も發達したる手法を用ゐてゐると説き、芭蕉の句が寂びと幽玄(彼はこれを消極美なる言葉を以て現はしてゐる。)を旨とするに反し、蕪村には春季・夏季の積極美を促へてゐるものが多いことを説き、その句を全面的に禮讚し、蕪村に崇拜の意を明らかにしてゐる。斯くてこの年の十二月には自宅に初めて蕪村忌を修し、翌三十一年の一月には初めて蕪村の句集論講を催し、大に蕪村の句の藝術價值を天下に向つて稱揚した。

蕪村の何が子規をして爾く感激せしめたか? それは次項に説くからこゝでは省略するが、この「俳人蕪村」と「芭蕉雜談」における芭蕉、蕪村の評価のうち、子規の俳句における運動の展開と、彼の俳句觀の推移とがわかる。「芭蕉雜談」時代には何を措いても先づ月並宗匠を打破し、併せて新時代の教育をうけた選ばれたインテリゲンツ(彼はこれを眞の文學者・詩人なる名を以て呼んでゐる)を其下に糾合する必要があつた。それは恰も小中村義象が「歌學の精神」(『歌學』四號)で和歌を書生の手にとり戻せと云つてゐるのと同じである。そのため芭蕉のもつ一面の理

智的な方面を極度に排し、其反對の唯美的な方面を同じ程度に稱揚したのであるが、彼の事業も漸く其緒に着いた蕪村調時代には、蕪村の句のもつ唯美的な方面を全面的に推稱すればよかつたのである。そこに彼の唯美主義への發展もわかるが、當初は封建的な道義・人情をもつ理智的なものを打破して、新しき時代に適應する人生主義的俳句を建設せんとすることを志してゐたが、更にそこから蕪村の唯美的なものへの移行の過程が見られるのである。

註1 「子規居士の古い時代の句を讀む」(『日本及日本人』昭和三年九月號)

2 『獺祭書屋俳句帖抄』序

3 『墨汁一滴』

4 私は曾て『月の都』と俳句専心の關係に觸れて論じておいたが、この頃碧梧桐の露伴訪問によつて此消息が明らかになつた。『俳句研究』十年一月號「幸田露伴・河東碧梧桐會見記」参照

5 二十五年五月四日虚子宛書簡

6 同年同月廿八日碧梧桐宛書簡

7 河東碧梧桐氏『子規を語る』中「月の都創作前後」参照

8 篠田太郎氏『史的唯物論より觀たる近代日本文学史』

- 9 二十四年十二月二日虚子宛書簡
- 10 二十五年三月十日碧梧桐宛書簡
- 11 志田義秀氏「現代俳句」(岩波日本文學所收)及同氏「明治俳諧史」(改造社俳句講座史的的研究篇)
- 12 原田芳起氏「評論家としての正岡子規」(『日本文學』昭和九年九月號)
- 13 「二十九年の俳句界」
- 14 伊澤信平氏「子規の萬葉集復活と寫生の提唱」(『短歌研究』昭和十年二月號)
- 15 伊藤松宇氏「新派俳壇勃興史」(雜誌『黎明』昭和九年一月號)

三、紫吟社・秋聲會・筑波會・半面派の動靜及び

それとの交渉

子規が起つて俳諧の革新をせんとしたのは、既に見て來たやうに時代の勢に乗じたものであり、それであるからには他にも時代を感じて同じやうな事を企てたものがなければならなかつた。それがこゝで述べようとする紫吟社・秋聲會・筑波會・半面派等であり、當面の人としては松宇・紅葉・酒竹・竹冷・知十等であつた。

知十の『俳諧風聞記』には次のやうな記事がある。「紅葉人に語りて曰く、獺祭書屋主人とは正岡子なるか、己れ會て子に俳諧の喜ぶべきを説きしことありしが、幾くならず子規の名俳諧壇上に喧し、亦一文才ならずやと、子規果して紅葉に聴きしか、紅葉果してかく話せしか事の實否は知る處にあらず、世の風聞は斯く傳へられたり、假令風聞は誤りたりとするも、紅葉已に新俳壇の前登者たるに疑ひなければ、子規が俳諧に於て之を紅葉に聞きたり間接に〓とするも不可なき也。」

尾崎紅葉は子規と同じく慶應三年の生れ、父は谷齋といふ象牙彫師であつたが、頗る幫間的な人間で、酒席に侍つて滑稽な動作をするのが得意であつたといふ。紅葉は父の動作を嫌つてゐたさうであるが、しかし江戸市民で、封建的な手工業に養はれた彼の觀念は、それ以外のものではあり得なかつた。彼の元祿文學への懷古も談林の模倣も、さうした社會的位置に基づく思想・感情を除外しては解し得ないことであらう。即ちその初期においての濃厚な戯作調はさうした環境に醸生され、新しい貨幣資本を背景とする社會に順應しつゝも、或る時はそれに諷刺・皮肉の消極的反抗の意を仄めかし、俳句によつては蓄積されゆく富に對して歪んだ笑を寄托したものと見て差支へないだらう。

彼は明治十八年硯友社を組織したが、彼の俳句に手を染めたのもその頃であつて、子規が俳句をやり出したに比して遅くはない。子規がしきりに「筆まかせ」などを書いてゐる二十一年、彼は學生の團體で『我樂多文庫』を公刊した。彼の本領は固より小説に在り、二十二年に『二人比丘尼色懺悔』を出して文壇的スタートを切つてから、『拈華微笑』『新色懺悔』(共に二十三年)『二人女房』『伽羅枕』『おぼろ舟』『むき玉子』(各二十四年)といふやうに大體順調に進んで行く事が出来た。俳句は小説の爲に文を練るものとしてとり上げられ(註1)二十三年漣・水蔭・眉山・柳浪等と紫吟社を興したのであるが、この二十三年は子規が『風流佛』に接した年、二十四年は俳句分類にとりかゝつた年、「月の都」の創作にとりかゝつた年であつた。そこに兩者の向ふ處の相違がはつきり分つてゐた。

子規は學校で同級生に『我樂多文庫』などに關係してゐる者があり、それを見て其才氣には驚いたが、同輩位な書生がやるのだと思つたために、半ばはこれを妬み、半ばはこれを輕蔑してゐた。そのため『色懺悔』が出た時も世間の評判は高かつたが、妬むのか悔るのか讀まうとも思はずゐたが、或る人が是非讀めと貸してくれたので、一讀して今度はこれ位のものなら自分にも書ける、も少し面白く書けると本當に安心してしまつたと云つてゐる。その安心したといふところに彼が

小説に於て競争心をもつてゐたことがわかり、彼の紅葉に対する感情と小説への關心を物語つてゐるが、それが圖らずも彼の抱負を實現さすべき好機會である「月の都」の出版が蹉跎して、彼が人一倍落膽失望して俳句に専心しようとするに至つた理由の一でもあつたと思はれる。

我々は俳諧史において貴族的なものと市民的なものゝ相尅を見て來た。(註²) 芭蕉・蕪村は前者に屬し、宗因・鬼貫・蓼太等は後者に屬する。紅葉等の文學は、その元祿への回顧がそれを示してゐるやうに町人の藝術家西鶴に範を採り、それは封建的な殘滓と市民的感情が骨子となつてゐた。俳句において談林を模倣したのも、談林の輕快な口調が、同じやうな社會的地位に在る彼らを心酔せしめたことゝ思はれる。一説に西鶴模倣が談林に關心をもたしめたといはれるが、私は西鶴心酔以前紅葉の心理にそれに共鳴するものがなかつたら、それに容易く傾倒すべきではないと考へる者だ。即ち談林崇拜は紅葉の社會的地位が決定せしめたもので、後に彼が鬼貫の句を喜んだといふことも、(註³) 鬼貫の句が町人的に一應完成されてゐるからである。これに反し子規は、同じく封建的ではあるが著しく貴族的であつて、紅葉一派が都市的の人事讚美に傾くに對して子規一派は自然讚美に偏し、格調の整正を重んじたのもさういふ社會關係の感情を代表してゐることを物語つてゐる。一は輕快・酒脫、一は莊重・豪宕、そして子規に在つてはむしろ反都市的に

傾き、二人が相容れないやうに、紅葉の主宰した秋聲會と日本派とも相容れない。然しながら秋聲會に於ては俳句を餘技視し、遊戯視してをり、都市的な享樂主義傾向をさへ有してゐた。それが猛精進をこれ事とした日本派と異つてゐる點であり、同時に秋聲會の勢力が地方に及ばず、常に日本派に一籌を輸してゐた點で、俳句において短歌のやうに新派同士相争ふに至らなかつた理由でもあつた。だから子規の紅葉の句に對する批評は辛辣さがなくて、どちらかといへば教へるといふ態度が濃厚だ。

紅葉山人 國民新聞に記する句に

霜白しさらばと富士を詠めけり 紅葉

とあり、第一意味さへ分らず、或は東京では朝霜白く降りたれば富士の山は定めて雪の降り増したらんとてながむるにや、若しそれならば古人に

ふる雪になほ大きかるふじの山 智 月

といふ名句もあり、さなくとも

朝霜の薬屋の上や富士の雪

などとせば聞えなん、或は霜の白き朝は晴れ渡りたれば今日こそは富士も見ゆべけれとて詠む

るにや。さすれば

薄赤う旭のあたりけり霜の不二

朝霜や不盡を見に出る廊下口

などとせんか——紅葉山人の小説の長所は高尚超脱にもあらず、雅健雄壯にもあらず、周到精緻にもあらず、只ありのまゝを客觀的に敘するに在るなり。而して俳句にては未だ之を悟らざるが如し。又此句の意は前に解釋したるが如くならず、只々此まゝの意なりといはゞ未だ全く天然の趣味を解せざるものゝみ。(註4)

この言葉の裡に紅葉に誨へるといふ意を酌みとすることは容易であらう。これは二十八年十二月のものであるが、こゝでは子規は紅葉の先輩として振舞つてゐることがわかる。この年十月、紅葉・竹冷・知十・松宇・無黄・黄雨・小波等によつて秋聲會が組織され、翌二十九年十一月機關誌『秋の聲』が發刊されたが、その前二十八年十月—十二月執筆の子規の『俳諧大要』には宗因の「里人の渡り候か橋の霜」について云々の俳意を述べ、「——此種の句は俳諧史の上には著き功績ありたれども、今日より評せんには一文の價值もなかるべし。」との談林への批判が見えてゐる。

三十一年の「寫生、寫實」には紅葉の『むき玉子』についての極めて妥當なる批判が見える。

それには油畫の寫生のことを論じて後

——七八年も前であつたが、むき玉子といふ小説が出て、油畫の美人寫生を書いたのに、美人のモデルは眼前に居ないで美人を畫いて居る。それも美人をつかまへて來る事が出来ねば已むを得ぬ譯であるが、おまけに徹夜して畫いた事があつたかと思ふた。——

もちろんこゝには寫生唱道以來の子規の理論的乃至實踐的の寫生の體驗が斯う云はしめたものに違ひなかつた。それは同じく西鶴を軌範としたものながら、紅葉の都會的なのを子規は喜ばず、露伴の心酔者となつたところに彼の貴族的な好みが見えるが、紅葉もその採つた経路こそちがへ同じく寫實に進み、子規が趣味的な記事文としての寫生文を唱道した時、紅葉は資本主義が齎したところの、黄金と舊道德の衝突する小説『金色夜叉』を書き、子規が蕪村の夢幻的美に陶醉する者となつた時、紅葉はリアリズムに徹した鬼貫の禮讚者となつてゐたことは興味ある對照といはなくてはならない。

然し兩者の衝突は先に述べた批判で終つたのではなく、後に持ち越されて醗酵した。即ち後にはそれが全都會文學に對する否定となつてあらはれるに至つたが、後に述べるであらう赤木格堂の「博文館のしこ文」の歌にも子規の「ホトトギス第四卷第一號のはじめに」でも、そこには反

都會的な激越な感情が磅礴してゐるが、子規歿後明治三十八年九月から翌三十九年十月に亘つて二六新報紙上に發表された子規門中村樂天の「俳汝南」には、秋聲會の統帥紅葉を始め、知十・小波・松宇・黃雨・愚佛・烏黒・醉月・殘花・竹冷・五丈原の十一名を痛烈に批判してゐるが、それには秋聲會と後に述べる筑波會との人々の辯護士・小説家・官吏等の都市寄食者に對する地方民、乃至その轉身たる勤勞階級の反感を露骨にあらはしてゐる。(註5)

次に秋聲會と同じやうな精神によつて成立つたものに筑波會がある。これは二十七年創設されたもので、大野洒竹・田岡爛腸(嶺雲) 佐々醒雪・笹川臨風・國府犀東等を同人としてをり、翌年一月『帝國文學』が創刊される、やこれを研究發表機關としたので、帝國文學派とも、又帝大出身者揃ひだったので赤門派とも大學派とも呼ばれた。これも新時代に育つた人たちが、舊時代のものに嫌焉たらずして改革せんとするところに生じたものであつたが、都市生活者を中心としてをり、従つて遊戯的要素を多くもち、實作を従とし古俳諧の研究を主とする學究的態度を出でなかつたため、俳壇一方の勢力とはなつたが、改革の熱意は微溫的で、古書覆刻や俳諧史等の研究に多少の貢献はしても、俳句の創作に至つては見るところが甚だ少い。従つて子規の當面の競争相手とはなり得なかつた。

子規の筑波會側に對する批判は紅葉に對すると同じやうに、優越者の地位に居て高所より見る態度である。

文學界に醒雪の蕉下漫録なる者あり。珍らしき古書古例など擧げられたれば淺學の我等は益を得ること多し、中に蕪村の特調とも稱する二句を擧ぐ、曰く

羽蟻飛ぶや富士の裾野の小家より 燕 村

日は斜關屋の槍に蜻蛉かな 燕 村

と、而して著者は此二句を蕪村集中の拙劣なる者として擧げたるが如し。羽蟻の句固より拙の拙なる者なり。然れども蜻蛉の句は決して拙劣なりといふ可らず。句調の巧、意匠の新、配合の和、共に其妙を見るに足る。著者の之を同一位に見たる甚だ誤れり。單に此二句を擧げて取合の妙を示したるものか、さすれば蜻蛉と槍の配合は妙なれども羽蟻と富士との配合は甚だ拙なり。著者此點に於て誤れり。或は取合の巧拙をいふにあらずして單に取合の上に其特色を示したるか、蜻蛉の句は特色なりといひ得べきも羽蟻の句は特色といふべからず。著者此點に於て誤れり。(註6)

此批評を書いた二十八年末の子規が、他の俳結社のどれより俳句の研究では立ち優つてゐたこ

とを示してゐて、その優越的地位に於て評してゐる口吻が窺はれる。

なほ同書から彼がなした酒竹の句の評を擧げて見ると

埋火や西行の家集二冊なり 酒竹

について、「山家集といはずして西行集といふところが窮したりとは見ゆれど白壁の微瑕咎むべきにあらず。」といつてゐるのは、彼としては可なりレベルを低くした批評であるが、又

霜の朝女房眉をひそめける 酒竹

についても、「何の意味やら分らず、若し寒いとて眉をひそめしものならば初心の作とよりは見えす。」と云つてゐる。こゝにも子供の句を評してゐるやうな彼の態度が窺はれるが、二十九年五月二十日附の虚子宛の書簡では、「われある點に於て酒竹に劣れり」と云つてをり、その或る點とは酒竹の藏書であると思はれるが、それを意識して彼は只管作句本位に進んだことと思はれる。三十年酒竹の『與謝蕪村』が出版されるや彼は日本に其批評を書いたが、それには彼らしい獨斷もあるし、酒竹個人に對する感情を些か論の上に現はしてゐるかに思はれる點もないではない。例へば

須磨の處に素外の句「上代の畫の古びありすまの月」といふを擧げたり。こは素堂の「土佐

が繪の彩色兀けて須磨の秋」といふ句をまねて殊に拙き者なり。素堂の句を擧げずして素外の「み」を記したるかたは、はらいたさにことさらに斯く言ふなり。(傍點筆者)

これより先二十七八年頃、酒竹は子規の俳句會に出席もしてゐたし、後述するやうに子規は酒竹によつて先づ蕪村句集に接したもので、特別に親善ではないにしても普通に交つてゐた。この批評の前後から次第に遠のいて了つたが、これに就て知十は「酒竹子の分離は——直に子規子と相對して下らぬ點に於て合さぬのだ。それは霸氣の強い酒竹子の事だから、何だ子規がとの例の意氣でもの分れになつたのであらう。」と『俳諧露骨錄』で云つてゐる。そこにも日本派の宗匠主義と子規らしい面が現はれてゐると思ふ。

知十は同書でなほ兩派の勢力範圍を述べ立て、兩派關係の新聞雜誌を數へ、日本派は全國の門徒若干、俳社若干と誇示し(二十九年の俳句界其他)て盛んなる威容を張る。かうなると酒竹が筑波會の牛耳をとつて、根岸の日本派本城間近き伊香保に示威運動(といふ氣では素よりなからうが)をやつたからとて、迎も勢力の上では當りがたいと云つてゐるが、幾分誇張はあるにしても兩者の間の氣流をほゞ明瞭にしてゐるやうに思はれる。この外に椎の友以來交遊關係を持續して來た伊藤松宇も、子規の勢力が加はると同時に、其傘下に在るを肩しとせず離れ去つた。

この筑波會は秋聲會が組織されるに至つて解消したが、その同人の中でも佐々醒雪の如く子規系統の奥羽百文會に出席したりしたものや、星野麥人などは子規の傘下に參して句を作つてゐたり、また角田竹冷などは如才なく子規の病氣見舞に赴いたりした事があつて、さういふ關係が正面切つての鬭争を避け得られたのでもあらうが、子規としては二十八九年ごろ以降急激にその門へ人が集つて來たので、強ひて戦ひを挑むには及ばないと考へてゐたのでもあらうかと思はれる。要するに秋聲會・筑波會は都市寄食者のな精神による團體で、俳句に對する態度は遊戯的であり、そのため決定的な喧嘩にもならなかつたと考へられるが、然し日本派が論争を以て俳壇を威壓してゐたことはこれも『俳諧露骨録』(註7)に「——日本派となると一寸筆が澁る。それは同派の勢力がつよい、碧梧桐なんテ俳豪が居る云々」など云つてゐるところに現はれてゐる。それは恰も不平士族上りの自由黨の指導者のやうな工合に、その鋭鋒が恐れられてゐたのであらう。この子規の號令のまゝに動く日本派に引かへて、秋聲派も筑波會も師弟關係のない自由主義的な集團であつただけに、寄らず觸らずの態度で終始し、ために衝突は子規歿後まで持ち越されたものと考へられる。

たゞ一つこゝに知十の半面派なるものが出來て、日本派の主張に對して批判を與へた。知十は初め秋聲會同人であつたが、野心的な彼は三十一年龍耳・寶水・白雨・抱琴・祖春・木居・雨聲・煙霞郎等を同人として雀會を組織し、三十四年雜誌『半面』を發刊するに至り、新々派と自ら號した。知十に「圖案式俳句」なる主張がある。

——近來俳句をよむものが、無性に自然々と説くと同時に、又無性に客觀々と説き又寫生々と主張する。寫生といふ事は俳句の一方である。初學が筆はじめには、ものゝ景を寫すことは宜しい事である。しかし句は繪ではない。活動を寫すことも出来る。人情を敘する事も出来る——これは距離がわからぬ、位置がわからぬといふことは、寫生式の句を論ずる場合に條件になるであらう。併し寫生式では納まらぬ、よし納まつても句として光彩が足らぬといふ場合、これを圖案式にする、圖案式には位置も距離もいつたものではない——これは明らかに日本派に對して云つてゐることであつた。これに對して手きびしい一撃を加へたものは中村樂天の「俳汝南」であつた。むろんこれはいふまでもなく子規歿後のことで子規生前中前はいづれの集團も子規を敵にして論争することは出来なかつたので、これは子規の論が科學的であつたのと、その性格から來る押の強さによるものであつた。

註1 江見水蔭『自己中心明治文壇史』

- 2 拙稿「貞門・談林より蕪風への展開小見」(『俳句研究』昭和九年十二月號)
- 3 知十『俳諧風聞記』一八頁
- 4 「棒三昧」
- 5 拙編『近代俳句研究』中神知勇「近代俳句史」九六一―九七頁參照
- 6 「棒三昧」
- 7 これは三十三年一月―二月發表のものである。

第三章 子規の諸俳論

一、寫生

子規の文學がその全部を通じて寫生なる旗幟をもつて行はれたことは人の知るところである。元來寫生といふ語は生を寫すといふ東洋畫の言葉であるさうであるが、子規の寫生は彼自らいふ如く洋畫家のそれを借りたもので、彼はこれを實寫の意味に用ゐてゐる。子規の寫生といふことは明治文學一般に見られるリアリズムの一部であるが、彼はこの一種のリアリズムを俳句にとり入れ、自然をありのままに見るといふ方法を立て、自然さを失つて概念化した月並俳句の否定要素としたところにその革新性が在り、恰も國木田獨歩が「自然を裸々然として見る――」といったやうに、何らそれを先入觀なしに裸々然として見ようとしたものであつた。そしてその俳句における萌芽を我々は二十二年の「筆まかせ」中の、「古池の吟」と題する芭蕉の古池の吟と心敬僧都の「ちる花の音きく程の深山かな」との比較、殊にその自註「散ル花ニハ音ナク蛙ニハ聲アリ、是レ兩句ノ差違アル所ナリ、即チ古池ノ句ノ方自然ナリ。」(この自註は後年のものなるべきも、其

年次が知れない。)との中に見出す。同じく閑寂な情景をあらはさうとしながらも、「ちる花」の句には誇張があるだけ自然ではない。こゝに着目した彼は後のリズム提唱に至る開眼をなした。しかし事實の上から見れば、二十四年頃はまだ暗中摸索の状態であつた。

「明治二十五年の始には何やら俳句を呑み込んだやうな心持がして、何々十二月といふやうなものを無暗に作つて見た。」(註1)と彼は云つてをり、この秋には露百句・鹿百句・乞食百句・笠百句・唐辛子百句といふやうな猛精進ぶりであつたが、標準が定まらず

神に灯を上げて戻れば鹿の聲

といふやうな句を「神韻縹渺たる名句の様に思ふてまだ其句柄の幼稚で調子の調はぬ處などには少しも氣が附かなんだ」状態であり、多作したに拘らず見るに足るべき句はあまり無かつたやうである。

この年の初冬、彼は鳴雪と共に高尾の紅葉見に行つたが、その途中天然の景色を詠むことが少々自在になつたとて

麥蒔や東ね上げたる桑の枝

松杉や枯野の中の不動堂

の二句を『瀨祭書屋俳句帖抄』の序に擧げてゐる。この二句は「高尾紀行」といふ文の中に在るもので、前者は八王子附近、後者は高幡不動附近の寫生句であるが、彼はこの句について「平凡な景、平凡な句であるけれども、斯ういふ景をつかまへて斯ういふ句にするといふ事がこれ迄は氣のつかなかつた事であつた。」と云つてゐる。これは寫生についての悟入で、事實平凡な句であるが、かゝる實景を句にすることはそれ以前の彼にはもとより、蕪村にも芭蕉にも無かつたことである。(寫實によれば句は勢ひ平凡ならざるを得ないが、この平凡さこそ明治俳句の特色であり、彼生涯の句の中でも頂點を示すものであつたと考へられる。

翌二十六年は、夏から秋へかけて二ヶ月ばかり奥羽地方へ旅行したが、前年實景を俳句にする面白さを知つてから、實景なら何でも句になるといふ考へをもつやうになり、いさゝか濫作に傾いたやうであつて、一年の句數四千にも上つた。奥羽旅行中の彼の句を『瀨祭書屋俳句帖抄』の中から拾つて見ると

淺香沼

涼しさのたゞ水臭き句ひかな

二本松満福寺三句

第三章 子規の諸俳論

涼しさや神と佛の隣どし
御佛に尻むけをれば月涼し
寺に寝る身の貴とさよ涼しさよ

飯塚温泉二句

釣橋に亂れて涼し雨の脚
涼しさや瀧ほとばしる家の間

といふやうなものであつたが、これらの句によつて見ても、努めて即實的ならんとして最初の句のやうな名所を詠んだものでも、古歌等にもたよらずに作つてゐるところに、そのリアリステイックな態度を見ることが出来るし、一方作りあけるのみに急で詩想が醜酔をしてゐないものも多く出来てをり、早くも後年のホトトギスの寫生に見る弊をあらはしてゐる。

こゝで注意を要することは、彼のこの寫生が陳套を捨て、「新鮮」を追求する主張に結びついてゐることである。この主張も彼は實作より後に發明したものでらしく、明治藝術のリアリズムが洋畫によつてトツプを切られたやうに、洋畫家に觸發されたものであらうが、二十八年の「棒三昧」に於て雅邦の繪畫は意匠に特色なしと喝破し、「風流陳腐鑑とは不折子が日本畫の趣向の陳腐

くらべをしたる表なり。其著しきものは曰く龍虎、曰く釋迦、曰く達磨、曰く鶴龜、曰く四君子、曰く富士、曰く波に朝日、曰く孔雀に牡丹——此の如くして畫題をつらぬること數十に及べば日本畫の趣向は殆んど將に盡きんとす」など云ひ、意匠と趣向といふ語を同義に用ゐ、且つ高崎正風・税所あつ子・木村正辭・本居豊穎等の歌、殘花・正味・酒竹・醉月・竹冷・六鼠等の俳句を批判し、文學界に現はれた佐々醒雪の蕪村の句の批判を批判してゐることは、「新鮮」の追求と共に後の蕪村の配合體への轉移を暗示してゐる點に於て興味あることである。

斯くして彼が「新鮮」の追求を提唱し、且つ親らそれを實作に移さうとすると机の前に坐つてゐるばかりでは不可能であつて、西行・宗祇の如く、或は芭蕉のやうに絶えず旅から旅をして歩いてゐなければならぬ。さうして「新鮮」を求めると云つても彼によれば「文明世界に現出する無数の人事又は文明の利器なる者に至りては——俗の又俗陋なるものにして」(註2)排せねばならないために、その素材の範圍は一層局限されたものとならねばならず、目新しい自然の横たはつてゐる旅に出なければならぬことを要求する。

子規は二十六年の奥羽旅行中「名句は菅笠を被り草鞋を着けて世に生るゝものなり」(註3)と云つてゐる。俳句を舊來の儘に解する限りこの言葉は誤りとは思はれない。和歌は萬葉以來、俳

句は元祿以來、羈旅の詩として發達してをり、一二例外はあつても旅中のものに勝れたものが多
い。これは目新しい自然への接觸と、それを迎へる心の開展が佳作を生ぜしむるのであらうが、
故人が羈旅の中に急がず焦らず句を成してゐることは驚くばかりで、例へば

長旅や蟬きかぬ日は波の音 元 之

の如き、今の人なら百句も二百句も作るべき長旅をたつた一句にしてゐる。そこにすべてスピー
ドアップに慣らされた近代人の窺ひ知らぬ悠長な世界があり、俳句が近代的なものになり得ぬ性
質の一つがある。もちろん江戸から京都までを五十三驛も泊りを重ねて行くやうな時代には、こ
の悠長な詩もその本來の性質のまゝに置かれてよかつた。だが資本主義はまづ交通機關を發達さ
せ、曾て祖先の月餘を費した道程が僅か一日で行けるやうになつた。また資本主義は自然を思ひ
のまゝに破壊して自己の統制の下に従屬させた。子規の當時と雖も都會では工場が出来たり煙筒
が立つたり、自然は巨大な資本主義のマンモスのために漸く破壊されつゝあつた。子規が病體を
押して奥羽へ旅行したり近郊を鉛筆と手帳を持つて寫生に歩いたのは、さういふ破壊されゆく自
然を愛惜し、兼ねて俳句における「新鮮」を追求する意志が彼を驅つてさうさせたのであらう。
然し事態は明らかに變つてゐた。彼が濫作に流れたのも近代人の感情と悠長な俳句の性質とが衝

突したものに外ならぬ。そしてその背後に小説「月の都」の出版頓挫による俳句への専心が力を
與へてゐるであらうことを見通し得ない。だが彼が奥羽旅行中の「名句は菅笠を被り草鞋を着け
て世に生るゝものなり」といふ言葉には、その現實との矛盾を矛盾として認識せず、昔のまゝに
解釋しておかうとする意志が見られる。そこに現實との距離が一層烈しくなる。

彼の寫生は斯くして先づ實作上から悟入したものであるが、理論としての寫生はまだ姿を現は
してゐなかつた。それが現はれたのはすつと後であるが、二十六年十一月から翌年一月へかけて
執筆した「芭蕉雜談」に、芭蕉の古池の句を評して「——彼の雀はちうく鴉はかあく、柳は緑
花は紅といふもの禪家の眞理にして却て蕉風の骨髓なり。古池の句は實にそのありの儘を詠ぜり、
否ありのまゝが句になりたるならん」と云つてゐることは、寫生の理論づけへの一步として注意
さるべきであらう。

翌二十七年は素朴な寫生にやゝ倦んで天明調に入りかけ、艶麗といふ趣味と共に雄健といふ趣
味をも解するやうになり、従つて春雨・春風・行く春などの句を多く作るに至つた。天明調と云
つても蕪村調はまだ解することができず、曉臺・關更を眞似てゐたのだと彼は述懐してゐる。そ
の時代の句は

菜の花や岡崎女郎衆人を呼ぶ
菜の花のすこし許りは見ゆるかな
村とところく菜の花見ゆるかな
兼平の塚をとりまく菜種かな
上り帆の菜の花の上に見ゆるかな

といふやうなもので、「見ゆるかな」といふ言葉の多いのは強い調子にかぶれてゐたため、「見ゆるかな」といへば句が強くなつていゝと思ふたからであると彼は云ふ。なほ雄壯な句を好んだ結果、大の字を入れると凡句が名句になるやうに思つてをり、

大松魚昔の都荒れにけり
大轅百萬石の城下かな
咲にけりから紅の大牡丹
大船の眞向に坐る汐干かな
引きすてし大鋸の日永かな

等のやうなものを多く作り、「大の字の濫用といはざるを得ない」と云つてゐる。

この年小日本が発行され、彼はその主任となつて多忙な日を送つてゐたが、小日本はその年の七月に廢刊になつたので身體がひまになると共に、秋から冬へかけて鉛筆と手帳を持つて寫生をして歩いた。毎日出来る十句二十句が平凡なものが多かつたけれども、厭味がなく垢ぬけがしたやうに思つて寫生的な妙味は此時始めてわかつたやうに感じたと云つてゐるが、其句は

よその田へ蝨の移る日和かな
低く飛ぶ畔の蝨や日の弱り
刈株に蝨老い行く日數かな
一段は刈り残す田の雀かな
稻の穂や南に凌雲閣低し

などの類で、目新しい自然に接しないと濫作のため其作品は著しく平板に傾いてゐることが目につく。もし彼が實作にばかり耽つてかゝる句のみ作つてゐたら、飛躍的な發展は中々見られなかつたらうと考へられるが、鳴雪との偶然的な俳論が彼を啓發して行つたのである。それは蕪村の「春の水山なき國を流れけり」について、この句を鳴雪は蕪村集中の秀逸となすに反し、彼は數等下にあるものとなしたが、其理由は

「山なき國」とは文學的客觀の景象に非ずして、地理學的主觀の抽象に似たるなり——「國」と云ふは普通の有形名詞にあらず、従つて廣袤數十里一目の下に見得べきものにあらねども、「國」の觀念は幼時より常に各自の心中に描出せられ居るを以て、「國」の一部分を見て直ちに「國」の全體を聯想する事難からず。然れども「山なき」といふ一句を以て「國」の性質を現はすに至りては、一目の下に直ちに認得すべき光景に非ず

といふのが彼の主張であつて、彼の所謂理窟的な要素が混入してゐるからこれを地理的觀念と名づけ、その反對な自分の主張を繪畫的觀念と稱してゐるものである。而して繪畫的景色は、「山々相疊み、樹々相重なり、一山は一山より遠く、一樹は一樹より深く、空間に遠近あり色彩に濃淡あり、前者大に後者小に、近き者現れ遠き者隠るゝを免れ」ないに反し、地理的觀念は「恰も風船に乗り虚空高く颯りて下界を一望の裡に見下すが如」きものであると云つてゐる。彼のこの見解が繪畫的な美の追求にあることはいふまでもないが、後彼は繪畫によつて寫生の誤りでないことを確かめた。彼の寫生に開眼の機を與へたのは牛伴（爲山）不折の洋畫家であつた。「病床語」で彼はそれを語つてゐるが、その年次は詳かでない。しかし牛伴が俳句を作り初めたのは二十八九年頃からであり、不折が子規に會つたのは『小日本』時代の二十七年であるから、二人に

洋畫を聞いたのはそれ以前ではないことは明らかである。そしてそれは子規の寫生の理論のうちとなつた。

——洋畫の長所は寫生にある、寫生に供すべき材料は無限なり。故に洋畫は陳腐に陥るの弊少し。然れども材料を天然に取るを以て選擇宜しきを得ざれば終に没趣味の畫を爲すを免れず。

——若し没趣味の洋畫と没趣味の日本畫とを比すれば洋畫は新奇の點に於て寫生の點に於て優ること一等なり（註3）

これは二十八年の執筆であるが、洋畫と寫生とを密接不離のものとなし、寫生こそ「新」を追する手段と解してゐるが、なほ翌二十九年の「松羅玉液」でも、

——寫生といふ一事は少くとも西洋畫をして日本畫の如き陳腐に陥らしめざるの利あり。況んや寫生ならずして好畫をなすの極めて難きをや——

と云つてゐるのを見ると、彼の寫生はあらゆる藝術分野に亘つての陳腐を去るための手段として寫生を是とするもので、この手段を以て俳句に寫生を唱道するものであつた。即ち明治文學一般に見らるゝリアリズムの精神が、こゝでは繪畫的な美を展開するためのそれに局限され、單に自然の景觀を諷詠するための手段としてのみとり上げられてゐるのであるが、そのために「そもそ

も美術文學にては一事一物を見るに常に善き方より見てあしき方より見ぬは風流の極意なるべし」(註4)といふやうな言葉を寫生と同時に吐いてをり、これによつても子規の寫生が社會の暗面を描かうとした天外などの寫實とは名は似てゐても全く別なものであり、従つて單に寫生・寫實の看板だけを見て進歩的なものゝやうに説いてゐる從來の諸説は大なる誤りであることが知れる。

リアリズムは内容・形式の合一的な運動であつて、内容のリアリズムは形式においてもそれを要求するが故に、リアリズムに徹底すれば五七五といふやうな古典的詩形は崩壊せざるを得ない。だが子規の寫生は以上に述べたやうに對象を自然に局限し、風流的な眼によつて素材の取捨をする底のものであつた故に、いろ／＼の矛盾の衝突を経ながらもとかく一時代を形づくり得た。もしその寫生乃至寫實が對社會的のものとなれば、その詩形は歪んで散文化する實例は後に新傾向・自由律が示したところである。

子規の寫生はホトトギス後年の投げやりなそれとは違つて、十分に思つたところを表現せねばやまぬ良心が伴つてゐた。『病床六尺』にホトトギスの句を評した左のやうな記事がある。

本陣の槍に鴉や明易き

とあるは鴉が槍にとまつてゐるといふ景色であるか、又は槍の邊を飛んで居るといふ景色であるか、よくわからないで作者に聞いて見たところが、作者の意はそんな景色などはわからないでも善いのだといふので、鴉は飛んでゐようと、鳴いて居ようと、そんな事はどうでもよい、たゞ本陣の槍と鴉といふものをもつて來たところに趣があるのであるといふことであつた。其説明を聞いても余は尙漠然たる光景に興味を感じる事は出來ない。本陣の槍に鴉やといふ句を見れば、どうしても客觀的に其景色を目に浮べて見たくなる。従つて鴉の位置を明瞭にしなくては氣がすまないのである。――

とある如き、彼のいゝ加減にしておくことの出來ぬ性格を示してゐるが、定型俳句の認容がさういふ綿密な敘述に適當であるか否かは蓋し重要な問題であらう。たとへ如何なるリアリズムにせよ、「それが一種の外形主義であるところの古典主義的形式主義と結びついたといふのは、それ自身既に一つの矛盾だつた」(註5)ことは子規の考へ得ないところであり、リアリズムに忠實ならうとすればする程、形式と相剋を演ずることゝなるが、子規もこの矛盾を感じてゐたゝめに當初俳句滅亡論を屢々唱へたのであらう。然し「月の都」の蹉跎以來小説へ進出の希望を絶たれ、やむなく俳句に向ふ外なくなつた彼は、矛盾の破綻を彌縫するものとして立ち現はれたことは注意

されなければならぬことであらう。

子規は寫生と共に印象明瞭といふことを唱へた。これは彼及其一派の句が寫實と客觀主義により努めて句を繪畫的ならしめようとしたところから生れたもので、彼と其一派の文學が、自然科学による人生觀と方法論を明確にもたず、その觀察の主體である個々の感覺を基として出發したためによつて起つたもので、恰も歐羅巴において、ルーソー・コロオ・ミレーの自然讚美の寫實主義がマネー・モネーの印象主義に發展したのと同じやうな経路である。我が國に於て外光派の繪を輸入したのは明治二十六年、フランスから歸朝した黒田清輝・久米桂一郎によつてであつて、このため子規がこれらの影響をうけたと云ふ説(註6)もあるが私は採らない。なるほど子規は紫派云々としてこの繪畫の特色を二三ヶ處で述べてはゐるが、彼の言は意識的ではなく、紫派に對する彼の理解の程も疑はしいと云はねばならない。たゞ新派の繪が舊派の作爲的典型的なるに反し常人が繪になると思はぬ事物を畫材となしたこと、彼の初期の寫生との一致點は、やはり繪畫の影響であるかも知れぬが、今は確證がない。

しかしいづれにしても、印象明瞭の理論づけをする前に彼は印象的な作品を作つてゐたので、それは寫生の理論づけをする以前に寫生の句を作つてゐたのと同じである。そしてこれは彼の句

が寫生に忠實にならうとする時、一層顯著に印象的になることは、先に挙げた二十五年の寫生的な「不動堂」と「麥蒔」の句を思ひ起して貰へばよい。

然し印象明瞭の作品を意識してこれを強調したのは「明治二十九年の俳句界」からのやうで、こゝで彼は碧梧桐の句が印象明瞭の特色をもつてゐることを指摘してゐるが、これは作品において彼よりも碧梧桐の方が寫實的に傾き、したがつて印象的な傾向を辿りつゝあつたことを示すものであらうが、こゝで子規は印象明瞭といふ言葉の説明をして

——印象明瞭とは其句を誦する者をして眼前に實物實景を觀るが如く感ぜしむるを謂ふ。故に其人を感じしむる處恰も寫生的繪畫の小幅を見ると略々同じ。同じく十七八字の俳句なり而して特に其印象をして明瞭ならしめんとせば其詠する事物は純客觀にして且つ客觀中の小景を擇ばざるべからず

とて碧梧桐の

赤い椿 白い椿 と落ちにけり
白足袋にいと薄き紺のゆかりかな
乳あらはに女房の單衣襟淺き

などの句を例に挙げ、印象明瞭は繪畫の長所であるから、俳句をして印象明瞭ならしめんとするには出来るだけ繪畫的ならしめるにあるが、かゝる句は寫生・寫實に偏して意匠といふものがない。「精密にいへば意匠なき繪畫意匠なき俳句はあるべからざる筈にて一枝の梅も數顆の梨も其形狀の上にて配置の上に於て多少の選擇と取捨を要すること勿論なれども、他の理想の多き者に比して殆んど意匠なしといふて可なるべし。此意匠なき繪畫俳句が美術文學の上に幾何の價値を有するかといふは一の疑問に屬す。」と云つてゐる。當時に在つてもこの極端な客觀主義は種々論難されたらしく、子規はしきりにその辯難に答へてゐるが、その論難の中に極度の客觀主義のために餘韻の乏しくなるといふことを指摘したものがあつて、子規はこれに答へて印象明瞭は形體美に傾き、五官これを感じるを以て五官美であると云ひ、この美は程度の差こそあれ爺婆に至るまで之を感じる事が出来るが、これに反し餘韻の美は精神美であり、知識によつて抽象せられた無形の美であつて、知識ある者聯想多き者に限つて感ずる故に世人は餘韻を以て最上の美となすが、いづれを優劣となすかは判断することは出来ないと答へてゐるが、そこでは彼は人間の視野を俳句に示しうる限界に比し、「茫漠たる山野の大觀を一望の中に收めんとすれば印象の不明瞭を來し、方一尺の函庭は明瞭なる光景を腦裡に印記す」といひ、字數の制限ある俳句においては、印

象明瞭ならしめんとせば餘韻乏しく、餘韻あらしめんとすれば印象不明瞭になるを免れずとなし、左の表を示してゐる。

餘韻	+	10	
10=0	+	9	
10=1	+	8	
10=2	+	7	
10=3	+	6	
10=4	+	5	
10=5	+	4	
10=6	+	3	
10=7	+	2	
10=8	+	1	
10=9	+	0	
10=10	+	0	

この彼の分析は俳句に關する限り妥當性をもつてゐる。當時の論難者が沈黙したのもそのためであつたらうと思はれる。しかし何人もこゝで氣が附くであらうやうに、俳句の全量を前もつてきめてかゝり、人間の視野を一眸に限つて論じてゐることで、これは俳句の形式の十七字を肯定したことゝ結びついてゐることはいふまでもないが、彼の俳句の取材が平面描寫に傾いてをり、それと十七字の詩型が衝突したことを示してゐるもので、彼がこの内容と形式の相尅を、形式によつて内容を制限することによつて彌縫せんとした其意圖の現はれを我々は見るものだ。

以上のやうに俳句を十七字とし、其形體に懷疑をもたなくなつた結果、その敘法の研究に向ふべきは明らかであるが、例へば

夏木立深うして見ゆる天王寺 碧梧桐

の句に對して、中七を深うして見ゆるとしたところが深くといふより、木立が一層深く見ゆるといふごときに現はれてゐるが、彼自身も如何にして表現を印象的ならしめるかに苦心したものとやうで、その従來のものとの差違は

春雨や傘さしてのる渡し舟 成美

春雨や傘高低に渡し舟 子規

の中七字の印象的な敘法に最もよくあらはれてゐるやうに思はれるが、それと同時に二十七八年ごろからの唯美的な傾向が早くも蕪村の句に傾倒すべき素地をつくつてゐたとも見られる。

先にもいふ如く印象主義は近代人の感能が形體美に傾き、且つ個人の感覺に重點を置いて客觀的になつて行つた結果生じたもので、俳句に於てはすでに蕪村の作品にその先蹤を見出すことが出来るが、形式の古典主義とは相反撥するものであつたために、子規の印象主義は或る限度以上に出ることが出来なかつた。そこに時代の制約が見られるが、後に新傾向・自由律時代に、意識的に印象派の理論をとり入れたと思はれる井泉水等の作品と、子規のいはゆる「印象明瞭」の句とを對比すれば、いづれが形式に忠實であるか印象に忠實であるかは明らかである。

要するに印象主義的な手法は、子規及び其一派のみに見られるものではなく、明治文學一般に

見られる文學現象である。蘆花・獨歩・花袋等はいふまでもなく、紅露の小説に於てさへ何程か印象的でないのではない。たゞそれ等の作品は自由形式であり、子規のものが形式の制約を肯定した上でのものであつたために、ヨリ集約的に字句の研究が重ねられたものに外ならない。もちろん子規はその印象主義を短歌にも寫生文にも應用したのであるが、恰も泰西の印象派の畫家が印象を捉へることにのみ専心して思想を忘れたやうに、單に人生に寄與せざる印象のための文學として半ばは俳諧趣味の傍觀主義の上に成長したのである。

それはとにかくとして、所謂印象明瞭の句は明治俳句の一特色であつたにちがひない。しかしそれだけに芭蕉などの作品に對比する時、それほどの深みのないものになつてゐることも亦争はれないと思ふ。これは抑も何に基づくかといへば、主觀的には子規が社會生活から切離した藝術を信じてをり、芭蕉ほどの苦惱をもたず、したがつてそれへの熱と精進が、芭蕉ほどでなかつたことを示すものに外ならないが、客觀的には明治といふ時代が、それ自體封建文學の一形態たる俳句の成立を掣肘したものであるとも云へよう。

要するに子規は藝術の思想的背景を理解しなかつたばかりでなく、いはゆる感官美の追求に傾き象徴的なもの、及び精神美の究尋を閉却してゐたために、繪畫的な美の追求にのみ急なあまり、

平面描寫に傾いた結果詩形との衝突を必至ならしめんとするに至つた。その衝突こそそれを彌縫するために彼及び其一派が短歌へ、更に寫生文に赴かなければならなかつたところのものだ。

註1 『彌縫書屋俳句帖抄』序

2 二十六年七月二十一日附碧梧桐宛書簡

3 「樺三昧」(二十八年)

4 「歳晚閑話」

5 片岡良一氏「日本文學史概説」明治時代(岩波「日本文學」)

二、配合と蕪村調

子規が寫生を唱へつゝもなほ事物を見るに、「常に善き方より見てあしき方より見ぬは風流の極意」などと云つてゐたことは前述した通りだ。この言葉は寫實とは凡そ正反對の浪漫主義の言葉であるが、彼の寫生はこの矛盾した二面をもつてをり、それが絶えず相尅を演じつゝあつたのである。これを作品の上から見ても二十五年の

ふるまはん深草殿に玉子酒

郭公太閤様をちらしけり

や、二十六年の

行く春や商人船の立烏帽子

ちら／＼と伏勢見ゆる夏野かな

二十七年の

春日野の子の日に出たり六歌仙

天の川敵陣下に見ゆるかな

といふやうな非現實な句が寫實の句にまじつて發表されてゐるのは、寫實と共に浪漫的な彼の好みを明らかにするものである。二十八年には

だんだらのかつぎに逢ひぬ臘月

夕霧より伊左さま參る師走かな

行列の檜五六本麥の秋

といふやうに、その非現實な傾向が二五六年より一層濃厚になつて來てゐるやうである。リアリズムと古典的形式の矛盾が漸次發展しつゝあつたと見るべきであるが、二十八年の『俳諧大

要』では

空想より得たる句は最美ならざれば最拙なり、而して最美なるは極めて稀なり、作りし時こそ自ら最美と思へ、半年一年も過ぎて見たらんには嘔吐を催すべき程いやみなる句ぞ多き——と空想と寫實を二元的に見るやうになり、たゞ美なる作品をなし得れば可なりと考へてゐるやうである。

空想によりて俳句を得んとするには兀坐瞑目して天上の理想界を畫き出すも可なり、机頭手爐を擁して過去の實驗を想ひ起すも可なり、古俳書を繕きて他人の句中より新思想を得來る亦可なり、數人相會して運座競吟探題などするも可なり——

——寫生は一室に立籠つても出來ぬことはない(註1)

寫生を提唱しそれを唯一の標語とし來つた彼は、こゝでは全くその反對なものを提唱し、その作法を高調しようとしてゐるので、その急激な變化には誰しも驚かぬはないであらうが、これこそは先に述べた相尅が、寫生の一面を克服して頭を擡げ來つたものに外ならなかつた。そしてその頂上から一步迂り出した彼は、それ以後年と共に蕪らに轉落しなければならなかつた。が、この状態を飛躍的ならしめたものは二十八年の從軍後、彼がどつと床に就くやうになつたことである。

る。この経緯を彼自らの口から語らせよう。

明治二十九年は足が立たなくなつて殆んど常病人になつた爲め外へ出る事が出來ず、會々に車に乗つて出ても不自由極まつたもので、一足二足の歩行すら容易でないので此秋諸友と目黒に遊んで不動の山を辛うじて廻つて來たのが自分に取つては最後の大旅行であつた位なのだ。(註2)

少しく註を加へれば、先に述べたやうに彼の寫生的な手段によれば、外へ出て眼新しい事物に接することが必要であり、そのため彼はこの「最後の大旅行」を病を押して敢行しなければならなかつたのだ。そしてこの目黒吟行が、文字通り「最後の」旅行となつたばかりではなく、この時得た寫生の句が事實において「最後の」寫生句とならなければならなかつた。その経緯はなほ次のやうな彼の言葉によつて明らかになる。

——さういふ風で始終引籠つて病牀に就いて居たから、靜かに俳句を研究する機會は甚だ多かつた。けれども病牀の狭い天地で苦しみながら考へるのであるから自分の句に活動したところは無い。又た斬新なといふ處もない。唯だ前年の儘で幾らか句が練れて來たといふ位の事である。唯だ其中にも僅かに自分の記憶に残つてゐる所を言ふて見ると、蕪村の新花摘の句をいた

く感心したのは此年の一小出来事である(註3)——

さうしてその新花摘に傾倒した理由を一、一題で七八句づつ同じ日に作つてゐて、それが皆粒揃ひの句であること、二、その句を蕪村自ら消したり直したりしてゐるが、その頭を惱まして修正などしてゐる句が一向よい句でなく、却つて無雑作な日記のものに佳句があること。即ち蕪村ほどの作家でも、かう直したらよいと思ふ句が案外つまらぬ句であり、或は自慢して居る句がそれほど句でなかつたりしたことについて、ほとぼり俳句といふものゝ性質がのみこめたやうに思つたと云つてゐる。むろんこれはこのまゝ信じていゝだらう。然しこれだけが蕪村に心酔する原因の全部であつたと考へることは甚だしい誤りである。この彼の言は是非前年來の彼の病氣・それにつれての寫生の行詰りと、自然に接することが不可能になつた結果のそれへの憧憬、且つそれ以前よりの彼の内部において醗酵しつゝあつた浪漫的な傾向・配合主義への發展(後述)と關聯させて考へなければならぬ。

彼が蕪村の句に接したのは決してこゝに始まるのではない。岡野知十の『俳諧風聞記』には「日本派が『蕪村句集』搜索の手は、如何なる縁よりしてか、遂に洒竹が書棚の上に及べり、こゝに『蕪村句集』の寫本の一部は保存されしが、日本派の人々が蕪村句集に接したるは正に此時にあ

りと傳ふ」なる記事がある。「此時」なる時が何年か不明であるが、この記事が二十八年九月毎日新聞に掲載されたものであるので、それ以前のことなのは明らかである。子規の『俳人蕪村』には左のやうに記されてゐる。

——余等の俳句を學ぶや類題中蕪村の句の散在せるを見て稍其非凡なるを認め之を尊敬することと深し。ある時小集の席上にて鳴雪氏いふ、蕪村集を得來りし者には賞を與へんと。是れ固と一場の戲言なりとはいへども、此戲言は之を欲するの念切なるより出でし者にして其裏面には強ちに戲言ならざる者ありき。果して此戲言は同氏をして蕪村句集を得せしめ、余等亦之を借り覽て大に發明する所ありたり——是れ實に數年前(明治二十六年か)の事なり——

この記事は恰も『癡祭書屋俳句帖抄』の序に二十七年のことを記して、「だん／＼に天明の趣味が這入つて來て、前には擯斥してをつた艶麗といふ趣味を解するやうになつた。」と云つてゐるのとも符合するし、前掲の彼の作品が唯美的浪漫的な句風に變移しつゝあつた事實とも符合する。この時代に蕪村に接したものであるのは疑ひないところであるが、當時はまだそれに傾倒すべき心理が熟してゐなかつた。彼はまだ此時代には、さうした空想的な手段にのみ頼らなくとも寫生的な句を作ることができた。それが病氣で寝こむやうになると、自然に接することができず、句

作に困難を感じ、遂に蕪村の句に心から傾倒するやうになつたものと考へられる。元來幼少から自然愛好の癖あり、且つ「人間より花鳥風月がすき」であると殊更に宣言してからの彼は、病氣のために心ならずもそれに遠ざからねばならぬことが可なり苦痛であつたらしい。二十九年八月二十八日附在北海道の井林氏宛の書簡に、「此度は北海道漫遊に出掛けては如何など貴書中に誘はれては感慨多少ぞ昨は奥羽を草鞋にかけ木曾を笠一つにかくれて遊びしもの雪隠に行くだけのことにくるしめられ候——」などあるが、その病苦以外の精神的苦悶を現はしてゐるとも見られるであらう。彼は自然に飢ゑたのであるが、その時圖らずも新花摘に接したのである。

新花摘は蕪村の日記であるが、その巻頭は俳句に初まつてをり、しかもそれが子規の好むところの夏の句であり、その中に若葉とか卯の花とか、若楓・牡丹といふやうな頗る印象的な句が多くあるので、これにも容易く新花摘に心酔した理由の一が見出されなくもなと思ふ。こゝで蕪村の句に心酔したのでなくして新花摘に傾倒し、其一題十句といふ句作法や無雑作な句作に感心したのだといふやうな見解があるかも知れないが、しかしそれ以後『俳人蕪村』を起草したり、蕪村忌を修したり、蕪村句集の論講を催したりしたことから考へて、彼自らいふ如く一題十句といふやうな句作法にのみ感心したのでは決してないと思ふ。『俳人蕪村』や蕪村句集論講で、如何に

彼らが蕪村の句を過賞にすぎるまでに高く評價してゐるかを見れば、其見解の正しくないことがわかる。これを一言にしていへば二十六年にさまで心を惹かなかつたものが二十九年には全面的に心酔するやうになつた、そこにこの唯美的・印象的の句を迎へる心理が成熟してゐたことを我々は見るものだ。

この事はまた子規の生活の窮乏と病苦とによつて、現實回避的な心境に變化しつゝあつたことも密接不離な關係がある。彼の社會的地位の向上にも拘らず、日清戦争前後の物價騰貴が彼の物質生活に多大な影響を與へたことは先に記したが、「二頃の田をもつて田舎に閑居」したいといふ彼の言は單なる氣まぐれや冗談ではなかつた。然し「世の中にある限り人間並に働かねば一家をいかんともしがたい」有様で、従つてそれを遁れるには觀念的な理想郷をつくつてそこに住みつくより外はなかつたのであるが、その理想郷はもはや人生的なものでも社會的なものでもなく、唯美的乃至耽美的な夢幻の境地であつた。そこに初めて蕪村の句のもつ夢幻的美に陶酔するやうになつた根基があつたのである。即ち人生的な希望も、曾て彼の懐いた文學の社會的な有用説も、「道德の心に訴へて善を勵ます」効用も、其寫實的進歩性と共に反對な一面に克服されて、空しく唯美主義の牢獄に落ちこむのであつた。